
サキュバスキラー Project Re Alice

算裏 友城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サキユバスキラー Project Re Alice

【Nコード】

N5102M

【作者名】

算裏 友城

【あらすじ】

私は追われていた。誰にかつて？ そんなの私を知りたいくらいよー！ ああ、誰か助けに来てくれないかなあとか思っていたら、来たよ来たよ、スーツ姿の王子様が。しかも彼、若いしそこそこかっこいいし、お金持ちだしいいところだらけ。よし、私をこんな所から早いとこ連れ出してえー！！

サキュバスキラー本編より二年前、イーザはとある依頼の帰りに
たまたま立ち寄った街で、ある少女と出会う。その出会いは、P r
o j e c t R e A l i c eと呼ばれる計画に彼を巻き込んでし
まうのだった。少女をめぐる争いに、果たしてイーザはどう立ち向
かうのか……………。

第一話 リアリス

燃えていた……視界は全て、真つ赤な炎で染められる。
戦火は全てを奪い去っていった。家を、街を、そして優しくつた
ナデアフ先生でさえ……。

私はただ、街の惨状を見て立ち尽くすしかなかったのだ。
その日、その時から、私はまた一人になってしまった……。

「うあっ!？」

少女は突如、目を覚ました。慌て身を起こし、周りをキョロキョロと見渡す。すると、すぐに自分は夢を見ていたのだなと自覚した
様で、はぁと一息ついた。

薄黄色のタンクトップが、冷や汗でぐっしょりだ。

「またあの夢か……あーあ、最近は見なくなってたのになあ」

と、彼女は呟き、再びごろんと寝そべる。

羽毛布団でも、ウオーターベッドでもない、粗大ゴミとして放置
されていたベッドにだ。しかも新聞紙の薄布団もセツト。

とても寝心地いいとは言えないけれど、地べたよりは幾分かマシ
だった。

(あー……ホントに惨めよね、こんな生活。ここから抜け出す
にはやっぱり王子様よ、王子様に取り入るしかないのよっ!! 無

理矢理、既成事実でも何でも作って、玉の輿つ、それしかないのよっ！！）

もう、ゴミ捨て場で近年増え続ける残飯をあさるのも、スクラップ置場から使えそうなモノを持ち逃げするのも、金持ちに媚を売って恵んでもらうのも、いい加減イヤだった。高級レストランで分厚いステーキ食べたし、最新の電化製品をバンバン買いたいしね。だけど、彼女にそれは許されない。地味に、コソコソと生きるしかない。

何故かというそれは……………。

「ああつ、居たぞオオオオ、あそこだ！！」

ギヤーツ、出たああああ、私をこんな生活に叩き落とした原因がぁ！！

そう、彼女はとある連中に追われる身であったのだ。

少女はすぐさま、三日前によく見つけた理想のゴミ溜めを遺憾ながら放棄し、猛がつく程のスタートダッシュをもって逃走を開始した。

「待てええええい！！」

野太い声が、路地の壁に幾度も反響し響く。

突然の追い掛けっこの始まりだった。

（もう見つかったか………しかあし、ここで私に追い付けると思っなよぉ！！）

と、少女は思っていた。地の利は我にありと。

この細く、網の目の様に入り組んだ路地はもう、彼女の庭みたい

なものだからである。

「クソオオオオ、待てつつつてんだろオオ!!」

やがて、姿をはつきり現す追跡者。

ある者はスキンヘッド、ある者はモヒカン、またある者はアフロヘアと、髪型はてんでバラバラ、毛髪個性だけは満載でお腹一杯な連中であつた。

しかし、男らにはいくつかの共通点が見て取れる。まず一つに、いずれの者も格闘もののマンガとかに出て来そうな位、過剰に筋肉がモリモリである所。

二つ目に、いずれの者も、私を狙っているという所。

そして最後に、いずれの者も左肩に黒色の、懐中時計とウザギをかたどつたタトゥーを描いている、という所である。

しかしまあ、過剰な筋肉にゴツゴツした身体も、ここではかえつて邪魔なのだ。

だってここは、家を失つた貧困層の人々が最終的に流れつく場所、通称、汚水通り。

表通りの様な、にぎやかでいて華やか、清潔感溢れる街並みとは真逆のココ。当然ながらゴミやなんらかの物品が通路上に散乱、住み着いた人々もまた、路上に座りあるいは寝転び………という、ごちゃごちゃとした狭く苦しい裏路地であるから、身体の小さい少女が益々有利だ。

ちよつと振り返つて見れば、計算どおり。

彼女が積み上げられた箱の下をくぐり、塀を乗り越え人を跨ぐまた間に、奴らは壁に、物にあるいは人に足や身体をとられ、もたついている。

ぐんぐんと追跡者を引き離し快調に駆ける少女に、リーダーと思しき男………スキンヘッドが声をあげた。

「待つてくれってばあ、お前を逃がしてしまったらワシらクビにされるんだよオ!!」

「知るかああそんなの!! とつと諦めて帰んなさいよ!!」

「大丈夫だつて。今度の所はいいぞおー、部屋は広いし清潔だし、三食メシ付きにバス、トイレ付き、大画面のテレビだつてある贅沢で素敵な物件だ、保証するぞこの俺様がなあ!!」

「ウソつけええ!! 前、そう言われてノコノコ着いて行ったらトイレしかない、不潔な狭っ苦しい部屋になかば監禁しやがったでしようがああ!! 拳句にメシは一日一食、第一乙女の身体を散々いじくりまわしやがつてえ、お嫁行けなくなるわ、あんな所居たらああ!!」

激論を交わしつつ、状況を確認する少女。

この先、正面は行き止まり。左右方向に通路が伸びる。えつと、確か左が行き止まりだったから、右へ……………。

「そいつあ違つぜ、お嬢さん!!」

「ギヤアアアアアうおとめえキイイーックウ!!」

「なつ、うおおおおお!!?」

右に潜み、突如飛び出した男。

それに対し、逃げるどころか思わず蹴りをかました少女。

男は予想外の一撃によるめき、コンクリート壁で頭を打ち、なんと気絶してしまった。横目に確認。

肩に、例のタトウー有り。やっぱり奴らの仲間だったのねと納得

する。

「うオオオオオ、よくも俺様の弟をを!!！」

スキンヘッドが、気絶した男を認め、言った。

「知るかあハゲええ!! 飛び出して来る方が悪いんじゃないかあ!!
! 思わず、はしたない乙女キック使っけしもうたわあー!!！」

叫びつつも、少女の頭の中には逃走ルートが正確に示されていた。
次は、ええと……………この先は十字路になっけるから、あっち行っ
てこっちに曲がって、下水道にでも身を隠すかな……………と確実に脳
内マップに赤線を引いていた。

と、その時、彼女は不思議な者を目にする。

それは、この汚水通りに似つかわしい、スーツ姿の人物であった。
キチンとした身なりである……………そして肌は黄色、つまりはアジ
ア系の人間。

その男は、何かの紙切れを持っていて、キョロキョロと辺りを見
回している。さては、迷子か……………と、少女は判断する。

って、そんな場合じゃない、スーツ姿の男を横目に少女は走る、
走る。

曲がり角を抜けて、えつと十字路が……………えつ……………えええ!!?
少女は目をこすり、もう一度先を見やる。しかし、変わりはないな
った。絶望の光景は。

あるべき十字路はなく、代わりに目に写ったのは三メートル強の
壁によって阻まれた通路。

つまりは行き止まりであった。

「ウソオオオお!!? 何で何でええ!!? ………………さてよ、えつと

……うああっ！！ 右じゃなくて左だったあ！！」

致命的かつ絶命的なポ力であった。

やってしまった………心底、自分の間抜けさに嫌気がさし、頭を抱える。

ドタドタと響く足音。追跡者らがついに、曲がり角を曲がりなだれ込む。その人数、六名。

六名の怖い系兄貴達だった。

「散々てこずらせてくれたじゃねえか、リアリスウウウ！！ おとなしくこつちへきなさい、このスキンラビットがすてきなぶっけんまでおつれしよう」

「うつさいハゲ、“おとなしく”以降がメチャ棒読みじゃねえか、断じて拒否するわ！！ 私を連れて行っていいのはホワイトタイガーに乗ったプリンス様だけなのよオ！！」

絶対にハゲやデブはイヤ、と追加もしてやった。

「………オイ、モヒカンラビットにアフロラビット………俺様は今日だけで二回もハゲ呼ばわりされた。俺様はハゲなのか、ええ！？」

「いえいえ、アナタは立派なスキンヘッドです、スキンラビット」

「ハゲとは毛根が死滅し毛髪が消え荒れ地となる事を指します。スキンラビットはわざと、人工的に毛を刈っているだけ………ファッションなのです」

「という訳だ、分かったかコムスメエエエ！！ 以降俺様をハ

ゲと呼ぶなあ、そしてえ、お前の蹴り一撃でノックアウトされた俺様の弟をモヤシっ子とか呼ぶんじゃないやねえ!!!」

「スキンもハゲも同じでしょうが、ハゲハゲハゲハゲエエエエ、皮膚頭、皮膚頭アアア!!!」

「このお……………言わせておけば……………ゆるさん、絶対にゆるせんぞオオオオ!!!」

「まあまあお待ちを、スキンラビット。……………どうです? この娘、生意気な口がきけなくなるまで^{なまぶっ}黽てやるというのは……………」

アフロヘアーのアフロラビットの提案である。

「男女男か。しかし、雇い主からは傷一つつけるなどか言われていた気がするのだが」

「ええ、ですから外見からは分からぬ様に傷付けてしまえば良いのですよ、分かりはしませんって」

何やら不穏な空気漂わせる会話である。

だが、少女……………リアリスには分かっていた。どうせこうなるだろうと。

そして、スキンラビットが言い放つ。

「そうだなあ……………よし、今まで散々骨を折らせてくれたお返しだ。リアリスウ聞いてたる、良かったなあホワイトタイガーのプリンス様がこんなにいるぞ、うえっへっへっへっへっへえ!!!」

無理して笑うな!!!

フッフ、だが計算どおり。こんなタイミングで私が叫び声をあげれば、きつと来てくれる。

そう、ホンモノのプリンス様が!!

「きゃああーたすけてえ、怖い人達に犯られちゃうー!!」

「!??? ……………?」

時が凍りつく。風が肌にメチャ冷たい。

男らは恐らく、生まれて初めて鳥肌をたてた事だろう。

出来るだけ可愛く、ぶりっこ気味に……………そんな些細な努力が、言い知れぬ寒さとある種の恐怖を呼び覚ますトリガーとなった。

本気で男らは、え? とかうっわっ……………とかいった顔をしている。

一方、憐れな乙女は信じきっていた、切望していた。

(早く来てよお、マジで犯られちゃうから……………)

当然であるが来る訳がない。それでも、乙女はまだ信じている。

そうだ、プリンス様が来ないのは悪役のセリフが足りないからだ。あとアイツらが一言発したら私が大きな悲鳴をあげる。これで来る、絶対に!!

さあ、何か言えハゲ、何かを……………。

「……………キモチ悪っ」

えええ!? 何よもうっ、もっと気の利いた悪役チックなセリフを言いなさいよ。

例えば、“グへへへッ、どれだけ叫ぼうがこんな所には誰も来やしねえぞおう”とか!!

「もういい、フツーに連れて帰るぞ」

「はい」

「はい」

「ちよっ……ちよっと待ってよ、さっきまでのヤル気はどうしたのよ。ほらっ、ヤル気出して。はいっ、言っちゃってハゲ」

「効率重視効率重視イー、女一人で百万ドルアア」

「変な歌を歌うなっ！！ ああもう、誰か助けてええー！！」

と、その時であった。呻き声をあげて、後方の二人が……彼ら流に言えばロンゲラビットとカクガリラビットが、どさっと倒れ込む。

（きつ、来たああー、プリンス様っ！！）

「なっ、何者だあ！！」

男らは一斉に振り返り、リアリスは期待の眼差しを投げ掛ける。そこに立っていた者、それは……。

（えっ？ さっきすれ違ったスーツの……）

そう、そこに立っていたのは、先程リアリスとすれ違った場違いの黒スーツ男であった。

背丈は百七十後半位で高過ぎず低過ぎず、黒髪、黒目の黒ずくめ。

まっ、まあプリンスっぽいはないけれど、この際ゼータクはなし。さあ、この男達をかつこよくのしちゃって!!

「俺の名はイーザラントという……失礼、この二人がこちらの質問に対して有無を言わず殴り掛かって来たのでな、つい正当防衛をしてしまった」

さりげなく、拳をさする彼。うっん、強そうだ。

「改めて聞きたいのだが、あの女、あんたらのか？」

と、イーザラントと名乗る男はリアリスを指差し言う。

「いいえ、違います……。」

「そうだ、何が何でも連れて帰らなきゃならねえ、金のなる木よ
!」

ああっ、クソハゲエエエ!! 喋らんでもいい所でえ!!

「………すまんが、あの女を買わせて欲しい。いくらだ？」

ええっ!? か、金で解決しちゃうの!?

第二話 イーザラント・ダスト・カナートウス

スーツ姿のプリンス様は、少女を指差し言い放った。

「いくらだ？」

と。えええ！？ 金で解決しちゃうの！？

確かに一番手っ取り早くて手間の省ける手段だけでも！！

しかし、そうはいかなかった。スキンラビットが怒りを抑え言う。

「何を勘違いしてるのか知らないが、コイツは商売女じゃねえし、第一金の問題じゃねえ。それよりも兄ちゃん、頼むから首を突っ込まないでくれるか？ 今ならフサフラビットとカクガラビットをやったの大口に見てやるからよお」

と、彼は全力で異国のスーツ男に凄んで見せた。成程、こんな彼らを見て積極的に交戦の意志を叩きつけるのは、物語の主人公位である。

イーザとて、例外ではなかった。

「……………そうか、商売女じゃないのか。騒がせてすまなかった、では俺はこれで……………」

ええええええええ！？

リアリスは、彼の返答を全く予想していなかった。それどころか、考えてすらいなかった。

そこはフツー、そうはいかない、とか言わねえ？

それとも、私の思考回路が年代物だとも？

「ちょっと待たんかいいいいい、テメエこのイエローモンキーが、私を助けなさいよオオ!! コイツらに捕まったら、きつたねえバツチリ3Kなトコに放り込まれてちゃって身体をあちこちいじくりまわされちゃうのよ!!」

「お前を助けて、俺に何か得があるのか？ 俺はただ、出来るだけ若くキレイで病気持ちでない商売女を探してただけなんだが……それに、出来る事なら厄介事は御免こうむりたい」

くそつたれ、このプリンス野郎見返りを求めて来やがった!!
しかも商売女を探してたですつてえ!!？ チキショー、この場合私の選択肢一つしかねえじゃねえか!!

「ああつもうう!! いいから助けてえ、やらしたげるっ、やらしたげるからあ!!」

半ばヤケクソに言った言葉であるが、イーザラントという男は予想以上に食い付いた。

「マジでか!?!」

「うっ………うん、マジよ大マジよオ!! 何ならどんな変態プレイでも………」

「あ、それはいらん」

「とっ、とにかくマジだから助けてよオ!!」

「それを最初に言ってくれよ!!」

直後、イーザは敵目がけ駆け出す。

「ハアア、チビが！！んな小さい身体で何が出来る」

実際、その通りである。スキンラビットが言う様に、彼ら毛髪個性軍団は全員が全員、背丈が二メートル近いもしくは超えている上、ガッチリ系の体型である。

タンクトップやシャツからはみ出る生腕には、これでもかという過剰な筋肉が見て取れ、日に焼けた褐色の肌がメタリックな質感と堅牢さを強調している。

特に、スキンヘッドの肉体といったらハンパじゃなく、完全にボディービルダー体型……腕なんてイーザの腕の太さの二倍近くあるのだ。

だが、彼らは事実をすっかり忘れていた。フサフラビットとカクガラビットを一瞬の内にしたのは誰かという事を。

しかも彼らには自らの肉体の過信という付け入る隙があったため、大番狂わせが起こる確率を自分達で高めてしまったのだ。

そのチビは、信じられない速度で一気に間合いを詰めて来ると、慌て咄嗟に繰り出されたアフロラビットの拳をかわし、反撃とばかりに強烈なアッパーカットを見舞う。

どうやら、その一撃でアフロラビットは意識をとばされてしまったらしく、僅かに身体を浮かせた後、そのまま崩れ倒れこんだ。

「何イ！？」

予想だにしない秒殺劇に、スキンとモヒカン、そして毛髪で頭部にハートマーク描くラヴラビットは戦慄する。

だが、驚くのはまだまだこれからだった。

更にすばしっこくイーザは動き回り、続いてモヒカンとの距離を

詰める。

「こ、このおオオ!!!」

だがモヒカンとて百戦錬磨。即座に態勢を整えると、必殺技の回し蹴りを繰り出す。風切る、黄金の右足である。

この一撃、ただの蹴りにあらず、一部では有名な“警官殺しのモヒカン”の名を欲しいままにした、殺人キックなのである。

だが………いかに威力があろうとも、当たらなければ意味はない。イーザは体躯を沈め回避。空を切る右足。

そして目を外したほんの一瞬の間に、間合いはもう、詰まっていた。

「はやっ……………」

ボディীবローが、モヒカンの脇腹にキレイに決まる。攻撃直後で体勢を崩した彼が受け切れるハズもなかった。

この時、背後からイーザを強襲するラヴラビット。しかし、彼のストレートパンチもまた宙を迷い、直後には彼の顔面をカウンターパンチが捉えていた。

二人共にたつたの一撃で、おねんねさせられてしまったのだ。

「うっ……………うそだろ……………」

「強い……………素敵」

イーザは、倒れた彼らに見向きもしない。

さりげなくスーツをポンポンと撫で叩き、砂ぼこりを払いながら言う。

「さて、どうする？ 素直にその女を買わせてくれよ」

「グツ……………な、ナメるなクソガキがああ！！」

スキンラビットの手が、その場に転がる鉄パイプへと伸びる。

大方、それを凶器とするつもりであるうが、イーザの対応は正確かつ迅速であった。

パンツ、と乾いた音、カンツ、と金属音。

何かが命中した鉄パイプは、カラカラと弾む。

その、何かの正体を理解したスキンラビットの顔は青ざめていた。

イーザは、発砲したのだ……………その手には、銀色の拳銃が一丁、鈍い輝きを放っていた。

さすがにスキンラビットはおとなしくなった。銃持つ相手とやり合う程、この時点での彼はバカではない。

「まつ、待て待て、降参だ降参。悪かったよ、チビなんて言つてよお……………で、ナンだ、女探してるのか、ああ紹介してやる、紹介してやるよ、とびきりの女を。だっ、だからリアリスだけはカンベンしてくれよっ、なっ？ 俺達にも仕事ってもんがあるんだよ」

「いや、いいよ。俺はコイツが気に入った、この女でいい」

「そっ、そこを何とかしてくれよ、なあ。お前にはこんな小便臭いガキは似合わねえって」

「待てコラハゲ、訂正しろ訂正」

「百万ドルだぜ？ このガキ連れていくだけで。頼む、分かって

くれよ」

「残念だが、交渉は決裂していた、最初からな。それにタダとは言わない……………ほらっ、持って行け」

と、イーザは懐から札束を取り出し、スキンへと投げた。しかし、札束をキャッチしたスキンラビットの顔に、怪訝が張り付いたのはすぐの事だ。

「なんだこりゃ……………?」

「ペテユニオールダイ札、計三十枚だ、受け取れ」

「どこの国の金だコレ!？」

「知らないのか? ここから南西に約……………」

「うるせええ、さっきからふざけやがって……………クソガキがああああ!！」

スキンラビットは怒りのあまり、ついに銃持つ相手へと突進を敢行した。

「撃てるもんなら撃ってみやがれええええ、その瞬間テメエは人殺しだコラアアア!！」

「冗談じゃない、百万ドルが三十万ペテユ、ペテユニオダ……………ペテユニオールダイだとお、しかも失敗れば俺らはタダじゃ済まないかもしれないのだ……………やってやる、何としてもリアリスを!! ！しかし、イーザはスキンラビットのタックルをひよいと、簡単に

かわし、拳銃の台尻で首筋を殴打してやった。

「がっ……………」

どうやら、スキンラビットもまた気を失ったらしい。

何という強さ、何という戦いぶり。少女リアリスは確信に至った。この人こそ、私のプリンス様だと。

えっと、顔は悪くないし……………金持ちよね、あんなにお札取り出してたんだし。それに強いし、結果的には私を助けてくれた……………正にリアリスにとっては、パーフェクト、理想の物件であった。

そして今、何よりのシチュエーション。この男、少々ノリは悪そうだが、結果オーライだ。

さて、後はこの男に気に入られ、いかにして玉の輿まで持つていこうかとリアリスは考えていると、

「大丈夫か？」

とイーザが手を差し伸べて来た。

間近で見れば、ますますいい男ではないか……………いよっし、勢いでやらしただげるとか言っちゃったけど、この男となら後悔はないわむしろ望む所！！

「大丈夫、です……………」

リアリスは、出来るだけ弱々しく、儂げに言った。いかにも純真無垢な乙女ですよ的に。今更遅いが。

「元気ないな……………本当に大丈夫か？ 何なら病院に……………」

「大丈夫でエえす!!」

「そつ、そうか。なら、早く逃げる事だな。何で追われてるか知らんが」

えつ……………？ ちょい待て!!

「あ、あのう……………やるってのは？」

とてもはしたないが、彼女は聞かずにはいらなかった。だって、人生かかってるし、人生かけるつもりだし。

「えつ？ ……………冗談なんだろうが？ ヤル気出す素振りはしちまったが」

そつ、素振り!!？

「第一、見たトコお前、未成年だろ？ 俺の居た国じゃあな、十八歳以下のガキには手エ出しちゃイケナイ事になってんの」

そう来たかつ、ならば!!

「大丈夫、それはクリアよ!! この作品に登場するキャラクタ―は有無を言わさず全員十八歳以上だからっ!!」

「……………仮にそうだったとしても、素人はイヤだ。俺について来れないし、手加減は出来ない」

「素人じゃないよ!! やりまくりの経験値タップリの女ですからっ!!」

処女だけどー!!

「なら尚更ヤダ。そんな一見して純真無垢っぽい外見でやりまくりとか、マジで引くわ……………」

「ぐっ……………どないせえっちゅーんじゃああー!!」

「おとなしく逃げね。そうすればいいと思うよ?」

「くそう、こうなたら無理矢理開通式じゃああ!! こっち来んかい!!」

「えっ、ちよっ……………何、この馬鹿力!？」

こうしてリアリスは、イーザを無理矢理捕獲し、引き摺っていった。

沸き上がる、原理不明な乙女? パワーで。

第三話 計算外だ

現在、時刻はイーザの腕時計で午後九時を示していた。という事は、この国では午前一時を回った頃である。

とあるホテルの一室に、イーザとリアリスは居た。ここに宿泊する事は、既に決定済みだ。

勿論、二人が泊まるうとしているのは民間のホテルでもビジネスホテルでもなく、皆が考えている様な、いかがわしいあのホテルである。

さて、チエックインの際、イーザは別々の部屋にしよう、二部屋借りようと最後の抵抗を試みたのだが、リアリスによって阻止され、現在の状況に至った。

六畳程度のベッドルームに男と女が二人きり……片や、気まずそうにイスに腰掛ける男、イーザ。

片や、ベッド周りから机の引き出しなんかを念入りにチエックする女、リアリス。

彼女は完全にヤル気満々だ。まるで、エサを巢へとお持ち帰りした荒ワシの様だ。

「ちよつと……シャワー浴びて来るから……」

さすがのイーザも困り果ててしまい、結果、バスルームへ逃げ込むという選択をした。

一気にスーツを脱ぎ捨て、バスルームへタオルと下着を持ち、飛び込む様に入室。

幸い、半透明のガラス張りのドアにはロックが付いていた。

念のため……てか保身のため、確実に扉をロックすると、ハア、

と溜め息を一つつく。

「何故、こんな事に……………」

自分はただ、危なっかしい少女を助けただけである。

一応、男らとリアリスの関係や立場、状況なんかを会話させて引き出し、その後はもっともらしい理由をつけて助けてやった。

イーザという男が少々、ひねくれ気味の面を有しているのは、何も今に始まった事ではない。

今回だってそうだ。本当は理由が確定した時点で問答無用に少女を助けてやりたかったのであるが、素直にただ助けてしまつてはイイ人になってしまう。

何故かイイ人呼ばわりされるのを嫌う彼は、助けるにあたり、とりあえずは何か見返りを要求する。

相手の足元を見てやる事で、イイ人から普通の人へとランクダウンさせるのだ。所詮は見返り欲しさで動く者だと。

まあ、商売をする人間には常識なのかもしれないが、イーザの場合は何なる状況であつても徹底している。

しかし今回、リアリスとかいう少女に下手に情けをかけてしまったのがいけなかった。

しかし、この女、見るからに金なんて持つてなさそうだし、他に何かあるかといえれば一つしかなかった。だからとりあえずは求めるフリをして、いらないと拒否してやれば、あつちは、ラッキー得したと帰つていく予想であつたが……………。マジになつてる様だ。こちらの言い分など聞きやしない。

自分はそのもそもも商売女しか抱けないのだ。そういう相手ならば仕事だからと割り切る事が出来る。

無論それは、精をすすする事を生業とする闇の住人らにも言える事

である。

イーザはそんな、あちらも商売であるから、という感情を抜きにしてしまうのは何故か、ためらわれた。それは、彼の過去の体験が関係しているのだが、この場では割愛しよう。

では……………イヤならば抱かなければいい、と思われるかもしれないが、それは一番ダメだった。これは、彼の能力に関する事である。

先程、スキラビットらを倒した際にも、彼はその能力を使用し身体能力の底上げをしていたのだ。

その能力……………それは“無限精力”という能力であった。

一時的に身体を極度の興奮状態にし、リミッターを僅かに外す。つまりは火事場の馬鹿力みたいな状態へと身体をもつてゆくのだ。

しかし、注意事項として精神のリミッターまで外してしまうと、身体能力は更に底上げされるのだが、理性が働かなくなってしまう。これでは、ただの獣であるから、人間が相手の場合には興奮しつつもクールでなければならない。

更にはこの能力、恩恵よりもマイナスの方が凄まじく大きい。

その最もたるマイナスが性欲の異常増大で、欲求不満が激しく現れてしまう。

無限精力……………言い替えれば無限性欲。何日もやらない日々が続くと、身を刻まれる様な、気が狂ってしまいそうな欲求の嵐が身体を支配し、精神を蝕んでゆく。

こうなると日常生活ですら困難になってしまふという恐ろしいものなのだ。

だからこそ精力尽き果てぬ彼は、こうして異国へ単身依頼で赴いた際には、出来るだけ経験豊富で、少々乱暴に扱っても大丈夫な商売女を探す必要があったという訳である。

だが、あのリアリスとかいう少女には荷が重過ぎるだろう、イーザの性欲のはけ口となるには。

第一、彼女は商売女でも何でもなし。面倒な事に、背徳心や後ろめたさが着いてまわる。
金を貰い、身体を提供する、そんな割り切った関係でないからだ。彼女を壊してしまう危険だってある。

(どうしよう……)

まあ、ずっと考えてても仕方がない。取り敢えず身体を洗おう。
空の風呂に跨いで入り、シャワーのノズルを下へと向け、蛇口をひねる。

蛇口が一つしかない為、水しか浴びられないのだろうが、こんなクソ暑いところで湯なんて浴びてられない。

しかし、出て来た水を見て、思わずイーザは言葉を洩らす。

「濁ってねえ？」

と。ノズルから出て来たのは、茶色がかった水である。しばらく水を出し続けても、薄茶色以上の改善はあり得なかった。

「おいおい、どうなってんだ？」

と、イーザが言ったその時である。

“こんなモンだよ、この辺りは。水道引いてあるだけでも上等じゃない”

と、半透明ガラス張りのドアの外から声がする。

「何してる……」

ドアのすぐ外に映るシルエツト。リアリスだ。

“ドア開けてよ”

「なんでだよ」

“サービスで、お風呂場でのごほーしを……………”

「いらんわ!!」

“またまたあ、カマトトぶっちゃってえ。風呂場に入った時点でイーザは私の手の中に居るのも同然なのよ。逃げれない、逃げれないって”

「うっさい、本気で逃げ出すぞこの部屋から!! いったくが俺はな、女に恥をかかすのなんて慣れっこだからな!!」

“イーザってばドーテイじゃあるまいし、別にいいじゃない”

「……………よくない!! とっ、とにかく待て、今身体洗ってんの!!」

商売の人と人外はカウントしないと……………。

ま、まあそれはいい。この際仕方がないので、少々泥や錆混じりの水であっても、身体を流しておきたかった。

スーツ姿で屋外をあれだけ動き回れば当然、大量の汗が出る。アンダーシャツなんて、絞って雑巾にしてもいい位だった。

さらっ、と汗だけを流すと、イーザはシャワーを止めて、ガラス張りのドアの外を慎重に確認した。

まだ居やがる……しかも、よくよく見れば、身体には何か白色のものしか身に付けていない。

彼女はさっきまで、天然ダメージショートパンツに、ノースリーブのタンクトッププードルというスタイル……いわゆる元気っ娘スタイルであったはずだ。

さては、タオルか何かを身体に巻いているのか？

「おい……リアリス」

イーザは一言、出来るだけ厳かに言った。

“あつ、ようやく私の事、名前で呼んでくれたね。なあに？”

ぐっ……可愛らしい反応しやがって。

「たつ、タオル取って来てくれよ。忘れてた」

実は、タオルのみならずトランクスも持ち込んでいるけれど。

“私の身体に巻いてるやつでいい？”

やっぱタオルか、その白いの……！

「何でだ……！ ベッドん所に新品あったろ、それ持って来てくれ」

“冗談なのに……ムキになっちゃって、かわいい”

「いいからっ、持って来てくれよ。なっ、頼む……！」

と、イーザは身体を音もなく拭きながら言った。

“……………仕方ないなあ、はいはい、待ってなさいよ”

リアリスはそう言って、歩いてゆく。その足音に耳を澄ませ、ベッドルームへと彼女が入った一瞬のスキに、イーザは作戦を執行する。

くどい様だが、タオルもトランクスもバスルーム内に存在し、既に身体を拭いて下着を身に付けた。

後は、バスルームの入口に置いてあるスーツを着るだけだ。

暑いので我慢すれば、あのスーツは、この状況において放射性物質遮断防護服なみに頼りになる。

音もなくロツクを外し、外へと出てスーツを……………を？……………
スーツがねえ！？ まさか、あの女……………。

作戦の先を行かれたのか、読まれていたのか！？ リアリスはスーツを持って行きやがったのだ。

止むなしにトランクス一丁という姿で、ベッドルームへバンツ、と入ってみれば、リアリスはベッドの上で待っていた。

ニヤニヤといやらしい、小悪魔の笑みを顔に浮かべ、仰向けに寝転がっていたのだ。

本当にタオル一枚だ……………この女……………。下着も身に付けてない。

「おい、リアリスよ……………俺のスーツ、どこやった？」

「うん、それはあ、コ・コ。」

「無理に色っぽい声してんじゃねえ、鳥肌立つわ！！ って、テ
メエ、俺のスーツを身体の下敷きに!？」

「フフ、その通り。これを取り返したかったら私の身体に触らないとダメでしょ？ 絶対にマチガイが起こるよフフフフ……………」

「ぐっ……………卑怯な……………と言いたい所だが、計算が甘かったな
ありアリスウウー！」

「なっ、何だとう!?!」

「おらああああ!?!」

「ギャーッ!! そんなウラワザがつ!?!」

つまりは、イーザがベッドの片側を持ち上げ、リアリスを転げ落ちさせた。

ウラワザでも何でもない、ただの力技、もっと言うなら自然の摂理、ニュートンの法則である。

ベッドを元に戻すと、素早くスーツを取り返すイーザ。
いたたたた……………と、ゆっくり身体を起こすリアリス。ハラリと
タオルが落ちるのに構いもせず。

「タオル!! タオル取れてる!! 早く隠せ!!」

その健康的な日焼けに、タンクトップラインのスツと入った、み
ずみずしい、以外とナイスボディを今すぐ隠せ!!

「見ちゃったね？ 視姦しちゃったね？ もうお嫁行けない、セ
ールポイントの健康的な日焼けにタンクトップラインのスツと入
った、みずみずしい、以外とナイスボディなピチピチ十代お肌を見
ちゃったね？ こりゃあ責任とって最後まで……………」

「張り切るなあ!!」

「えっ、 “ いい×××と××××してんなあウへへ?”」

「どんな聞き間違いじゃああ!!　なあ、の部分しか合っていないわあ!!」

息も荒く、叫ぶイーザ。この発言を最後に、辺りは一旦シーンとする。

だがすぐに、クスクスというリアリスの笑い声で、静寂は破れた。

「フフフフ、アハハハッ、あーっ、楽しいね」

「……………ハアア……………もう、叫ぶ気力もねえよ……………こんな騒いだの久し振りだぞ」

「私はねえ、初めてかも、こんなにはしゃいだの」

タオルをゆつくりと身体に巻き付けると、自然の笑みでリアリスは言う。

企みも毒気も狙いも除けば、素直に可愛らしい少女だといえた。

「なあ、どうしてお前はそんなにこだわるんだよ、俺と……………そのっ、するのに」

二人はベッドに腰掛ける。背中合わせに。互いの熱が伝わり感じあえた。

「えっとお、まず、なかなかいい男だから、金持ってるから、ア

イツらから助けてくれたから」

「なかなか、ねえ」

イーザという男は、意見が分かれるもののそれなりの美形ではある。

彼がもし本格的に髪形をいじりメイクをしたら、イケメンアイドルユニットに居ても違和感は全くないだろう。

本人には、あまり自覚はない様だが。

「あと……………私をどこかに連れて行ってくれそうだったから……………」

急に、彼女の声のトーンが沈んだ。これまでの明朗快活な感じから一転、影を濃く匂わせる。

イーザもまた、彼女の様子に合わせ、声をひそめる。

「どういう事だ？ 俺に着いてきて国を出たいのか？」

「そうだね……………出来ればお嫁さんとしてだけど」

「急過ぎる話だな。そんなに深刻なのか、お前を取り巻く状況は？ 良ければ、詳しく聞かせて貰えるか？」

「別にいいけど……………私が育ったあの時、あの場所と、さっきのあいつらは関係があるみたいなの……………ちょっと、ファンタジってるけど笑わないでね」

「ああ、笑わねえよ」

リアリスはゆっくりと語り始めた。自身の中身をだ。

第四話 彼女の昔と村民の最期

リアリスは、ゆっくりと自らの過去を語り始めた。彼女が、ファンタジってるから、との前置きをしてからの話だから、相当に荒唐無稽であるのを、イーザは覚悟していた。

今をさかのぼる事、四年程前……ある大陸、ある国、ある地方の外れに、その村は確かに存在していた。

地図にはただの砂地、としか表記されていない、砂漠のど真ん中にある小さな村であった。

何故、そんな所に人々は住み、また、何故生きていられたのか……。

それは、この村特有のあり得ない現状、すなわち気候、土地、水も何もかもが、まるで人智を超えた何かにコントロールされているかの様にベストであった。

周囲百キロに渡り、水場や山脈も一切ない砂ばかりの地形だというのに、突然に雨雲が発生、適度な雨が降り注ぎ、地下水脈がそこいらに存在していて、土は水捌けが適度で養分が良好……オアシスなんか目じゃない、あらゆる作物が育っていた。

昼は三十度、夜間が十度以下、氷点下近くなるという唯一と聞いていい悪条件（とはいえ、通常の砂漠であれば、場所にもよるが昼は五十度近く、夜間は氷点下となる場合がある）さえ我慢出来れば、これ程いい所は、この国にはなかったのだ。

この土地が現れたのが、更に三年程前らしく、一部の移民族によって発見されたのが初めてで、そこから、ウワサを聞いた人々が最後の樂園を求め集まると、集落を形成したらしい。

当初は土地をめくり、他民族との小競り合いや争いが絶えなかったそうだが、やがて村……いや、街と呼んでいい規模に成長したそこを防衛するものが出来た……らしい。

私は、詳しくは知らないけど……どうも兵器というカテゴリーに当てはまるものみたい。

さてと、それで、そんな嚴重で蟻一匹たりとも見逃さない包囲をした街に、一人の少女がやって来た。

いかにして防衛兵器とやらを突破したのかは知らないが、やって来たのだ。

その少女はボロ布を身に纏い、いつもいつも同じ場所に座り込んで、ただじつ、とじていた。

いつしか少女は、その国の言葉で、動かざる者を意味する“ドウアト”と呼ばれていた。

そんなドウアトは、ただじつとしているだけ、雨の日も、かんかん照りの日も。

そんなドウアトはどうやって生きていたのか？ それは、“ナデアフ”という男のお陰だった。

英雄を指し示す名を持つ彼は、優れた医師でもあったそう。

ナデアフは、ドウアトを何故か常に気にしていた。気味の悪いドウアトを。

朝と晩、日に二回も食料と水をドウアトに与えていたから、彼女は生きていられたのだ。

“こらこら、ダメじゃないですかドウアト、こんなにボロボロこぼしちゃあ”

“人に何かをしてもらったら、どんなに小さい事でもありがとう、と言つのですよ”

“どこか、調子の悪い所はありますか？”

そんな毎日が続く内に、いくらかの会話をする事や表情を作る事を覚えた（思い出した？）ドウアトは、ある日ついにナデアフにこう言われる。

“ウチに来ませんか？”

と。ドウアトはぎこちない笑みを浮かべ、うん。と答えた。

そしてついに、彼女はそこから立ち上がる。“ドウアト”でなくなつた瞬間だ。

ナデアフの家は、村長の家に次いで大きな建物だった。

そこに招き入れられた彼女を、ナデアフは実の娘の様に可愛がつた。

その証拠だと思われるのが、健康診断だ。まあ、ナデアフが医者故になのか、たんなる心配性からきているのかもしれないが、度々ドウアトの身体の具合を、屋敷の地下室に設置されてあつた様々な機械で確認していた。

さて、そんなナデアフのお陰もあつて、彼女はどんどんと人間らしさを取り戻し、文字や一般教養を身に付け、二年後には、それはそれは美しい、スタイル抜群な元氣っ娘へと姿を変えていた。

健気な彼女は、ナデアフ医師の手伝いをし、恩を返そうと考えていた。

だけど……平和というものは長くは続かない。

彼女……ドウアトがこの街に現れたとされる日、六月二十五日がまたやって来た時だった。

ドウアトが、いつもの様に地下施設で健康診断を受けている時である。

突然、轟音と共に地面、空間が揺れる。明らかな、爆発音だった、それは分かった。

ナデアフは、慌て表へと駆け出してゆく。ドウアトも後を追った。外へと飛び出した二人が目にしたもの、それは、紅蓮の炎に飲まれてゆく街の姿であった。

逃げ惑う人々、その中に紛れ、明らかに人でない異質なものの残骸が紛れていた。名状しがたい、丸みを帯びた鉄の塊みたいなの……多分、これが街の防衛兵器とやらなのだろう。

それらを見て、確かにナデアフは、いかん、もうか。等と呟いていた。

続いて彼は、ドウアトに出来るだけ遠くへ逃げなさい、と言った。当然ながら、ドウアトは拒否する。けれどもナデアフは必死に願う。だから彼女は……最終的には彼の願いを聞き入れた。そして何度も何度も謝りながら走った。

ナデアフは最後に言う。

“お前はもう、自分の足で走れる、動かざる者ではない、ドウアトではないのだ。”

また何度も何度も謝りながら無我夢中で走って、彼女は燃える街を脱出した。

「成程、結構へヴィな過去ではあるな……しかし、お前その街に来る前にはどんな生き方をしてたんだ？」

いろいろと彼女の供述には突っ込みどころや不自然な点もあるのだが、嘘を言っている様にも見えない為、まず、イーザはそれを問うた。

「それが……覚えてないというか、全く知らないというか……」

「余程嫌な目にでも合ったのか……？ まあ、それは今は置いて、それで？」

「うん、それで……」

結局、ドウアト事私は、三日三晩砂の上をさ迷い続け、ついには限界が来て倒れてしまう。

だが、私は死ななかつた。気が付くと、私は白い部屋にいた。白い天井、白い壁、白いベッドに白衣を着た人達。

そこからは地獄みたいな日々だった。毎日毎日、変な機械で身体中を検査されたし……部屋は汚かつたし、トイレしかないしご飯は一食しか出なかつたし……本当に変になりそうだった。なりそうだったんだけど……。

あの日、あの街に起きたのと似たような出来事が起こった。

私が眠っている時だった、ものすごい音と揺れがして……多分、爆発が近くであったんだな、と思ったただけ。

とにかく、それで目を覚まして、いつもはロックされてるドアを引つ張つたら……なんでか知らないけどすんなり開いて、また夢中で逃げ出して……。

それで今度は、たまたまこの街に流れ着いたって訳。これが、何か月前だったと思うんだけど。

イーザも見たでしょ？ 何度か、あんな感じの変な連中に追われ始めたのよ、全部逃げ切ってたけど。

で、今日、危ない所をイーザに助けられたという訳なの。

「そういう事なんだけど……フツーに信じてるよねイーザってば」

「（肝心な所が適当で突っ込みどころ満載で、今一つ要領を得ないが）まあ、そんな非現実的な話、割とよく聞くからな、商売がら悪魔とか化物とかも」

「へえー……もしかしてイーザってさあ、悪魔ばらいとかそんなの？」

「ん、まあ近からず遠からずってところだな」

「成程、そりゃあお金持ちのハズよね、魔除けの人形なんかを一っ五千ドルとかで売ってる訳だし」

「とんでもねえ悪徳商法だなそれ！！」

「精水を眠っている女の人にぶっかけたり」

「正しくは聖水だろうが、新手の変態行為みたいだぞ!!」

「ブリッジして階段を降りてきたり……」

「それ、はられる側!! 俺、はらう側!!」

絶対にわざと言ってやがるなコイツ。ってか、活字でしか分からんモノによく突っ込めたな俺。

「ところでねえ、本当に、私の身体はいららない？」

と、突然、リアリスは思い出した様に言った。

思わずイーザは振り返る、彼女もこちらを向いていた。

今までの彼女とは違う。上目遣いで勝負し、手で一枚きりのバスタオルを押さえるという姿、スタイルの良さも相まって、ガキっぽさなどもう微塵も感じなかった。

妖艶な彼女の姿は、少しずつではあるがイーザの目に、脳裏に焼き付き始めていた。まるで、魅惑の魔法でも使われたみたいに……。

「本当に、いららない？」

「……少し、つまみ食いくらいなら……いいかもしれないな」

ついに、イーザは言った。そうでも言ってやらなければ、彼女に失礼ではないか、とさえ思えたのだ。

始めは騒がしい子供な奴、とか思っていたけど、今、こうして見るとなかなかどうして……悪くない、わるくない。

「本当!?!」

リアリスの表情が、ぱあっ、と明るくなる。喜怒哀楽の表現を忘れていたとは思えない変わりようだ。

「どうやら、俺をからかっていた訳ではないらしいな、とイーザは確証を得る。」

「ああ、少しつまみ食って、持ち帰りさせて貰うでしょう。外へなら、いくらでもエスコートしてやるよ……男の約束だ」

彼女は更に満面の笑みを浮かべた。ウソ偽りのない本当の顔の美しさときたら……美しさを武器の一つとし、その者の理想とする顔になるとも言われる悪魔、通称夢色魔、サキユバスなどの連中と比べても謙遜はない。

「思わずイーザが唾を飲んだのも頷ける。」

「うん、イーザ大好き!!」

と、彼女は飛び掛かって来て、イーザを押し倒す形となった。柔らかな感触が、即座に全身を電気信号が如く伝う。

(大好きかぁ……んな事言われたの、多分初めてだなぁ……)

すぐ正面には、リアリスの顔があった。視界一杯にだ。

互いの息づかいさえ、はっきりと聞こえる程の間近である。

やはり、辺りの雰囲気も、女性の化粧なのだ。薄暗めの照明、光と影のコントラストがより一層、彼女に華を添える。

「えっと……実はね、私初めてだから、そのう……リードしてよね?」

「あつ、ああ……」

心臓の鼓動が、バクバク聞こえる。その言葉を最後に、二人は自然と動き出し、そして……。

と、直後、絶妙なタイミングでコンコンツ、と扉をノックされる。二人の世界にヒビが生じ、急速に薄れていった。

イーザとリアリスは、一瞬で我に帰り、さっと互いに身を引き離すと視線を逸らした。なんとも気まずい空気である。

「……………」

「……………ごほん………つたく、空気読めよ………誰だクソツ」

ブツブツと、行き場のない愚痴をこぼしつつイーザはゆっくり立ち上がり、最低限ズボンだけは身に付け扉の方へと歩いてゆく。

「はいはい、どなた様で？」

不機嫌をあらわにしてイーザは言った。

しかし、肝心の反応は返って来ない。覗き窓すらついていないため、外の様子を内側から見れもしない。

「んだよ、イタズラか？」

と、イーザは自然にドアロックのツマミへと手をかける。その動作を見るなり、リアリスが叫ぶ。

「開けちゃダメ！！　もしかしたらアイツらかも……」

「えっ……？」

時、既に遅かった。カチャツ、と音をたて、扉のロックが外れてしまう。

このホテルは当然ながらツーロック方式でもないから、ツマミのロックただ一つによって扉は固定されている。

つまり今、外と内を隔てる唯一にして最後の予防線が取り除かれた。

直後、扉が凄まじい力で強引に引つ張られ、ドアノブに手を掛けていたイーザごと、外へと引き摺り出される。

そして、身体を廊下に半分近く程さらした所で、ようやくイーザはノブを離しブレーキ、即座に部屋の中へと飛び込んだ為、それを喰らわずに済んだ。

扉、その中央、そのまま引き摺り出されていればイーザの頭があったポイントに煌めく、白銀。

刃渡りが三十センチはある大型のナイフ状の刃物だった。刺さるところか扉を貫通している。

「なっ！？」

「あーあーあーあー、外しちゃったぜ、俺とした事がよオ」

廊下に、そしてイーザやリアリスの耳に、男の声が響き渡った。

第五話 トイドルデイ、トイドルダム

「あーあーあーあー、外しちまったぜ、俺とした事がよオ」

声……甲高い男の声が廊下に、そして室内のイーザとリアリスの耳に響き渡る。

すぐに声の主は、開いた扉の前にぬつ、と現れた。まず、奴は扉を貫通した刃渡り三十センチ強の刃物、大型のナイフを何の造作もなく引き抜くと、こちらへと向き直る。

声の感じや喋り方から、若い男だろうとは思っていたが、それは的中。

だが、奴の姿形は普通ではなかった。

このクソ暑い中、全身を、上から下まで黒一色で統一された長ソデ長ズボンの服を身に付け、更にその上に、やはり黒のマントまでもを身に付けている。

そして顔……顔の左半分を（鼻と口は全部出ている）無機質の仮面が覆っている。

仮面が無表情なだけに、生身の右半分に張り付く、歪んだ、悪意をたたえる笑みが、より強調されている形となっていた。

「お楽しみなトコ申し訳ねえんだけどよ、時間でえーす、ホンバ
ンタイムは終了おー」

甲高い上、ネチネチとまとわり付く様な口調の男。若干、耳障りだ。

「……何だ、テメエは？」

未知の男を睨み付け、イーザは言った。まあ、少なくとも味方である訳がない。お友達にもなりたくないタイプの奴だわな。

「おおつとあ？ 何何？ 俺的にはよオ、テメエこそ誰だよってカンジなんだけど。用があんのはリアリスちゃん一人だしなあ」

狙いはやはりリアリスか……ならば、あのハゲ共の仲間と考えた方がいい。

だが、ハゲ共らと違って、過剰な筋肉だったり大柄だったりはない。分かりやすい実力の特徴がないのだ。

しかし先程、あんなエモノを正確に投てきして来た事といい、態度といい……かなりの戦闘能力、それもパワーだけに依存しないスタイルであると思える。

そして多分、この男一人が相手ではない。

扉を引っ張り開けた者が居る。扉は、俺から見て左方へと開く訳で、ナイフは右側から飛んできた。

もう一人は確実に居ると思われる。予想だにしないタイミングでの奇襲も十分あり得るのだ。

「フンだ、イーザは私を守ってくれるプリンス様なのよ、ねえー」

「……えっ……あつ、ああ、まあ、そうだけど……」

「ちょっと、もっとテンション上げなさいよ」

「……プリンスイーザです。彼女は渡さんぞ、怪人半マスク共オオ……」

「成程、深いな……」

と、突然、扉の裏からもう一人が現れる。

コイツも、ナイフ男と同じ資格好だが、仮面は顔の右半分となっている。

そして開口一番、低く冷徹な感を受ける声で、イーザの発言に何故か感心していた。

「兄貴！？ 何を言ってるんだよ、怪人半マスクとか言われたんだぜ！？」

「まあ、落ち着け。このイーザとやらは、怪人半マスク“共”と言った。私の存在を認識し警戒しての事だろう。そして何よりこの男、ラビットらを倒している……自らのペースに持ち込むためにわざわざお前を挑発していたのだよ。」

へえ、あの弟仮面は単純っぽいからと思っていたが……あの兄貴とかいう奴がそこを補っている。やりづらい相手だな。

ところで、リアリスがえっ？ だの、そうだったの？ だのと言っているが、聞かなかった事にする。

「申し遅れた、イーザとやら。私はトイードルデイ、コイツが弟のトイードルダムという。我々の目的は周知の事と思うが、その娘の保護にある、おとなしく娘を渡してもらいたい。そうすれば、痛みを与える必要もなくなる」

「フン、弟の方は完全に俺を殺そうとしていたがな？」

「……スマン、言葉が足らなかった様だ。娘を渡して頂けたら、

苦しめない様、一撃で殺してやるという意味だ」

「交渉の余地、無し。俺にとって魅力的な要素は何一つないぞ？
残念だが全力で抵抗してやる」

まあ、仮に、お前の命は助けてやるからと言われても、応じる気は更々なかった。むしろ、殺すと公言しているだけでも、まだタチは良い方だ。

「そうか、分かった。ダムよ、好きにしていぞ。私の武器は狭い場所には向かないからな」

そう彼が言い放つてすぐ、弟、ダムが待つてましたと言わんばかりに、こちらへと突撃を敢行する。

「じゃ、じっくり死ねよオ!!」

「チイイツ、アルカヘストオオ!!」

正面、向かい来る大型ナイフのプレッシャー。

対しイーザの手元に集まる、多量の金の光の粒、それらは一瞬で黒色の拳銃を構成した。

魔力の弾丸、エナジーブレットを吐き出す、いわば魔銃である。

即座に発砲、躊躇いなど感じていたら、それこそ手遅れ。

一発、二発、三発の魔力弾が金色の尾を引き、トイードルダムへと飛来。

しかし、狭い室内にも関わらず、敵の動作はあまりに素早い。

表現は悪いが、小ネズミかGかというくらい。

イーザが秒の間、一の事しか出来ないとしたら、ダムは四の事をしている。だから、イーザには、彼の姿が僅かにブレて見えた。

一発目、二発目は頭上と左方を逸れる。三発目は直撃コース。

しかし、それはある種、希望だったのかもしれない。ダムの斬撃は弾丸の速度を上回っていたのだ。

イーザの目には、外した、とかそんな風にしか写らなかったが、ダムは切り裂いていた。弾丸を。

「ヒツハアアアア!!」

跳躍、天井近くまで跳んでからの、斬撃が振り下ろされる。

三発目が外れた時点で回避行動を開始していたイーザだが、速度に差が有り過ぎた。

反応しきれぬハズもない、黒の拳銃、アルカヘストが両断され光へ還る。

そして次撃、イーザの身体を狙っていたと思われる横薙ぎの一撃。

思い切り飛び退いていたため、体勢は崩れたもののどうにか回避出来た。

しかし、もしもダムが本気……即殺モードであったなら、イーザの死はこの時点で確定していただろう。ベッドに寄り掛かる形となった、この瞬間のイーザに咄嗟の対応は不可能。

だが、ダムはこの絶好のタイミングに追撃を行わない。しかも、くるくると大型ナイフを、まるでペン回しの如く器用にもてあそび、イーザの様子を伺っていた。

「じっくりコースだつつたる？ 死ぬかも助けて、を何度も味わってから死なせるって兄貴からの命令なんでね。まあ、もつともこの程度が本気なら、もうバラしちまうけどさあ」

フツ、フフン……なつ、成程、こつ、こつちが本気出す時間をくれるってわ、わわ訳だな三流め。……いいだろう、こつ、怖くなどないんだからね！！ 見せてやるさ、俺のマジを！！

「リアリスウウ、ナンかエロい事言ってくれええ！！」

「えつ、えつ！？ とつ、突然何？」

突然のあまりにぶっ飛んだイーザの発言に、素っ頓狂な声をあげるリアリス。

しかし、これは必要事項だ。そう、無限精力発動の為の。相手がエロい女性ならばそれだけで発動するのだが、生憎の男二人。

ならば、唯一この場の女性、リアリスに発動させてもらおうしかないのだ。

「早くう、アイツらに殺られちまう前に、早くう！！」

とびきりの奴を、早く言ってくれええ!!

「えっと……じゃ、ちゅーしてあげる?」

「ソフト過ぎる!! 俺は小学生かあ!!」

「やらしたげる?」

「それ、もう聞いたあ!! もっと具体的かつ過激にいい!!」

(……何言ってるんだ、コイツら……?)

(深いな……手強い連中だ……)

「xxxxやらしたげる!!」

「いいぞ、もう一声だ、さああ来おおーい!!」

「xxxxからxxxxを使ってxxxxしてxxxxxxxまでしてあげるううう!!」

「うおおおおオオオ、サービス満点、来たぞたぎってきたあ、沸き上がって来たあ、無限精力、開っ、放う!!」

エロは力、エロは生命、エロは生き様、エロは正義、無限精力才
ーバードライブー!!

そんな二人の睨み合いも、直後に終了、いざぶつかり合いとばかりに飛び出す二人。

しかし、間合いが詰まるつかという時であった。

“その戦い、待つんだね”

「!!」

「!?!」

二人の間合いの中心、衝突予測ポイント横の壁が、突如の声と共に碎け散る。

轟音、そして飛び散る壁片の嵐が二人を襲う。

ダムは咄嗟に間合いを離し、何者かの介入を回避。

しかしイーザは、もろに爆心地、破片の中央にその身を置き、更には壁を突き破って侵入した何かに吹き飛ばされ、対角上の壁に衝突した。

「がつ……!?!」

「イーザア!?!」

なん……だ？ 戦車でも突っ込んで来やがつ……たか……？

しかし、侵入した何かは予測を遥かに下回る矮小さであった。

少年だ……それも、リアリス程の身の丈しかない。

「なつ、なんだテメエは!?!」

ダムが言う。と、いう事は、奴らの仲間でもないのか？

「ハハツ、何のジョークだい、僕が誰かだなんて……本当に知らないのか、どこの田舎育ちだよ、君は」

その少年は、未だ声変わりもしていない様である。中性的な声で言った。

「やれやれ仕方ないね、無知な君達に名乗ってあげるよ。我が名をしかと、心にその身に魂に刻め、我が名はオリオン、機械仕掛けのオリオンなり!!」

「オリ……オン……?」

第六話 Orion of the machine device

「オリオン……機械仕掛けのオリオン、だと？」

突如として乱入して来た少年は、自らをそう呼称した。

二人が、ダムとイーザがぶつかり合おうかというタイミングに、ホテルの壁を突き破って侵入してきた少年である。

そのパワーからしてみても、タダの人間ではないだろう。

彼は堂々と、トイードルディ、ダムの二人に対し真っ直ぐ立っていた。

「さあさあ、皆おとなしく僕の言うことを聞いてよ、そうすれば、無駄な争いは避けられるからさ」

腰に手を当て、自信満々に発言。胸もぐぐつ、と反らして、あたかも強固な城門が如く立ちほだかる。

「ああ……？ ガキが、確かにそれなりの力はある様だが、調子に乗っちゃあいけねえなあ」

「止めるんだダム、あのオリオンとかいう奴は……」

「うっせえよ！！ ここまでコケにされて黙ってられるかああ！！」

止める！！ 何度も反響する兄の声も、頭に血の昇り切った弟には届かなかった。

既にダムは、オリオン目がけ飛び出していたのだ。

「死ねエエエエ!!」

一瞬の内に間合いは埋まる。もう、有効範囲内。

両手の中の大型ナイフを、一切の迷いなく振るう。

そんなダムに対してオリオンは、その場を微動だに、ピクリともしていない。

ただ、視線だけは常に刃先を追っていたが。

「さっ、刺さるう!!」

思わず、目を逸らすリアリス。直後、刃はまずマントコートを、そしてオリオンの胸を切り裂いて……。

ところが刹那、ガギイン、と大きな金属音。

弾かれたのはナイフの方だった。

「なっ、何イ!？」

「だから言ってるよね、機械仕掛けって!!」

切り裂かれたマントコート、その下から現れたのは、機械部品の露出したメタリックな手足、そして胴体……。

機械仕掛けのオリオン、その名の通り、彼の全身は機械仕掛けであっただけだ。

サイボーグとか強化人間とかのレベルじゃない、もはやロボットだ、純機械だ。

「なら、顔はどうだよっ!!」

瞬間、切り上げの軌跡描くナイフ。

「それは避けるさ、首から上は生身だからね」

体躯を更に反らし、斬撃をスレスレで見送るオリオン。

そして、さりげない回避行動の最中に、繰り出される膝蹴り。

何の苦もなく、息をする程容易い、そんな動作。

しかしその一撃は、深々とダムの胴体へとめり込む。

ドツ、と鈍く地味な音。

ダムを襲う、下から上へ意識までもを飛ばされた様な感覚。もう、天井に自分が有る様に感じた。

「ばっ!?!」

膝に沿って持ち上がる、持ち上げられる身体。

吹き飛ばさせてすらくれない、内部破壊の一撃。

「必殺、オリオン掌オオ!!!」

そして素早く繰り出される、掌底にも似た、更なる一撃。右の手の平が、ダム腹部を正確に穿つ。

やはり膝蹴りと同じく、内部にダメージを与える攻撃。

強化された彼の骨や臓腑やらをも易々と破壊した。

最早声もあげられない、か細い呻く様な声すらも喉をのぼらない。

「これで終わりだ、オリオンパアンチー！」

左手、今度はストレートパンチが彼を打つ。

ダムは凄まじいベクトルを与えられ、兄目がけ飛ばされたのだ。

「ぐっ、ここまで!？」

衝突、ぶつかり合った彼ら兄弟は、そのまま廊下へと退場させられ、向かいの部屋扉に激突。ようやく止まった。

その場に崩れる弟、トイードルダム。ディーはどうか意識を保っているらしかつたが……。

(ダム……チィ、ダメか、今の私達ではアイツを……)

「さて、アドヴァンスドヒューマンってのはこんなものなのかい？ それともこれからガッツを見せてくれるのかい？」

「……御免こうむる」

デューはそう呟くと、ぐったりしている弟を抱え、走りだす。

あの一撃、弟が命中したにしてはよく動くなと、オリオンは唯一感心した。

デューはそのまま窓ガラスを突き破り、外へと脱出、一目散に駆けてゆく。

オリオンは一旦、廊下へと出て、外を眺め、二人の逃走を確認すると、満足気に室内に戻って来た。

……オリオンは凄く強かった。イーザが負けてた相手を、まるで赤子の手をひねるが如く倒してしまったのだ。

正直、そんな彼が敵だったらと考えると、ぞっとするのだが……。

「さて、と……ではリアリス、僕と来てもらいたい」

「ええっ!?! 連れ去り魔がこんな所にもっ!?!」

結局、コイツも私の身体目当てかいつ!?! と一人脳内ツッコミ。レイプ魔、連れ去り魔、まあとにかく、オリオンはそんな奴だった。

カワイイ、シヨタツ気な顔しておいて……恐ろしい子だ。

「失礼な、この伝説正義オリオンをつかまえておいて連れ去り魔とはっ!?! 遺憾だよっ、もの凄く!?!」

メチャキレた。どうやらこの子は、自分を悪みたいに言われるの

が嫌いらしい。

「君らのピンチを救った、君の保護を見返りなく行おうとしている、一体どこが悪の連れ去り魔だ！！ 現に僕は、君の同意なしでは連れて行かないよ。オリオンを侮るな！！」

「えっ！？ それなら私がイヤって言ったら連れて行かないの？」

「当然だつ、僕は伝説正義だぞつ、嫌がるご婦人を無理矢理連れ去るだとか、そんな真似をするものか！！」

「ならヤダ、絶対について行かない」

「そこを何とかならないですか？ 僕はアナタを連れて帰らなければならぬという、使命を帯びているのです」

拒否った途端の低姿勢。成程、確かに、強引に私を連れ去る気はない様である。

「お願いします、アナタのその身には一切、傷をつけさせないと約束しますから」

うつ……かつ、カワイイ、目が潤んでるよこの子。ようやく、年相応の顔になった。

……もしかしてこの子もプリンス様なんじゃ！？ 年下の王子様かぁ、それもいいかも……。

って、待てよ、何を考えてるんだ私は。演技かもしれないではないか、気を付ける。

“よし”とか言った瞬間、エサ目がけ突撃してくるかもしれないのだ。

「あのね、私は……その、先客があつて……そのイーザがこの国を連れ出してくれるって言ってるんだけど、どうかな？」

「イーザ……？ ああ、そこで虫みたいになつてる、ゴキッぽい何かかい？」

ひどっ！！ けど、まああれからそのまんま放置されてたからね…… っつか、そもそもアンタがやったの、アンタが。

「僕は強い、何せ伝説正義、正義の代弁者だからね。だが、その彼は僕みたいに強くて、真に君を守ろうとしていたのかい？」

「そっ、それは……」

「君が即答出来ないのは、どこかで彼に対し疑念を持っているからなんじゃないのかい？ 元々、信じるに値する男なのかい？」

うつつ…… そう言われるとちよつと……。

ええい、何で迷いが拭えないんだ私はっ！！

私が着いて行こうとした男は、信用に値しない程度の男なのかっ！！

「まっ……待てよ……勝手に話進めてんじゃねえ……」

「イーザ！！」

まるで、リアリスの迷いを打ち消すかのようなタイミングで、イーザはその身をゆっくりと起こした。そして、その言葉である。

「俺は虫じゃねえ……イーザってんだ……」

「それはさつき知ったよ」

「残念だが……俺は、リアリスにもう、代金の前払いをして……もらってんだ……意地でも、連れ出さなきゃならねえんで、な……」

「なっ、何だって!!?」

イーザの、別段普通、ありふれてそうなセリフに、オリオンは何故か過剰な反応を示す。

驚きに近いといってもいい。

「? ……あの子、何を驚いて……?」

「やっ、止める、カッコいいセリフはやメロ……止めるんだああ!!」

「ええ!? 言っというて難だけど、そんなカッコいい事言ったつもりは……」

「そうかつ、イーザ、多分その子は、自分が悪者みたいな立場にたたされると、なんか情緒不安定になるのかもしれない!!」

リアリスは気が付いた、そうだ、さつきだってオリオンは悪者扱いされるのを極端に嫌ってたではないか。

「そうか、よおし……オリオンとやらっ、俺は確かに強くはないし、ダメな男かもしれない。だが、この気持ちまでは否定させはしないっ!! 俺は、この身にかえても彼女を守る、約束だから……」

約束だからだっ！！」

「ぐあああああぁっ、ヤメろオオ、僕の立場を悪くするな、断じて違うっ、僕はっ、僕はああ！！！」

「何が正しいかなんて分からない、誰が正しくて誰が間違っているのかも分からない、だけどっ、俺は俺が正しいと思える事をやってみせる、やり遂げてみせる！！！」

「うっ、うわあああああああ、あっ！？ ああ、そっ、そっ、その通りだっ、それこそが正義っ！！！」

あら？ この子、イジメ過ぎて壊れた？

「イーザ、君の思い、確かに受け取ったよ。分かった、どうやらリアリスも君と行くのがベストらしい。いいだろう、僕も君と共に彼女の脱出を手助けするよ！！！」

(なっ……こっ、これは、自らの立場を正義の味方へと転換する事によって、崩壊を免れたの！？)

そこまでの苦痛を味わっていたというのか、このオリオンとかいう少年は。

たかだか立場じゃん。

まっとうな人間なら、フンツと鼻で笑えばいいじゃんよ、とんでもねえバグ持ちだ、この機械の彼。

「オツ、オイ、って事はお前、俺達に協力を……」

「ああ、申し出ているのさ。君の思いに触れた時、僕の中で何か

が弾けた……君と彼女の間には、深い深い結び付きが……そう、愛にも似たものがあった。それをぶち壊すのは断じて正義じゃない、だから僕は君らの仲間となるう」

こうして……機械仕掛けのオリオンが仲間になった。

王子様が二人になった。

第七話 うずくまる風、這い寄る空

「やあつ、おはよう。やっぱり朝食はあつあつのコーヒーに、ギユヌドルフィダツツエのウエルダンだよね」

目を覚ましてみれば、どこからともなく持ち込んだ何らかの物体をかじりつつ、コーヒーをくいと飲むオリオンの姿。

「ん？ どうしたんだい二人共……さては、ギユヌドルフィダツツエは初めてなんだね、大丈夫だよ、ちよつと独特な味がするけど慣れれば苦さがクセになって……」

「オイ、もう、朝……なのか？」

「何を言っているんだい、僕が朝食をとっているんだ、朝に決まっているだろう」

一瞬の沈黙、そして吹き出す言葉と感情。

「何をのんびりしてんだ、夜の内に行動しとけばよかつたじゃねえか！！ あいつら二人が逃げ帰ってんだぞ、増援を呼ばれでもしたら……」

「ぐっすりと寝ちゃってたのは、どこの誰だい？」

「ぐっ……そっ、それだったら、お前がリアリスを担いでも脱出しておいでくれれば……」

「君が外までエスコートするんだろう、プリンス様」

「……………」

言い返せなかった……それはそうだな、昨日は俺が連れ出すとかコイツの前で言っちゃったし。

「そんな事よりも、さつさと朝食をとっておく事だね。不測の事態には常に備えておかないと」

「ああ……そうだな」

日光降り注ぐ朝。

まだ、現地時間で午前七時前だというのに、体感温度は人肌の熱を上回っていた。

初め、この屋外レストランらしい場所に辿り着いて一番、道路側のベンチに腰掛けていたのだが、直射日光が想像以上にキツかった上、目立ってしまう事に気が付いた。

だから、オリオンは何故か猛反対したが、一番奥のベンチ、店の屋根の側へと潜り込んだという訳だ。

しかし……こんなメンツのパーティ、この街のどこに居ても目立ってしまう事だろう。

中央に座る女はまだしも、両端に鎮座する男と少年の姿、格好が原因の一つである。

片や、黒ずくめのスーツを着込んだ男、片や、マント状のコートで全身をおおった少年。

なんとも暑苦しい。

「えつと私はあ、ホットドッグとアイスコーヒー」

「僕は、このココナッツジュースだけでいいよ」

「腹減ったしなあ……とりあえず、このメニュー欄の上一列、持って来て」

彼らの注文は、他に客が居ない事もあって、すぐにテーブル上へと並ぶ。

それらに舌鼓を打ちつつ、朝食タイムだ。

ある程度食べた所で、自然とトークが始まった。

「もぐもぐ……ねえ、オリオンってさあ、くちやくちや……ほとんど身体が機械なのに、ぐびぐび……モノを食べたり飲んだりして平気なの?」

次々と食べ物を中心にぶち込みつつ、(俺のもかなり食ってる)リアリスが言う。

あれだけ口ん中を満杯にしておきながらも正しい発音、器用なものだ。

「ハハハツ、僕をそこいらの旧式共と一緒にしないでよ。こつ見えても最新技術の塊なんだから」

そう言い、ココナッツジュースを一気に飲み干すオリオン。こつして見ると、機械仕掛けつてのが信じられないな。

「うん、うまい。この暴力的とさえ言える辛さが、ココナッツジュースの真骨頂だよなっ」

「どうやら味覚は、再調整の必要があるようだけどな……。」

「まあ、それは置いてだ……オリオン、どうしてアイツらやお前は、リアリスを捕まえようとしているんだ？ コイツはそこまでの存在なのか？」

と、イーザは試しに、ストレートな質問をオリオンへと投げかけた。

「多分、それは機密事項とかなのだろうが……何故かオリオンなら、ペラペラと喋りそうなイメージがあった。」

「知らないさ、僕はヴァンベリユー様の命令で動いているだけだからね」

「ヴァンベリユー様？ 何者だ、そいつは」

「あっ……」

「あつ、とか言ったぞコイツ。それ、機密情報なんだな！？」

「だつ、誰だいヴァンベリユー様って、そんな事、僕言ったかな？」

「言った」

「言った」

二人揃っての返事に、オリオンは初めて困った様な……自分の現在位置をつかめぬ様な顔をした。

「……どうしても、言わなきゃダメかい？」

「ねえオリオン、お願い。私、身に覚えのない事で狙われ続けたくないのよ、理由さえ分かっただら……ね？」

「少なくとも、やりやすくはなるけどな」

と、二人の発言を、その身に受けるオリオン。

正義を自称する彼にとつて現状とは、不道德そのものだった。

これは、正義の行為ではない……彼の思考回路が考えが、その思いに負けるのも時間の問題でしかなかったのだ。

「……仕方ないな、分かったよ、僕の知っている事を少しだけ言うさ」

ようやく、彼は重たいと思わせた軽い口を開く……。

だが、それは早すぎる情報だったのかもしれない。内容は、イーザの知ることの無いもの。これから未来永劫に。

突如、響き渡る、打ち上げ花火の様な推進音。続いてすぐに、花の傘を開いたかの如く破裂音。

ヨードンの合図だ。

屋外ベンチが、テーブルが、古めかしい店や日除け屋根に至るまで、全て真っ白、白煙に塗り潰されたのだ。

ロケット推進、煙幕弾が横向きの降雨みたいにくつも店へと飛

来。

一瞬にして、吹雪の山中に取り残された感を演出。視界、ほぼゼロ。

その、白色に染まるスペースを見、男は言う。

「攻撃、止め」

と。男は全身を黒色で着飾った、イーザの言うところの怪人半マスク、その片割れのトイドルディーであった。

右半面の無機質にして無表情のマスク……それと変わらぬ、左半、血の通う面。

「フツ……コマ共も、役に立つとは言い難いな」

自身の周囲に展開する存在を横目に、呟く。

ディーがコマと呼んだそれは、外見がまるで、中世の重騎士の身に付けていた様な鎧であった。

隙間なく、内容物を包み込む鉄のプレート。

内容物とは、多分、有機物ではないだろう。冷たい……生物の温かみを、外装の鎧と同じく持ち合わせていないのだ。

「よし、前衛、突入しろ。オリオンとかいう者を引き離せ」

その命令と同時に鎧らは、腰の鞘から剣を抜き出し、店目がけ無機質の行進を開始した。

乱れぬ歩数、変わらぬ歩幅……メトロノームの様だ。

煙幕の中、ジジジツというプラズマ音と共に点灯する、深紅の光。

ピンポン球程の光は、どうやら彼らの目であるらしかった。

こんな煙幕は、彼らに関係ないようで、必要なモノのみが、その目に写し出……。

「オリオン・クラッシュアアア！」

突如、煙幕より飛び出す拳。彼らの目には突然出現したヒトガタが一つ。

白煙引き裂くパンチは、鎧の頭部、人でいう顔面を潰し、まずは一体の鎧がその場に崩れる。

そして、外殻ともいうべき鉄プレートを残し、中味の何かは形を失った。

「やはりゴーレムタイプかい、そんなモノ、脅威じゃない」

一斉に鎧らはオリオンを捉え、直後には剣による攻撃を開始した。

しかしその動作、オリオンにとってはあまりに……

「遅いねっ、だからのろまなカメはウサギに……」

緩慢だった。

「勝てなかつたんだよ！！」

またもや、顔面を殴り付ける拳。

頭が中味ごとくもげ、吹き飛び、残された身体はやはり崩れ落ちた。

“タイプゴーレム……形状を記憶させた魔力核を中心とし、周囲の砂等の物質を記憶させた形状通りに構成させ、完成する存在。だから、これらと交戦する場合、形状を記憶している核を最優先で破壊しなければならぬ。さもなければ、一部を破壊したところで、周囲の物質を吸着させ再構成してしまうのだから……”

そう、核とは深紅の光。

(ヴァンベリユー様の言う通りだね。さつさとこんな連中、解体させてもらうとしよう)

再び迫る剣を、華麗に回避し、今度は蹴り。

三体目、撃破。

左、回避。地を蹴り、加速。鎧らの間を駆け抜け、次々破壊、四、五、六、七体、撃破。

そこから、鎧らは抵抗らしい抵抗もせず、次々と後退を始める。

彼らの役目はあくまで、オリオンを引き付ける事であるからだ。

しかし、そんな事を知るよしもないオリオンには、圧倒的正義より逃げ出そうとする悪の工作員共、とかそんな風に思っていた。

「逃がさないよ。君達を残していたら、一般市民に被害が出るかもしれないからね」

すぐにオリオンは、鎧らを追撃して行く。

デューの計算通りに。

・

一方、イーザとリアリスは、下手にその場を動けずにいる。彼らの目には、見えるものしか写らないからだ。

つまりは、煙幕の白しか見えないから、そろりそろりと少しずつしか移動出来ないのだった。

「クツ……俺のそばを離れるなよ、リアリス」

「言われなくても離れないよ、えへへー（はあと）」

「えへへー（はあと）じゃねえ、なんで嬉しそうなんだ、この状況でっ！ー！」

「だってえ、ナンか完全にカレシっぱいセリフじゃん、今の」

「うっ……いつ、今は自重しろっ、トキメイちゃうじゃねえか！
！」

「フン……深くも何ともないな、今のやりとりは」

「!! この声……奴か!？」

正面より、声が響く。

すぐに、声の主の居場所は分かった。

白に対する黒。彼とは、黒だからである。二人の襲撃者の兄、トイールドルディーであった。

「もう一度だけ言う、リアリスを渡せ」

まるで、立ちほだかる氷山が如く冷たさを持って、彼は言う。

ふつふつと煮えたぎる彼の中のマグマを、冷たさで無理やり覆っている様にも見えた。

「……イヤだね。昨日、そう言ったばっかだろう?」

「返答は分かり切っていた事だったが、一応は確認させてもらった。いいだろう、やはり力ずくで行かせてもらおう」

ゆつくりと、ボクシングの様なファイティングポーズへ移行するディー。

彼は素手であったが、あの弟、ダムより遥かに強いのではないかと思わせられる、存在感を放っている。

(一気に……行くしかねえか……あの手で!!)

「リアリスウ、スマン!!」

「えっ!?!」

対し、イーザの行った行為、それは……。

完全に、左手の理性は失われていた。

いつ、いかなる動作よりも素早く、獣が如く俊敏性をもってその手は走る。

ある箇所へと……。

それは、二つの玉、二つの球、二つの山、二つのマシユマロ、二つの……二つの……ぶっちゃけ乳房へと。

ふにつ、と微かな反発、この弾力、この感触、さらさら……。

「あっ!?!? ちょっと、ちょっとイーザ?」

「むっ!?!?」

この、声、これだけでボクはっ!!

「うオオオオオオオ、無限精力、速攻発動オ!!」

「成程……直に行っただか。的確な判断だ」

デーイーがボケているのか、それとも本気で言っているのか定かじやないけれど、とりあえずっ!!

「お前を倒してリアリスと××××××××××ウウー!!」

デイーにビシッと指を指し、イーザは力強く宣言した。

「あの……いつ、いつまで……揉んでるの？ 私の……おっばい……」

台無しだった。一応、決めゼリフだったのにつ!!

しかし、イーザの左手はリアリスに指摘を受けようが、自ら離そうと思おうが、なかなか離れてくれない。

「何っ!? くそうっ、何故離れない俺の手エ……ブラックホルカッ、お前のムネはっ!？」

そう、彼の心は手にも存在しているのだ。

無限精力の弊害、思考の（エロ方面への）活性化のせいもあり、手は離れるどころか、ますます柔らかな双子山に食い込みそうになっってしまった。

「フン……男性、という奴か……悲しい事だな、イーザ」

「そんな場合じゃねえだろうがっ、早く離せ、早く早く早く早く、離っ……よし、ようやく離れたっ、行くぞオオトイールドルディ……」

イーザ、そしてデイーが駆け出したのは、ほぼ同時だった。

第八話 無力の証明、有力の証

「全く……どこで油を売っている、あのイーザとかいう男は」

青髪の少女は、誰にでもなく呟いた。

ここはある国、ある場所に建つ、ある屋敷。またの名を三丁目の幽霊屋敷。

ここは、そこにありながらも、そこにあつてはならない建物。その証拠に、いくらこの地区の天気が快晴だとしても、屋敷へ通ずる門をくぐつたなら、たちまち滝の様な大雨がその身を襲つ。

少女は、そんな屋敷の二階、最奥に位置する部屋、すなわちイーザルームを清掃していた。

開け放たれた窓から吹き込んだそよ風が、少女の髪を揺らす。

「私と無理矢理契約をしておいて……四日も置き去りにするなどと……」

ちらりと、部屋の中央、テーブルの上を見る。

依頼人とのやり取りの痕跡、数枚のメモ用紙と印を付けられた世界地図。

少女は、イーザと依頼人のやり取りを、部屋の隅にたたずみ聞いていた。

「……もう、この屋敷でやる事はない、か」

彼女は、そう呟くと早速、行動を開始する。

部屋を出て、階段を下り、玄関扉を開き、外へと出る。
降りつける、大粒の雨。

だが、雨粒の一滴とて、彼女の身を濡らす事はない。
まるで、彼女を恐れ避けているかの様であった。

「断わっておくが、私はヒマなだけだ……あの男、イーザラント
が心配な訳ではない」

誰に言ったのか、意図は不明であるが、青髪の少女は呟く。
背には既に、翼。黒色の、コウモリ思わせる、一対二枚の翼であ
る。

「契約者に何かあれば、それは私の恥にもなるのだからな」

その言葉を残すなり、彼女は消失した。

もう上空、百メートル近くにまで急上昇していたからだ。

「ハアアアア!!」

イーザは、白中の黒一点目がけ駆け出した。

しかし瞬間、煙幕に身を潜めていたテーブルに身体をぶつける。
また、倒れたベンチイスに足をとられた。

視線が、ブレる。また、力の向く方向が揺れる。奇しくも、トラ
ップと化した物々が殴り付ける。本人は意に介さず走り続けたつも

りであったが、確実にスピードは削がれていた。

そんな不恰好な状態のイーザへと、差が襲いかかる。

低めの態勢から駆け出していた、デイー。数々の不可視な障害物を軽々とかわし、右へ左へ、気が付けば既にイーザの間合いに飛び込んでいた。

「フン」

咄嗟も咄嗟に繰り出されたイーザの拳、目で追う訳でもなく身体を伏せて回避。続けて、体躯のバネを最大限活用し、跳躍、頭近くの位置から回し蹴りが放たれる。風切る音、目に捉えられぬ速度。

いとも簡単にイーザの頬を直撃、彼の身体は頭に引っ張られる様にして吹き飛ばされた。何が起き、どうなったのか……全く分からぬイーザ、そしてリアリス。

店のカウンターテーブルに一直線。背中からも打撃を喰らったかのような感触。叩きつけられたのだ。

そして未だ、状況を把握出来ぬイーザに、追撃の一手は放たれた。

間近に降り立つ、着地するデイー。漆黒。

「ぐうっ!!」

靴先が、腹部にめり込み鈍痛をもたらす。僅かに動かされた身体。

「口程にもない」

胸ぐらを掴み引き上げ、さらに一撃。無抵抗に喰らうパンチ。

「所詮はそんなものか、イーザ」

宙にフツ、と。イーザの身体を襲う浮遊感。放り上げ、もう一撃、拳による打撃を加える。今度は、テーブルを巻き込み派手にきりもみ、ようやく止まった時、激痛が一気に走る。

ズキズキと、未だ全身を袋叩きにされているかのような感覚、口の中はもう、鉄の味まみれだった。

「なんとも頼りないプリンス様な事だ、リアリス」

デイーは、リアリスへと向き直り言った。

「どうだ、この場でイーザを完全に殺してやってもいいのだが……お前の心掛け次第だ。さあ、選択するがいい、奴の命はお前が握っている」

彼は、分かりやすい脅し文句を使っている。要は、お前にその気がないならこの男を殺すと、そう言っているのだ。

「待て……俺はまだ立てんぞコラァ!!」

「そうか、ならば立てなくなるまで、口をきけなくなるまで傷めつけてやるっ」

「待って、二人共止めて!!」

と、直後、リアリスが叫んだ。

「イーザに手を出さないで!!」

「……ほう、ならばお前は、私に着いてくるんだな？」

「リアリス、バカな事を言うんじゃない、俺はまだ大丈夫だ!!」

「……ごめん、イーザ。もう、アナタが傷付く所、見たくない!!」

彼女は一方的に話を切り、ディーの元へと歩いてゆく。

「リアリス、よせええええ!!」

返事はない。視線もない。歩も緩めない。そして遂に、彼女はディーの正面に立った。

「懸命な判断に感謝する」

「うん……でも、やっぱりヤダ!!」

「!？」

「必殺、乙女キイイイック!!」

一歩、左足を踏み出す、そしてあの乙女キック。スキンヘッドの弟を一撃でのした強烈無比な技だ。

ディーは無論、その類の奇襲を読んでいた。イーザを痛め付け、殺すと脅してやったとはいえ、余りに素直過ぎる彼女。不自然にも

程があった。

だが、そんな警戒を保っていたディーをもつてしても、そのキックは避ける事が出来なかった。

「なっ……？」

予定外にして想定外。乙女キック、ネーミングはふざけているものの、その正体はディーが反応出来ぬ程、鋭い一撃であったのだ。キレイに命中し、彼を後退させるまでの威力。

さすがにイーザも、これには不自然さを強く感じた。だが、今思えば、リアリスは普通の少女である訳がなかったではないか。

たった一人で、燃え盛る街を脱出した。

砂の上を、水も食料もなしに三日三晩さまよえた。

たった一人で、また脱出した。

たった一人で、複数の追っ手から逃げ切っていた。

俺を引き摺って、ホテルまで連れて行った。

そして今、イーザが歯の立たなかった敵に、一撃叩き込んだ。

(リアリス……お前は、一体……？)

当のリアリスは、別段、自らの力の高さを意識していない様であった。

「あ、あれ？ 乙女キック効いちゃった……」

「グツ……成程、あの御方がこだわる訳だ」

破片の中より、デイーはゆっくりと身体を起こす。仮面……顔の右半分を覆っていた仮面が砕け、下の顔が現れていた。

「だが、この仮面を砕いたのだ、もう手加減は出来ない」

来るっ、あのダツシュ。障害物をものともせず、駆けて来る。

再び、リアリスのキック。

デイーが全力をもつてしても、彼女の蹴りは完全に回避し切れなかった。僅かに頭をかすめて行く。

だがその後の動作を、リアリスは行えなかった。彼女の戦闘経験は無きに等しい、デイーには遠く及んでいないのだ。能力を知られてしまった今では、もう通用などしなかった。

「あつ……」

首筋に、一撃を入れた。もうデイーは、リアリスの背後に回り込んでいたのだ。

たったその一撃でリアリスは無力化されてしまい、その身を倒してゆく。デイーは、彼女の身体を、腹支点に支え、そのまま担ぎ上げる。

「止めるオ、リアリスを離せ!!」

「フン、無力だ……無力なものだなイーザ」

「離すんだ!!」

「弱い者程よく吠える。お前には、リアリスを取り戻す力などない、それに今はお前の相手をする意味がなくなったのだ。見逃してやるから、どこぞへでも失せてしまえ」

「俺はなあ、仲間外れが嫌いなんだよ!!」

「ならば……丁度いい、間に合った様だ。イーザの相手をしてやれ、弟よ」

その言葉と共に、煙幕を裂き現れる第二の漆黒。手中に輝く、二の白銀。

「トイー……ドルダム……」

黒の兄弟、その弟トイードルダムが、二人の間に立ち塞がった。

第九話 The last dance

「破アア！！」

また一体、ヨロイは砕け散る。あれだけ居たヨロイも、残るはたったの三体ばかりであった。辺りに粗大ゴミが如く散らばる鉄のプレート。皆、例外なく頭部が潰されていた。

今、ヨロイの内一体が、目に当たる部分……深紅のピンポン球からレーザービームを放つ。

正直、しみつたれた兵器だ、オリオンには。魔力反射装甲……詳細は割愛するが、読んで字の如し、魔力を反射する装甲。

オリオンはほぼ全身をそれで覆っている為、そんな、ヒトにせいぜい火傷させる程度のレーザーなど、彼の装甲には傷どころか跡、痕跡一つ残せない。

だから、そのまま勢いを殺さず、ヨロイらへと突撃。オリオンの動作に反応し、剣を振り上げるヨロイ。しかし彼らは、散々触れて来たが、非常に動きが緩慢なのである。

振り上げるだけ振り上げたまま、振り下ろす間もなくヨロイは機能を停止する。重要部品、すなわち魔力核の欠落によるものだ。疾風怒濤、鬼神が如く、オリオンは暴れまわる。

あと、二体。

「ここは格好よく行くところかっ!!」

手刀、手を一直線に、チョップの形に。

「オリオン・スラッシュ!!」

文字通り手の刀、手の刃。横一閃、ヨロイの首(?)から上がゴトリ、と落下する。切ったのだ。

落下した頭部を、核ごと踏み砕く。あと、一体。

「フィニッシュだよ」

最後の一体目がけ、駆け出すオリオン。ヨロイは、剣を振り上げる事も、レーザーを放つ事もしない。ただ、その目を明滅させて、その場に待ち構えている。

ん？ 明滅させて？ 何故、徐々に明滅の感覚が短く早くなって

……

オリオンの拳が、ヨロイの頭部を捉えようかという瞬間、それは発動した。

爆炎、爆風、爆音、それらが三位一体となり、オリオンを襲ったのだ。

「トイードルダム……」

イーザは、目の前の漆黒を見、言った。顔の左半分を仮面で覆う男、トイードルディーの弟、ダム。

仮面の付いている方向だけでなく、性格も、態度も、全てが兄と真逆の男である。あの、耳障りな声をまた聞かなければならないと思うと、気が滅入る。

「ではダム、イーザの始末を頼んだぞ。私は、リアリスを連れて帰還せねばならないからな」

ディーはそう言い残すやいなや、リアリスを担いだまま、煙幕の中へと消えて行く。

逃がしてはダメだ、そんな事は当然だとイーザは思っている。だけど、身体は既にポロポロと言ってもいいし……メルカバーはどさくさ紛れでなくなっているし、アルカヘストは再構成が完了していない。

つまり、飛び道具はこんな時に使用不能だ。

無理だ……阻止のしようがない、逃がしてしまう。無力だ、俺は全くの無力だ、そう認めざるを得ない。約束だ何だとほざいておきながら、結局はあっさりと負けて、拳句に女を奪われた。

最低だ、ヒーローなんてとんでもない、一般男性とも名乗れそうにない。最低男性だ。

遂に、二人は完全にイーザの視界から姿を消した。白煙が、距離すら感じさせてはくれなかった。手の届かない、いずこかへの消失を演出された心地だ。

ただ、痛みをよじり、見ている事しか出来なかった自分は一
体……何だというのだろう。

と、それまで黙っていたダムが地面を蹴り、水平方向へと跳躍、イーザの傍らに着地する。続けてイーザの頭を掴み上げ、無理矢理彼の身体を引き上げた。

「よオ、イーザ……また会ったなあ」

だが、イーザは返事しない。頭の中を、後悔と自責、そして無力感が支配していた。

何が、プリンス様だ……何が、エスコートしてやるだ……バカ代表が!!

「決着をつけようぜえ、あん時の続きだ、早く立ちな」

力を振り絞って立ち上がれば良かっただろう、走って追いかければ良かったろう、その身の無駄なダメージ、何故負ってしまったている!!

「クソツ……俺はっ、クソツ……」

「ああん？ 絶望にはまだ早ええぜ、俺と戦うんだ。そして、テメエの行動を後悔し絶望しながら死んで行きやあいのよ!!」

もう絶望じゃなく失望している、己の不甲斐なさに、みっともなさ。散々、調子に乗った結果がコレなのだ……。

「何トボけてやがる、立てっ、そして来いよ、戦えええ!! 俺とタイムマンで戦エエ!!」

己を満足させるのが目的だったにしろ、偽りだったにしろ、死に体を動かすのに足り得る希望と理由をよこした。

そうだ、とても今の自分にコイツを突破し、二人を追うなど不可能、逃げる事も行く事も出来ぬ。ならば戦う、コイツを倒す、全てをかけて。

「分かった……やってやる、全力で、やってやるよ!!」

「いいぞ、イイゾ、眼に光を灯せ、生きる意志を灯せ、命を灯せ!!」

一旦、間合いを開ける、ダム。そして腰にさげるスリーブから、二本の大型ナイフを抜き出した。白煙の中にあっても煌めく白銀。それは容易に、鋭さを、切れ味を映し出している。

「テメエは、エモノ無しかよ?」

「……いや、あるさ。真正銘の最強武器がな」

と、イーザは目をつむり、右の手の平を前方へとかざす。すると、ワントンポ遅れてから金色の光の粒が発生、それらは、イーザの突き出された右手に集う。魔銃、アルカヘストと似た様な原理だ。

一粒一粒が集まり、くつつき形を成す。柄を、鍔を、そして両刃の刀身を……。やがてそれは、イーザの身の丈三分の二程の剣と化する。

だが、刃は錆が至るところに見られ、刃こぼれし、薄汚れてしまっている。正直な所、ガラクタにしか見えない代物だ。

「ハアッ、どんなモンかと一瞬、期待しちまったじゃねえか」

「まあ……見てなつて」

剣を手にとると、ゆっくりと構える。両の手を右脇腹横へ。そこから先は、波が引いてゆく様な静寂であった。風が音もなく流れてゆく。大分、煙幕は気流によって運ばれたらしく、薄れていく。もう、ダム姿がおぼろげながらではなく、はっきりとその目に捉えられた。

彼は今、笑っていた。無機質な面とは全くの別物、右半分の悪意と害意。人の感情でさえ操って、戦う男……。

漆黒のマントコート、その腹部の箇所は裂けてしまっていて、そこから顔を覗かせる、黒く変色した肉と皮。恐らくは、オリオンにやられた際になったものだろう。

そういえば、オリオンはコイツらがアドヴァンスドヒューマンとか言っていた。それは、一種の強化人間、進化させられたヒト。体内の機械部品による補助で、反応速度からパワー、身体能力に神経伝達速度に至るまで、全てがヒトを上回る者達。

だけど、今の自分、無限精力の発動している自分だって、十分に強化人間だ。ダメージの残っているらしいダムとは、実力だけなら五分五分まではいかなくても六・四くらいにはなっているはず。

しかしそれでも、正面から馬鹿正直に戦ったら、いつかは押し切られよう。こちらはもう、あまり動けないのだから。

現時点での唯一、こちら側のアドバンテージ、それはダムがこの剣の性能を知らないという事。

俺に勝機があるとするならば、この名もない剣の性能を最大限に活用し、一撃必殺、最低で短期決戦を目指す事にある。だから、チャンスは一度。仕損じたなら、チャンスはもうない。リアリスがデイーに乙女キックを当てた様に、予想外、想定外を起こしてやるしかないのだ。

「……………」

「……………」

心なしか、時の流れでさえが遅くなった気がする。一秒が五秒にも、十秒にも感じられた。静かだった、ただひたすらに。

ダムが、少しずつ身体をスプリングの様に押し縮めて行く。トラヤライオン、あるいはチーターの様な、突撃前の予備動作。

いちかばちかだ、もしもダムが正面から来てくれるのならば、勝機はさらに上がる。

「お祈りは済んだかよ？ 俺はとっくにマジモードだかなああ」

「生憎、必要はない。お前こそ、祈って待つてろ」

「いらねえ……ガキの頃に散々祈ったよ、いつ死ぬかも分からなかったからなああ！！」

後はきっかけだけだった。次の、何らかの一動作、一音、一挙動でダムは動く。自分も動く。だから……聴覚にも気を遣う。

まだ、まだまだまだ、あと少し、あと少しだ。気分は、ガンマンの早射ち対決、といった所だ。

さあ……まだなのか……。

と、直後の事だった。派手な爆音、ついで爆風、近くで何かが爆発したらしい。突然の大音量に、一瞬、対応が遅れてしまう。ダムはもう、最初の音の時点で飛び出し、駆け出していた。

「死イイイイ!!」

もう、ほぼ距離はない。あの時のディーよりも、更にワンランク以上、上の速度。もう、ブレて見えるどころの問題じゃなく、分身している様にさえ見えた。目の追い切れる速度じゃあない。

だけど、今回だけ、今回だけでいい、奴を、奴を捉えてくれっ!!

「おおオオオオオオオオオ!!」

大型ナイフが、剣が、今、交差する。

一瞬、一秒以下の攻防。それを経た刹那の後に、二人は背中を向け合い直立する形で静止していた。

「……がつ……」

先に倒れたのは、イーザの方である。右肩から脇下にかけてが、すっぱりと切り裂かれており、剣が、手を滑り落ちていった。

切り裂かれたスーツ、シャツの下にはピンク色の筋肉細胞が見え、すぐに赤一色へと染まってゆく。ドクドクと脈動に合わせ、溢れ出ていく鉄の匂い。

致命傷……とまではいかないものの、傷口は相当に深い。右腕に、まるで力が入らなくなってしまうのが、その証拠であった。

「クツ……クク……ヒヒツハハハハハハッ、ハハハハハハハハハハ
アアアアアアアアアアアアアアア、俺の負けだぁイーザ、俺の

口ヨロとダムの元へ、頼りない足つきで歩み寄ってゆく。

「約束だろ……早く教えてくれ、お前らの拠点は、どこにある」

「ああ、いいぜええ、耳の穴あよくかつぽじって聞きやがれえ、多分、俺の遺言だからよお」

もうダムは、完全に交戦の意志を失っている様だ。むしろ、安堵に満ち、憑き物を落としたかの様な、晴れやかな表情をしていた。イーザは、更に近寄る。一言一句聞き洩らさぬ様、耳を傾ける。

「俺らの拠点の場所はなあ、オ……………!!？」

ところが、ダムの口は固く閉ざされる。本人の意志は関係なしにだ。

(喋れねえ!? それにナンだ、身体ん中のパーツが勝手に……………)

「おい、どうした? 早く言え……………」

イーザが言葉を催促した、その時である。突然、ダムの上半身が跳ね起き、イーザの身体へと抱きついて来た。

しかも同時にダムは、自らの体内の何かが明滅し、リミットを刻んでいるのを自覚する。これは……………自爆プログラムか!?

「ぐっ、あああああつ、ダムう teme ee!!」

自分の腕が、イーザの身体を締め付けていた。しかもだんだんと力が強くなっている。万力の様に。

自分が自爆し相手を殺すより先に、彼を圧殺してしまいそうだった

た。

「俺が、バカだった、クソオオオオ、何で、何でテメエを信じちまったああ!!」

(ち、違う、俺は……俺はああ!!)

口が開けない以上、言い訳も釈明も、それどころかイーザの求める答えも言えない。だが、言えなくても、このプログラムを打ち破る責任感みたいなものが、彼にはあった。

(ざけんなよお、はっ、敗者がっ、敗者が勝者を殺すなんざあ、んなバカな話があるかよオオ!! 俺は負けたんだぞっ、死ぬべきは俺だけだろうがああ!!)

「ぐあっ、クソオ、この……卑怯者があ!!」

(うつせえよ!!)

ここで、イーザを締め付ける万力が、少しずつ緩み始めた。やがてすぐに、彼を拘束するだけの力はなくなる。だが……今の彼に、緩んだ腕から抜け出しその場を逃れる力は、残っていないかった。

ぐったりとしている様で、膝が曲がりはじめ、今にも倒れてしまいそうだ。

(俺はあ、卑怯者じゃねエ!!)

ダムは振り絞った、気力の一滴肉片の一つ血の一滴まで。その強い意志、想いとも言えるものが、プログラムを完全に振り切り彼の腕を動かした。

イーザを殴り付ける、右の拳。彼は一直線に吹き飛んで、急速にダムから離れていった。煙幕、その中に溶け込み、もう、ダムの視界には写らない。

支えを失い、ゆっくりと落下する上半身。

(ああ、畜生、死にたく……ねエエ……卑怯者のまんま……死にたくねエよオ……)

地に身体が接触した、丁度そのタイミングに、プログラムの最終段階は作動した。

(……死にたく……ね……)

ダムはもう、どこにも、居なくなってしまった。

第十話 A n i d l e t a l k

「いやあ、すごかったよ、なんかヨロイの騎士みたいな連中と男の子が戦ってて、強いなんのつて」

「爆発じゃ、爆発したんじゃないよ。多分、あの少年は死んだじゃろうなあ、まだ若いのにのう」

「人さらいだよきつと。女の子抱えた変な格好の変態が、あつちに走って行って……」

情報が錯綜している。一度に多くの、事件的な要素が発生した結果だろう。クリスマスと盆と正月の同時攻撃な気分だ。

まあ、少なくともまともな事件でない事は明白であった。何せ、これだけ派手な結果……死者こそいない様だが（ヨロイのプレートや、何らかの機械部品は無視して）、重傷が三名、軽傷十四名、建築被害は店が一軒大破、家屋二軒が半壊という結果に関わらず、事情を知る者が一人残らず姿を消していたのだから。

つまり、何がどうなっただろうか……それを知る事が出来ないという事だ。

「……がはっ、がっ、げほっ……ハア……ハア……こ、こは？」

イーザラント・D・カナートウスは、激しい咳と共に、目を覚ま

した。

まず、その目に映ったのは、白い天井、白い壁に白い布団という白づくめ。ここは一体、どこだろう？

“ああ、リアリス、ようやく目を覚ましましたか”

と、突然、声が聞こえた。イーザは反射的に声の方向へと振り向く。

すると視線の先には、年齢三十代半ば位の、笑顔が眩しい紳士がいた。

“身体のどこにも、異常はない様ですね”

「？ ……アンタ、何を……？」

紳士は、白衣を身に付けている事から、イメージで大体の職業は理解した。恐らくは医者……そして更に彼は一方的に言う。

“では、次はこの機械に座って下さい。頭の中の確認です”

「……何だつてんだよ……ああ、そっぴやダムに斬られたんだっけ、そつちを診て下さいよ」

そう、イーザはトイドルダムとの死闘により、深手を負ってしまっているハズであった。今でこそ、何だか応急措置っぽい事があるみたいだったが、あれだけバツサリと切れていたのだから、ただで済んではいまいだろう。

神経か筋肉が傷付いた為なのか、右手が上手く動かせない。パーとかグーはぎこちないながら出来るけど、チョコキは相当に困難だった。中間の、若干複雑な形がムズい。

“どうしました、早くこちらに来なさい、リアリス”

紳士が、地に足のついていない様な、口調で言う。かすれた様な、ふわふわした様な、そんな口調でだ。

「お医者さん、俺はイーザっていうんだが……ってか、そうだった！！リアリスが連れて行かれたんだった、こんな所で休んでる場合じゃねえ！！」

自分の目の前で、彼女は連れて行かれたのだ。休む事があつてはならない、こうしている間にも、彼女の身に危機が迫っていると考えるべきなのだから。一分一秒を無駄には出来ないんだったのだ。

「悪いがお医者さん、急用を思い出したんだ、行かせて貰う……」
と、イーザが発言し終わる前に、紳士は声を荒げ言う。

“リアリスウ、私の言うことが聞けないのか！？ 違うだろ、早くこちらに来なさい！！”

先程までの、柔らかな聖者が如き笑顔とは打って変わり、鬼か悪魔かという形相……あの笑顔は仮面だったのだろうか？

「だからっ、お医者さんよ、俺はイーザだ。悪いが問答してる時間も惜しい、無理矢理にでも行くぜ、精密検査はその後にしてくれ」

“私に齒向かうというのか！！ ……物……である……の命……に”

「がっ、ごぼっ……かはっ……ここ……は……？」

イーザラント・D・カナートウスは、激しい咳と共に目を覚ました。茶色い天井、茶色い壁に茶色い布団、ここは一体、どこだろう？

「イーザ、ようやくのお目覚めかい？」

「ん……ああ、オリオン、か……」

相変わらずここがどこかは分からないが、オリオンが居るといふ事は、多分俺は助かった。そういう事だろう。

「全く、世話が焼けるね。あの場から君を救出し、身を潜めるのは大変だったんだから、少しは感謝の言葉があってもいいんじゃないかい？ 求めはしないけどさ」

よく見たらコイツ、リンゴの皮を剥いていた。しかも、何か指でシャツ、シャツと撫でて。

「あ、ああ、助かったよ……この傷の手当てもお前が？」

イーザは、胸部から右肩にかけて巻かれた包帯を示し言った。

「いやそれは、この街で一番の腕利き医者がやったのさ。あつという間だったよ、もう包帯は要らないんじゃないのかな」

ハア？ んなバカな、そんな簡単に治ったら苦労はしねえっての。

機械仕掛けのお前と違って、俺は生身なんだぜ？

素人の俺だって、あんな傷、縫ってくつつけるしかない位分かるぞ。くつついて抜糸するまで二週間はかかるもんじゃないのか？

などと考えつつ、オリオンの言う通り慎重に包帯を取ってみれば……うわっ、本当だ、傷口が塞がってる。ちよつとした、極細ボールペンで線を引いた程度の傷跡が残っているだけである。

ピンと来た、これは恐らく……。

「……オリオン、少なくともこれは、人間技じゃないと思うんだが……」

「そういえば、何か手をかざして光を出してたね。人の持つ可能性に感動しちゃったよ」

「……それで、そいつは何かしらの見返りを要求して来たんじゃないのか？ 金以外の何かを……」

「ああ、それは心配しなくても大丈夫さ。金かなと思って、君の懐から札束を取り出したんだけど、いらなとか言われてさ……代わりに精気をよこせと言つて来たんだけど、ほら、僕は下半身も機械仕掛けでそれは無理だから、君に文字通り身体で払って……」

うん、人間の所業じゃない。悪魔か何かだ、そいつ。でも、まあ、精気ならいくらでもくれてやれるから良かった。何せ、俺の能力は無限精力だからな。

しかし、傷を癒して精気を欲しがる悪魔か……あてはまる存在はそうそういないな。

まあ、結果オーライだろう。グー、チョキ、パー、よし、スムーズだ。

「まさか……あの女医者は悪魔だったのかい？ もしそうだとしたら、僕は汚らしい悪魔共に助けを請うたという事に……」

「おいおい、何悪魔を毛嫌いしてんだよ、別に悪い奴らばかりって訳でも……」

「僕だってそう思いたいさ、けどね、悪魔って奴は人を簡単に殺せるんだ。僕は悪魔に手足を引きちぎられたのさ……アイツらは遊びのつもりだったみたいだけど」

ああ、成程、確かにそれなら毛嫌いどころか嫌悪するだろうな……望む望まないはともかく、それ故に全身機械仕掛けか。

「さて、ならばあの鬼畜医者をちよつと……」

「待て待て、何をする気だよ、お前！！」

「大丈夫さ、少しゴキツとして引きちぎって来るだけだよ……」

大丈夫じゃねえ！！　　というか恐い恐い、目エ据わってるって。

「オリオン、違う違う、これ治療したの人間だわ。そうかあ、ヒールリング使える人間がまだ居たのかあ、ははははは……」

「意見がころころ変わるね、君が人間技じゃないと言ったんじゃないか。まさか、悪魔をかばって……？　だとしたら君もただでは済まないよ」

こええ……だが、俺が頑張らないと罪もない悪魔の方が、大変な事になる。

「いや、よく考えてもみる、オリオン。悪魔だったら跡すら残さずに完全に治療出来てしまっただろうし、それに精気しか要求して来なかったというのがおかしいな……悪魔連中だったらどうだ、弱っている人間をどうする？」

「あつ、ああ、そうかあ！！ 極悪非道な連中ならそもそも治療なんてしないだろうし、もし治したとしても、対価で心臓とか脳ミソだとか魂を持って行って、玩具みたいに扱っただ、人の命を。そうだと、ありがとうイーザ、また僕はあやまちを繰り返す所だったよ」

「“また”？」

「ああ、この前は女性に、“この鬼、悪魔”と言われていた男性をぶん殴ってやったのさ。まあ実は彼、人間で、どうやら女性は勘違いしていたみたいだけだね」

お前の方がよっぽど悪魔じゃねえか、何て融通の効かねえ奴だ、それは比喻表現だろ多分。

「ところで、無駄話は止めにしてだね、リアリスはどうしたの？」

「うっ……」

「その反応、まさか……奴らに連れて行かれたんじゃないだろうね？」

「……オリオン、俺を……殴ってくれ……」

「オリオンペアアーンチ!!」

「ぐああああ!! …… オリオン、パンチは止めだ……俺を、軽蔑してもいい……」

「バーカ、役立たず、ゴキ野郎、女一人も守れない口だけ男っ!!」

「ぎゃああああ!! …… オリオン、俺を……」

「待つのが、いくら君が苦痛を快楽に感じる人種だとしても、これ以上は君の身体が保たないよ」

「違うっ、それは断じて違うっ!! 自分を戒めようとしてるだけだっ、にしても、んな全力でやるか!? 俺の言い分聞いてからだろ、フツッ!!」

「聞くまでもないよ、どうせボコボコにやられて、リアリスは連れて行かれたんだろう?」

「ぐっ、た、確かにその通りだが……おっ、お前は何してたんだよあん時!!」

「敵の兵器を合計三十二体、撃破していたんだけど何か?」

……ダメだ、何を言ってもダメだ。俺には言い返せるだけのものがない。そうかあ、俺は結局、何一つ満足に出来ていないのか……。

「クソッ、結局、奴らの拠点も聞き出せないまま、俺は……」

「ん？ 拠点の位置は知ってるよ、この街の先のオアシス付近さ」

「えっ？」

知ってやがった！？ なんだと……って事は俺、無駄に戦ったのか？ トイードルダムと、死にそうになるまで。

先に言えよ……とか一瞬思ったが、リアリスがさらわれなければ、それを知る必要はなかった訳で……結論、俺の責任か。

でも知ってたんなら何で行かないんだ、コイツ？ 俺なんか無視して、すぐに行けばよかったのに。

「何度も言わせないで欲しいな、僕は正義の化身なんだよ。目の前で死にかけている者を助けずして、先に進めるものか。それが共に戦った者なら尚更さ、それに……」

「それに？」

「僕一人であいつらの拠点を潰せるとは、思えないんだよ。いくら僕が強くても、所詮は一人、一人には限界があるのさ。つまり君には戦力としてプラスになって欲しい……無論君は、リアリス救出に着いてくるつもりなんだろう？」

「あ、ああ。しかし……お前にしては随分弱気だな」

「君には言うておくよ……実は、リアリスは人間じゃない、とある兵器の起動キーらしいのさ」

(……「」……は……?)

リアリスは、目を開いた。しかし、目を覚ましたかと言われれば、それは曖昧なのだ。

身体が、金縛りみたいにピクリとも動かせない。目だけは、なんとか動かせるものの、写る世界はぼやけてしまっている。それでも、霞がかつたこの世界には、見覚えがあった。

白い天井、白い壁に白いベッド、そして……白衣の者。あと少しで、白衣の者の顔が見られるのだが、そこまで視線が上がらない。

“では、次は脳の検査です、くれぐれも慎重にね”

かすかに聞こえた、いつかどこかで聞いた声。しかし、今のリアリスには誰だか分からない……というより、考えられない、思考回路がぶつ切れたようで。

思った事がすぐに、もやもやの中へと隠れていったのだ。

(……誰……?)

“フフ……ようやくリアリスが戻りましたからね、Project Re Alice、再開といきましょうか……フフフフ、ハハハハ!”

その声を聞いたのを最後に、再びリアリスは意識を失った。

第十一話 一人きりの産声

「リアリスが……兵器の起動キー……だと？」

イーザは、耳を疑う言葉に思わず口を開いた。オリオンの言葉……リアリスがとある兵器の起動キーであるというものを受けての反応だ。

「なら、あいつは……リアリスはヒトじゃないのか!？」

「確かに、彼女は部品、起動キーだよ……だけどヒトではある。ヒトはヒトでも、人造人間だけだね」

「人造……人間……？」

「そうさ、僕やアドヴァンスドヒューマンみたいに、ヒトとして生まれた後改造された者と違って、一から……遺伝子の段階から改良され作られた存在なのさ」

「……ナンで……何でそんなまだるっこしい事を、兵器なら兵器だけ作りゃあいいんじゃないのかよ、わざわざ起動キーをヒトに設定する意味があんのかよ!？」

「落ち着くのさイーザ。いいかい、君はもう僕の手下……いや、友人だから、もう機密とか言わない、知っている限りを話すのさ」

と、オリオンは腕部下のスペース……手首付近を金庫の扉の様に開け、何らかの紙切れを数枚、取り出した。

彼はその資料と自身の記憶を交え、さして重くもない口を開いた。

リアリス…… Re Alice、彼女は十八年前、この世に形を成した。これまで以上の徹底した品質管理、厳選素材の選択の元だ。

これは、一代目からの失敗の教訓を考察した結果である。形を成した個体に更なる改良と人工代謝を行い、一ヶ月後には遂に成長を始め、保護カプセル内にてぐんぐんとその形を大きくしていった。希望だ、我々の希望背負うその子には、一代目の名前 Alice の再び、よみがえりしリアリス…… Re Alice の名を与えたのだ。

さて、成長はいいのだが、やはり人工代謝からの補助保護飼育では、十六年目になった今も未熟児かという位、身体が小さかったのだ。身長は百三十六センチ、体重は僅か三十前後。

ここで最終のテストが開始された。カプセルの外……不純物だらけの大気の中で、運用出来るかどうかというものである。これが失敗してしまえば、全てが水泡へと帰ってしまう事だろう。だが、やらねばはならない、そもそも彼女は大気中での運用の為のものなのだから。

さて、とうとう彼女をカプセルから取り出す日だ。外に出した瞬間、呼吸困難で倒れてしまうのではないか、身体が大気圧の変動で変調をきたすのではないかと、心配要素は山の様にあった。

無論、作業自体も慎重に慎重を重ねたものであった事は、言うまでもない。さあ、ここ無菌室で過ごさせていても意味はない、いかなる過酷な環境においても動作せねばならないのだ。

だから……彼女は室外において、座してもらったという訳だ。そこで、まだ何の知識も持たぬ、赤子が如き彼女は、我々の想像以上の結果をもたらした。

一日に二度程、僅かな食事と水を与えられていたとはいえ悠々と生存しており、十五日後、最初の定期検査において一切の異常はなし。それどころか、リアリスは全てにおいて驚異的だった。

あの医師のお蔭もあるが、人格や人として必要な常識、人間らしさという事を驚くべき早さで身に付けていった。

ダストをもともせず、頭脳の面、身体的な面、体調からメンタル、代謝機能……完璧だった。

しかし、そこで想定外の出来事が起こってしまった。それは村の最後である、これは恐らく、あの男の仕業だ……アルミューズ・ヴァンベリューの……。

「以上さ。これで終わりだよ」

「……そうか、リアリスの村を滅ぼし、一時的に彼女を捉えたのはお前らのボス……だからリアリスの詳細なデータも持っている。だが、分からないな……その方法には時間がかかり過ぎる」

「僕だってヴァンベリュー様や研究チームの事を詳しく知っている訳じゃないから、そこまでは分からない。だけど、これだけの手間を掛けてるんだ、余程のものだろうと思っっているよ」

まあ……確かにそう考えるしかないんだろうが……それでも、ヒ

トを機械に組み込む理由には……。

「ところで君は、リアリスを初めて見た時どう思った？」

「何？」

「僕は正直、驚いたよ。だって、リアリスは人工物だと聞かされていたからさ。だけど実際は、ヒトと何ら変わらない……普通の女の子だった。だから僕は悩まなければならなかった、果たして僕はこの少女をどうこう出来るのか、とね。結果は……この通り、僕の中の正義が、アルミューズ様の命令を振り切ってしまったよ」

オリオンは、どうしてか安堵した様な表情で言った。

「……俺は、ウザい女だと思っていただけだな……だんだんこう思えてきた、奴は寂しかったんじゃないかねえのかなって。無理に明るく振る舞ってたんじゃないかと思えた」

「……」

「……普通の子だよ、王子様に憧れていて、幸せを求めてた……何間違えたか知らないが、こんな男をプリンス様だって言ってただろ、本当、バカっぽかったよ、けど……止めた、やっぱ普通の子だ、あいつは。普通に生きてる奴だよ」

……確かに、リアリスは普通じゃあなかった。大柄の男を一撃で倒したり、俺を引き摺ったり、トイードルデーを一瞬圧倒したり……調整を受けて、ほぼ全ての能力が最高レベルまで達していただろう。だが、どこまでも彼女は普通だった。

「そうかい。まあ、どんな事実があるにしろだ、関係はないよ。リアリスを取り戻し、脱出させる、それだけだ。約束はキチンと果たしなよプリンス様」

「……ああ、そうだな。んじゃ、行くか、普通の女の子を助けになー!!」

「勢いが大切さ、さっさと行こう。余計な時間をくったしね」

素早く、ベッドから身を起こすイーザ。もう、大丈夫、違和感なしだ。さあ、行こうか、進路をいざオアシスへ!!

二人は、家屋を飛び出し、全速で駆けていった。

第十二話 突入、突撃、自爆特攻覚悟有り

オアシスとは、砂漠等の乾燥地帯において淡水が存在する場所を示し、付近には集落が形成されたり通商路の経由地ともなる。

こういった地域を移動する旅人にとっては、まさに楽園にも等しく、これ程有難いものもないだろう。砂漠を高速道路と例えるなら、オアシスはサービスエリアだ。

この砂漠に存在するオアシス……タヤフォラは、面積が約二十七平方キロメートルという規模である。かなり広い様に感じられるかもしれないが、世界最大のものは約二万二千平方キロメートルを誇っている為、小規模な方なのだ。

さてタヤフォラは、街から正確な距離こそ分からないものの、三時間程度歩けば辿り着けるらしい。

イーザらは当初、二時間少しの時間で到着予想をしていたのだが、その予想は遅延を余儀なくされる事となる。あれはオアシスの一部が見え始めた頃だったか、オリオンが突然、止まれと叫ぶ。

イーザは慌て歩を止めると、オリオンの指示に従い身体を伏せ砂丘に重ねた。そして改めてオアシスを見やると、何かが居るのが分かる。

「何だ……あれ？」

イーザがそう言ったのも無理はないだろう。オアシス内には、隣に立つ樹木と比較しても同じ位の高さ、三メートルはあるうかという灰色の……しいて言うなら犬かオオカミに酷似したものが居ただ。

頭頂から尾らしい部分までは、目測で大体七、八メートルといったところか。背中には、リボルバー拳銃のにも似た筒状の部品……多分、大砲が二門。あれは一体……。

「フフン、あれはアルミューズ様のメカのパクリだね。ガーゴイルタイプの劣化品……いらぬオリジナル要素を加えてむしるダメにしている機体、確か名前は“オルトロス”とか言ったかな？」

そう、一見して巨大な犬にも見えるあれは、れっきとした兵器であつた。恐らくはあのヨロイらと同じ様な、機械なのだろう。

「まあ、弱点はそのままだろうけどね」

「弱点があるのか？」

「そうさ。利き手利き足だよ」

利き手利き足？ どういう意味なのか、今回はイーザなりに考えてみた。

機械であるあれらに、右利き左利きなどあろうハズもないだろうから、恐らくオリオンが言っているのはパーツの配置や装備上の問題、それらから派生する特定方向への反応遅れだとか、そういう意味合いではないのだろうか。

「オールライト、そういう事さ。あいつらは確か、本体の右側になんかイロイロあるらしくて、右旋回が遅くなるんだよ。しかも、ロックオンシステムに難があつて、背中の大砲は命中率が悪かつたハズさ」

「……それはいいんだが、あいつら結構な数が居るぞ？ ひい、

ふう、みい……六か、大砲は命中率悪いかもしんないけど、タツクルとかして来たらどうすんだよ、あんなの」

「そうなるとマズいのさ。足周りは砂で良いとはいえないから、僕をもつてしても逃げ切れるかどうか分からないし……」

「奴らのレーダーシステムは？ 奴らは何をもつて、周りのものと俺らを見分けるんだ？」

「ゴメン、僕はそこまで知らないのさ……専門家じゃない、ただの正義だからね」

ダメじゃん……。弱点、ウィークポイントは分かっているけど、相手の強さレベルは三十も四十も高い。頑張つてクリティカルヒットを連発しても、押し切られるだろう。おまけに、地形との相性が良いとは言えない。

メインシナリオを避け、事態を進行させずにレベル上げだとか、新しいスキルの修得だとかが出来ればいいのに……俺だったら、そうだなあ……インフイニティー・ブレード、天まで伸びる光の柱とか、大技が欲し……って、話を逸らしている場合じゃなかった。

早速、どうしたらいいか分からなくなってる。あともう少しでリアリスが運び込まれた場所だというのに……。

「うーん……禁断の試作兵器は一度きりだしなあ……リミッターはちょっと……イーザは頼りにならないしなあ……」

おお、初めてオリオンが悩み考えている。……おい、何だか聞き捨てならない単語が聞こえたぞ！？ 出発前と言ってる事、真逆じゃね？

まあ、それは置いといてだ、早くしなければ……リアリスが兵器

の起動キーなら尚更だ。どうすればいい……どうすれば、あいつらを……。

「ん、んん!? おっ、おいオリオン、ありゃあ何だ?」

「いや、ダメだ、僕の試作兵器は使いどころが重要な……」

「おいっ、オリオン、聞けっば!!」

「ちよっ、何だい、僕は今ガラにもなく作戦を考えて……ん、あれは……」

八方塞がりにも思われた、その時である。それは、唐突に発生した。オアシス上空、少なくともその半分近くを覆う様に生まれ、成長してゆく真つ黒いそれ……いかなる形にも見え、不吉の象徴とされる場合もあるそれ。

そう、巨大な積乱雲。ゲリラ豪雨、落雷等の際に上空に現れる、まるで魔界そのものの様な暗黒。

あまりに不自然、あの場だけの別次元。やがてすぐに、オアシス周りの大気がぼやけ、歪んで来たのだ。滝の様な激しい降雨が、始まったのだらう。

「イツ、イーザ、これはきつとカミカゼだ、今の機を逃す手はないよっ、突撃だあー!!」

「ちよっと待て待てえ、根拠はあ!??」

「そんなモノはないっ、もう限界だ、丁度いい具合に雨が降った、行くしかねエ!!! いいきっかけだ!!!」

「止めんかあああ!!!」

もうダメだった。滅茶苦茶に駆け出すオリオン、鳴り響く、小気味良い爆発音。発見された……もう、有効射程範囲内である。

オリオンの周りで砂柱がいくつもあがる。オルトロスとやらの砲撃が始まったのだろう。

あああ……オリオンの奴め、考え過ぎた結果なのか、あれは。どんだけ短気なんだよ、ったく。

仕方ないっ、えっと右旋回が苦手なんだから、俺は左へ左へと走ればいいんだな、よし、行くぞオ!!!

「……主様、ハウンドが発砲しています。何者かがここへ接近しているものと思われませんが」

跪き、片手の平を床につけ、恭しく頭を下げる男……トイードル
デイーは言った。眼前、液体に満たされたカプセルの中のリアリス
……彼女の最終調整を行っている白衣の人物にだ。

「今はそれどころではないのですよ、デイー。どうせまた、商人やらの団体ではないのですか？」

主たる男は顔すら向けず、慌ただしく機器を操作し続けている。まあ、防衛能力の高さから来る余裕もあるのだろうが、それにしても無関心が過ぎていく気がする。

「……失礼しました、一応、確認はして参りますので……私はこれで」

「ええ。念のため、ダンプも向かわせますので、侵入者であるのなら、あと一時間でいいので時を稼いでくださいな」

「……了解、しました」

その言葉を最後にして、デイーは主へ背を向け、部屋を出た。自働扉が閉じられると同時に、彼は拳を振るい壁を殴り付ける。

僅かにへこむ壁、手はもう何の痛みも感じない。痛みなんてものを遥かに超越する何かに、打ち消されたのだ。

「何が……時を稼げだ、私で十分だ、どうせ侵入者はいくらだろう！！ リアリスを手に入れた途端、私達はバリケードだ、ただのバリケードなのだっ、あのヨロイらと同じく壁である事を私は私に求めているのだっ！！ くそっ、くそっ、何の為のアドヴァンスド・ヒューマンなのだっ！！」

一言一言が口から放たれるたび、拳はより深く壁へとめり込んでいく。拳はもう、熟れ過ぎて落ちる寸前のトマトの様になっていたが、本人はお構い無しだ。

「私はダムとは違うっ、奴らを倒し任務を果たす！！ 私の言い付けすら守れなかったダムとは……」

度重なる打撃に、壁はミシミシと音をたてていき、そしてついに、

「違っっっっっっっ!!」

厚さ二十センチもの鉄板が砕け、大穴が開く。同時に拳も砕けたらしく、激しく出血してしまった。

肩を激しく上下させ、荒い呼吸を繰り返すトイドルディー。何故か、彼は不安定だった、それも極めてである。アドヴァンスド・ヒューマンとなってもう、五年になるうかというのにだ……。

あの日、強化された日から、感情の揺れ幅を折れ線グラフにでもとっていたなら、今日は記録用紙を振り切った山谷が確認出来た事だろう。

どうしてだ……何故、自分はこれ程苛立っている？ 分からない、分からないっ、きつとあいつらが生きていたからだ、さつさと始末してしまえばいいのだ連中など。

「ハア……ハア……ハッ、ダンプが居るならば……私が急ぐ事もない……」

反発する本心、激しく責め立てる本音。ディーは、仮面を被せた、無理矢理に、自律を肯定するそれらに必死で。

だから、少しでも冷静に平静に……仮面が心を覆う必要があった。ようやく、安定を得はしたようだ……だが、苛立ちは消えなかったのだ。

全部で六機もの、巨大な犬似の兵器、オルトロス。だが、オリオ

ンか先行（特攻）した為なのか、内四機が彼へと向かう。残るは二機、それがイーザの相手にすべき敵だった。

砂上を全力で、大きな円を描く様に機動するイーザ。たった今、彼の背後で爆音と共に砂柱があがる。いくつも、いくつも。敵兵器の背中には大砲が二門あり、それが同時に火を、煙を吹く。二機分だから、一度に四発の砲弾が飛来するのだ。

連射こそ出来ない様だが、それでも四秒に一度は振動が襲った。

雨が降っているというのは、むしろこちら側に悪影響が大きい。走っていると雨がこちらを目指して飛んで来ている様で、時々目に入ったりしやがる。オリオンをしばいてやりたい気分だった。

しかし、雨降って地固まるという言葉がある様に、足場は濡れる事によってしつかりとして来ているのが、唯一の救いだろう。どういう訳か、オアシスに近けば近付く程、砂ではなく適度に粘土を含んだ土となっていているのだ。

だから、走るのに足を取られる事もない。オルトロスより見て時計回りに走りつつ、じわじわと間合いを詰めてゆくイーザ。それに伴い、砲弾の音と砂柱がだんだんと背中近くなっているのも感じているが、仕方がない。何せこちらの攻撃射程は長くはないのだから……。

どれだけ走つたろうか、手前の一体と奥の奴が一直線に並ぶ形になり、奥の奴からの砲撃が止んでいる。そして手前は射程内におさめた、今だ。

「アルカヘストオオ!!」

すぐに右の手の中へ形を成す黒色の拳銃。間髪入れず引き金を引き発砲、一気に六発もの弾丸が発射される。金色の尾を引き直進する魔力の弾丸が向かう先、すなわちイーザが狙ったポイントは一点

であった。

サイズがでかくて表面積の大きい敵に、あちらこちらへとチマチマ攻撃しても効果は薄い。内側へと、それも一点に集中してダメージを叩き込めば、それなりに効果も期待できる……そうふんだいーザは、敵の背中、大砲の発射口内へ三発ずつの魔力弾をお見舞いしたのだ。

ここは予想通り、オルトロスの背にて派手な爆発が起こり、大砲だけでなく後ろ脚までもを破壊した。

途端にガクツ、とオルトロスはうつ伏せに倒れて行き、悲鳴にも似た機械音を響かせる。

油断してはならないが、とりあえずは一機の戦闘能力を奪い去ったと判断していいだろう。

と、直後、もう一機の砲弾が手前の機を貫き飛来する。どうやら戦闘能力を失った個体は、ただの障害物に変わったようだ。

「グツ……」

着弾、ごく近くに。大気の衝撃が、力を得た砂煙が、そして爆炎が三位一体、渾然一体となりイーザを殴り付ける。だが……それでも彼は止まらない、ひたすらに、左方へと足を動かす。

が、ようやくというべきか、歓迎出来ない出来事。砲撃を止め、オルトロスはこちらへと駆けて来るではないか。

家に帰れば主人に飛び付くペット……それをカワイイと思っている人には失礼かもしれないが、コイツのお帰りを味わったら死ぬ、確実に。

直線的に飛ぶ砲弾とは違う、こちらを目掛けて、狙って走って来ている。電柱よりまだ太く遅しい前後脚、それが高速で回転運動しているのだから、触れただけでも致命傷、粗挽き肉団子だ。

「クソオ!!」

ダメだ、ダダダダつと確実に、駆動音が大きくなってくる。こ
うなったら、ギリギリまで引き付けて……。

「今っ！！」

咄嗟に、直角へ飛び退くイーザ。直後には真横を通過する大質量。
まるで大型貨物トラックだ。だが、相手はあの速度で通過したの
だ、すぐには旋回できまい。後ろからアルカヘストを叩き込んでや
る！！

奴は、左旋回を選択した様だ、自身の弱点をよくご存知で……即
座に発砲、やはり六発の魔力弾がエナジーの尾を引き、オルトロス
へと向かっていた。

命中、六発中、四発。だが外装甲は貫けない、傷の一つはついた
のだろうが、内部に叩き込まなきゃダメなのか……砲門は閉じてし
まっているし。

いつまでも動かねえぞ、俺の足は。

そうこうしている間にも、オルトロスは旋回を終え、もうこちら
へと再突進して来ていた。

くそっ、予想より早ええ、だからイヤだったんだ、無闇に突っ込
んだりするの！！

オリオンの……

「バカヤロオオオ！！！」

「馬鹿じゃないいいいい、正義だ！！ あっ、僕の事じゃないな
ら、あきらめるなイーザアアア！！！」

「つつ、おおおオオ!？」

飛んで来た……オレンジに発光する何か。ってか、言うまでもなくオリオンだ。それが真横からオルトロスにタツクル、横倒しにしてしまい、更に跳躍からの顔面着地。

「オリオオオンナツクウル、強!!」

そこから追撃の拳が、頭と思しき部位と本体の接合部を破壊、切り離し地面にも大穴を開けた。

ただのパンチがもの凄い事になっている、土のえぐれ具合なんて隕石が落ちたみたいだった。

「よし、これで全部だね番犬共は」

「おつ、おい、もう片付けちゃったのか、それに何かお前、身体光ってるぞ?」

オリオンを包む、薄オレンジの光、なんか気を纏っているというか……。

「使いたくはなかったんだけどね……試作能力の一つ、一度きりのリミッター解除。これを使えば、僕は早く、そして強くなれるんだ、その代わりにリミッターが再作動した時、一時的に……」

「一時的に?」

「テンションが下がる」

「本人の努力次第でどうともなるだろ、それ!!」

「どうにもならないから欠点なんだ、まあとにかく、早いところ突入しよう、リミッターが働いていない内にね」

そうだ、確かに。気が付けば、例のヨロイが出現し、こちらを包囲しつつある。こいつら、どうやら砂の中に隠れている様で、地面から現れていた。

「イーザ、連中は顔の紅い光……核を潰さない限り動いて来るから注意してよ」

「あ、ああ分かった」

「じゃあ行くよ!!」

すぐさま地を蹴り、飛び出すオリオン。即座に一機のヨロイ頭部を攻撃、へしゃげさせ、砂に還す。

「どけどけどけどくんだねえええ!!」

二機、続いて三、四に五、確かに速過ぎて強過ぎる。イーザがアルカヘストを放った時にはもう、狙っていたターゲットの頭が消し飛んでいた……その繰り返し。コイツの通過した後は、ペンペン草も残りやしねえのか……。

まあいいか、俺は奴の後を着いて行けばいい。こりゃあ楽だ、また一機、ろくに何も出来ないまま砂へ還る。

「見えた、イーザ、あれが目印のハズさ!!」

どこにいいのか、いまひとつ目に捉えられないが、オリオンの声があった。

確かに前方には、今までヤシの木に隠れ見えなかったが、建物が……パルテノン神殿にも似た、長方形の建物が見えた。オアシスに似つかわしい、純白の神殿だ。

「おい、見たところ何もなし誰も居ないぞ、あそこには」

「地上は飾り、地下にあるのさ……一気に行くよ!!」

神殿の上、何もない建物の中央にイーザとオリオンは立つと、彼はそのまま拳を床目がけ振り下ろした。

一瞬の静寂、後に崩壊。床が丸々抜けて、下へ下へと引き込まれてゆく。

「そうか、床下に空洞があつたんだな!!」

「そうさ、着地に備えて、結構高いよ」

どうにか体制を整え、床の下の床に着地したイーザ。どうみても、この地下は人工物だった。鉄の壁に、鉄の床、それらが一本の通路をつくり、奥への暗黒だけを映していたのだ。

オリオンも続いて、床を粉碎せんばかりの衝撃を伴い着地する。それと同時に、暗黒の中に灯る数多の明かり……紅の眼。

「ちつ……中にも居たか」

目に入ったのは、ヨロイの大軍。紅が一斉にこちらを向き、カシヤツ、カシヤツと不気味な音がいくつも聞こえ始めた。

「まだまだア、イーザ、気合い入れて行くよ!!」

「ああっ！！　ここまで来たんだ、派手に行かせて貰うぜ、無限
精力開放オオオ！！」

（待ってるリアリス……もう少しだ……）

第十三話 ハンプティータンプティ

「ハア……もう死にたい……」

「うおおおおっ、リアリスう、待つてるオー!!」

「マジだりいよ……ナンで世の中、こんなどうでもいい事ばっかなんだ」

「くそっ、どんだけ続くんたこの通路は!!」

「正義……？ ああ、そんな事言つてた時期もあつたよね……」

「……………」

「ハイ皆さん、Project Re Alice最終回ですよー、つまんなかったでしょ？」

「ウソですよ!?! 何言つてんだテメエ、低い、低過ぎるぞ、どうしたんだそのテンションはあ!!」

先程までは、オリオンのネガ発言を聞き流していたイーザであったが、さすがに限界は来た。とんでもねえ事言いやがる、コイツ、と。

「りみったー、解除ノ、弊害、ダヨサ……」

「なんで急にカタコト!? しかも“だよさ”って、語尾まで定

まっつてねえじゃねえか!!」

「はあもうだるいしつかれたしまじやるきねえよむしろころしてくれよいーざぼけこのかすぎぶりやろっ」

「饒舌過ぎる!! しかも半分は俺の悪口じゃねえかああ!!」

あれは、ヨロイらを全滅させた直後の事である、オリオンが急に頭を押さえ苦しみだしたのだ。

幸いにも僅か数秒悶えただけで済んだのだが、起き上がった途端のこの調子であった。

本人がちよっと前に言っていた、“どうにもならないから欠点なんだ”という伏線。しかし、さっきからの会話は明らかに意図的な様な……どうにかなってないか、コイツ?

「実はお前、どさくさ紛れに言いたい事言ってるだけじゃねえのか!?!」

「気の利いたポケモかもませない僕はポンコツだ……いや、むしろトンコツラーメンだ」

「うああああああっ、絶望的に面白くねええ!!」

性格に少々難のある奴だと思っていたが、実力はあるし、コイツの前向き発言には幾度も助けられた……だけど、今はダメだ!! 何で頭を機械にし忘れたの、ヴァンベリューとやら。三歳くらいのがキが核ミサイル発射ボタンで遊んでるみたいだぞ。

「まあ今はアレだ、しんどいだろっが、行くぞオリオン。ほら、大丈夫だって、きつとうまくいくから」

何で俺がフォローしないといかんのだ。

「リアリスを逃がしたい君はうまくいくだろうけどね、僕は彼女を逃がした責任をとって解体処分かもしれないんだよ？ 何せヴァンちゃんの命令に逆らっちゃったんだしさ……」

ヴァンちゃん言われてるぞ、造物主！！ しかも何気に痛いトコついてきやがる。ああっ、もう！！

「とっ、とにかくだっ……ホラッ、扉が見えて来たぞっ、俺達は確実にリアリスの元へ近づいているんだ！！」

「どうしてこっちだと……？ 反対方向に進んでいるかもしれないじゃないか、それにこの扉を開けた瞬間、はいさよなら獄界行きーとかになるかもしれないんだよ？ ああ……僕は今まで正義の名の元、どれだけの争いを生んで来たのか……心から反省したい」

「正義は孤独な事だっである、お前にはその覚悟があっただろう！！」

「……ごめんなさい、僕はもう少し協調性を持って行動すべきだと思っ……」

くそっ、考えるより先に口が出る、な奴が下手に頭使いやがって……タチ悪いわ……

ならば仕方ない、ここは退治するだけがゴーストバスターじゃなあってトコを見せてやるか。

イーザは、一応ゴーストバスターという職業である。その名の通

り、人に害なす妖怪やお化け、果ては悪魔や天使までもを相手にする男である。

しかし、何も戦うばかりが脳ではない、時には交渉という手段を用いる事だつてある。話し合いはそれなりに得意だと自負しているのだから、口を使うのだ。

「なあオリオン、お前バカだろ？」

「……………うん」

「しかもだ、散々考えなしに無茶しやがって、無策にも程があったろ」

「……………うん」

「だけど、な、そんなお前がうらやましいなあ、俺は」

「えつ……………？」

「お前はすげえよ、絶対に無理だ、と思える事でも平気でやり遂げちまう。どんな道理の壁が立ちほだかつて、無理をブチ込み砕いて進む、それはすげえ事なんだ。」

「イーザ……………」

「オリオン……………お前はさ、壁が砕けるまで無理をぶつけ続けられる……………どれだけ無理がへしゃげようが、ねじ曲がろうが……………だからお前はすげえんだよ、俺も思わず尊……………」

「何、当然の事を言っているんだい。さあ、弊害も治ったしさっ

さと先へ進むのさ」

「……おいつ……」

「戦路は続くーよー、どーこまでーもー」

「……突っ込まねえからな……」

正しくは線路な、分かっているとは思っけど。
しかしもういい、もう何も言っただらん、この野郎めが。

「さあてこのドアを……どー……ん……」

文字通り、派手に吹っ飛ばしやがったし……ってか、今度は変に
テンション高い。オリオンというキャラクターがぐんぐん崩壊し
ているが、本人はまるでお構い無しである。

さて、扉を開けた瞬間の獄界行きはなかったものの……聞こえて
くる。

ただの暗黒、そのヴェールの奥から聞こえてくる。ギギッ、ギギ
ツと、錆付き軋んだブランコみたいな音が……。

「また、ヨロイ共か？」

「いいや違う……もっと重い何かだよ」

と、言うのが先か動くのが先か、闇を切り裂く光と音。
パパパパッ、と光の中に敵の姿を描き出すフレア光。飛来して
くる、複数の何かが……。

「ロケット砲だつ、避けるイーザ！」

「ちよつ、待てええええ！！！」

咄嗟にイーザは左方、オリオンは右へとかわす。次の瞬間には、丁度中央をシャツと数発、ロケット弾が通過、すぐに壁へと殺到し爆発を起こす。

そしてキュリキュリと、まるでキヤタピラが地面を這う様な音、同時に暗黒が真っ二つに裂けた。

中心の音源を、暗闇が避けて行った様にも見えたのだ。

「ワ、我が名八、ハンプティータンプティー……ココカラ先、行かせナイ」

ひどく不快な合成音声で、それは語る。

ようやくイーザにも目視出来たその者……だが、見なかった方が良かったのかもしれない、化物だった、そいつは。

高さはイーザの頭から、更に上半身分も高い、人型の何か。人型といったのは、腕らしいものと足らしいものが二本ずつあるからだが、腕は人のそれではない。

例えば、あの左腕……肘から先が武器であった。六のバレル、円柱形の筒、下に垂れ下がる弾薬ベルト……ガトリング砲だ。

右手もやはり、肘から先は丸々機械部品。用途は今のところ見えてこないが、武器である可能性は高いといえる。

足は、膝中央から二分割される形で、チエーンみたいなものが張られ、すねを通り足を通り裏側へと……何だか、キヤタピラみたいな構造だ。

どう考えてもフレンドリーな奴じゃない、圧倒的火力で跡形もな

く抹殺に来たんだろうな。

「イーザ、先に行くんだね。コイツは僕が相手するのさ」

「何！？ 二人がかりで行った方がいいんじゃないか……？」

「君は一発でも弾を喰らったら致命傷だろ？ しかも弾より速く動けない、そうだろう？ 君をかばいながら戦える程、ぬるい相手じゃなさそうなのさ」

オリオンは珍しく、真剣な面持ちで言った。

確かに、ロケット砲がどこかについているのだろうし、奴は弾幕、攻撃バラ撒き系だ。しかも一撃一撃が必殺、立ち止まれば八子の巢。

「分かったよ……だが、どうやって突破するんだ、あんな奴。行かせナイ、とか言ってたし」

「月並みなやり方だけど……僕がひきつける、君が行く、おk？」

「おつ、おk」

イーザの返答を聞き終わる前に、オリオンはハンブティータンブティータン、通称ダンプを睨み付け言った。

「明らかな旧式機械人形め、火力が全てじゃないんだよ、戦いとは……！」

「ナニイ……ヤセツポツチガヨク言ウ」

「訂正する事だ、おデブさん……僕はねえ……」

息を全力で吸い込み、決めゼリフ。

「細マッチョなんだあ！！」

敵の左手が火を噴くのと同時、オリオンもまた動き出す。
脚部を高速回転運動、ダカダカと猛ダツシユ。

そのオリオンの軌道をなぞる様に、次々と着弾する弾丸。

出来るだけイーザから離れる様に移動、一気にいかず少しずつに
だ。

じわじわと旋回しながら射撃……半固定砲台と化しているダンプ。

だが、確実にイーザから視線が逸れていく。今だっ！！

うおおお、だとかおりゃあああだとかは叫ばない。あくまでも
インビシブルに、サイレントに、それでいてカサカサと。

うう、何だかどんどん、黒いアレっぽくなっている様な気がする
……オリオンにすりこみされてるのか、俺は。

まあ、ともあれ闇に紛れていざ行かん。

よしよしいぞ、気付いていない、アイツもたいして賢くないみ
たいだ。パワータイプは馬鹿がセオリーなのだろうか。

「ムッ、ドコへ行く、キサマ!!」

うおっ、気付かれた!? だが、それならそれ、もう足音や静粛性も気にしない、全力疾走だ!!

「逃ガスカア!!」

もう奴はオリオンなど眼中にない様で、全砲門……左手、右肩のロケット砲、そして左肩にも付きのガトリング砲を一斉にイーザへと向ける。

圧倒的な面の攻撃が、彼を飲み込んでしまうのだ。

だが、イーザには確信がある……頼りになるアイツは、口に出した事は必ず実行する。それこそ、無理をぶつけ続けられるのだ。

「逃がすさあ!!」

やっぱり、オリオンはやってくれた。背を向けたダンプを蹴飛ばし、照準をズラしたのだ。

弾丸やロケット弾はイーザを大きく逸れ、ひたすらに壁面をうつ。

いよっし、これで安全圏だ、もう大丈夫……。

そこで跳弾、弾丸が壁に当たり反射、そんな流れ弾がパサッ、とイーザの髪の毛一本をちぎり取る。

「うっ、ああああ、かすったああああ!! イヤーっ、もっと速く走れ俺エエ!!」

なんとまあ、カッコ悪い所を見せてしまっはめになったが、事実結構余裕でイーザは、暗闇の間を脱出した。

「グツ……ヤセツポツチイイイ!!」

「怒った、怒ったのかい？ そんな短気な事じゃあ僕は倒せない」

「ホザケエ!!」

その言葉を皮切りに、再度の攻防が始まった。

・

扉を抜けて分も経たぬ内に、また扉。

人がすれ違うのもギリギリな通路を進むイーザは、思わず開くの躊躇した。

ここは敵の本拠地、そしてあれだけ派手に突入したのだから、当然敵に俺達の存在は知れ渡っているだろう。

つまり、開けた瞬間にグサツ、って事が十分にあり得る。

オリオンみたいに化物じみていれば話は別だが、俺はちよつとした能力を持っているだけの、ただの人間だ。奇襲があったら、避けられるかどうか……。

「だけど、時間もないしなあ……」

そこで思い出した事、そうリアリスだ、彼女が何をされているのか分からない。オリオンだって、せつかく先に行かせてくれたのだし……迷っている場合でないのだと、再認識。

無限精力、開放……これほど静かに行ったのは初めてかもしれない。だが、これで備えは万全だ。

いよいよ、扉を開く。

僅かに押し、次の瞬間には一気に開く。そこから全力で室内へと滑り込む。

……何の反応もない、畏はなかったか。ゆっくりと身体を起こす、しかし油断なく構え、歩くイーザ。

ここは、先程の様な何も無い部屋ではないらしい……テーブル、二つのイスに二つのベッド、さらには二つのコップ、二つの皿……奥には書棚らしいもの。

二つずつある……という事は、おそらくは……。

「ここまで辿り着いたか、イーザ」

部屋の奥、書棚の影から声がする。もう分かっていた、お前は……。

「トイードルディー……」

漆黒のコートに、顔の右半分を仮面で覆う男……そう、双子の兄、トイールドルディーであった。

「残念だったな、オリオンとかいう小僧がいれば、まだ勝機はあったろうに。お前はここで、確実に死ぬ事になる」

「そうかい、でも俺は、リアリスを助けだしてやらないといけないんでな、まだまだ死ねねえんだよ」

「忘れたのか……？ お前は私に勝てない、何があってもだ」

イーザの脳裏に、リアリスがさらわれた時の光景がよみがえる。あの時自分は、コイツに一撃も入れられず敗北してしまっていた。

「今度こそお前は、何も感じる事なく、虫けらの様に死ぬのだ」

確かに、ディーは強い。弟のダムよりも、ずっと。だけど、ただ、どだ、

「関係ねえよ……」

もう、今に至っては、過去の勝敗など何の意味もなかった。

もう、負けない、負けたくない、負けられない。

「いつまで、昔の勝ちにこだわってんだテメエは……だったら、天地ひっくり返してでも勝ってやるよ！！」

何もない空間に光が生まれ、解け合い、剣を成す。ボロボロで、錆にまみれた、刃こぼれだらけの剣……それを手に取り、イーザは

言った。

「フン、深くないなイーザよ。ならば、私も武器を使ってやろう」
と、デーは、傍らに立て掛けられたものを手に取る。

それは死神の武器……漆黒の彼にふさわしいものだった。大鎌……
湾曲した刃が閃く。

「では、準備くらいさせてやろう……あの世行きの準備をな」

「いらねえよ、そんなモン」

「そうか、では……」

「……………」

今は、今だけは、神にでも悪魔にでも、天使にでも祈ってやる。

俺は……………。

「死ねえい!!」

瞬間、大鎌がイーザの喉元に迫っていた。

第十四話 弱く儂いヒトという生き物、強く儂い機械という存在

“イーザ……イーザ、私は、ここに居るよ、私は……”

“ヒトは弱く儂いものです、あの者達よりも遥かに……だから、ヒトという種は……”

“ホザケエ、ヤセツポツチガア！！”

“細マツチヨなんだあ！！”

“お前は私に勝てない、何があってもだ”

“天地ひっくり返してでも勝ちゃあいんだろ！！”

弱く儂いヒトという生き物、強く儂い機械という存在。

だが自分はいずれでもない、あの世界で生を受けた自分は違う、強く、そして永劫……ずっとずっと。

そんな私は、この世界にやってきて初めて、ヒトというものを知った。

翼を角を尾を、さらには魔力を力ですらも持たぬ生き物。外見こそ、全て一定で、頭は一つだし手は二つ、足も二つ胴体が一つ。

不思議に思ったものだ……何故、これほど弱い生き物が、我が物顔で往來を歩けるのかと。

この世界には、あのヒトという種より上位の種が居やしないのか、そう考えもした。

弱肉強食、そんな単語すら忘れ去られた、バカみたいに平和な世界……ぬるま湯が心地よいらしい。

ならば、私が最上位種となるのも面白い、そうも思ったものだ。

あの男、イーザラントがこの私、エリスティシウス・バベルブルグの前に現われるまでは。

幾人も幾人も、私を退治しようとして現れては消えていった。だから、今回はちよつとばかり遊び心を出してしまった訳だが、それがいけなかった。

“俺はイーザラント・D・カナートウスと言う者なんだが……お前、名前を聞かせてくれないか？”

まず、イーザは自らの名を名乗り、ヒトで初めて私個人の名を問うて来た。

イーザは、別段驚きも恐れもせず、あっけらかんとそう言ったのだ。面白い奴だと認識し、またもや顔出す遊び心……私はエリス・ブラッドと名乗ってやった。

“俺はお前と戦いに来た訳じゃない……話し合いをしに来たんだ。

お前の様に美しい奴だと、特に”

ああ……………この後の事は思い出すのもおぞましい。いとも簡単に引っ掛かってしまった私はバカだった、私ともあるう者が、一個人との間に契約を成立させてしまったのだ。

だが、成立してしまった以上は、一応イーザが契約主である訳で……………。

「私は、仕方なくやっているだけなのだ」

さて、飛行する彼女の眼下には、既にオアシス……………そして地盤沈下を起こし、砂に埋もれかかった建造物が見えていた。

「フン、なるほど……………イーザはあの中という訳だな？ いいだろう、助けてやるとするか、契約主様をなあ」

と、エリスが降下を始めた、その時であつた。残存していたオルトロス三機による、一斉砲撃が彼女を襲つたのだ。爆音が轟き、飛来する複数の砲弾。

だが、既に彼女の姿はない。ターゲットサイト内に存在していない。まるで、消え失せたかの様だ。

「機械、とかいうものか……………まだまだこれではな」

言葉が切れるより先に、オルトロスの内一機が、機能を停止してしまっていた。顔面から背中までを、風通しよくしてだ。

「訓練用のナイトシャドウの方がまだ、手強い」

続け、彼女は自身の槍……一本の柄を中心に、対称刃の付いた槍を、一振り。

すると、それだけの事で二機目のオルトロスが胴体真ん中から分断され、二つのスクラップと化す。大気の刃、目に見えず、レーダーにも映らない攻撃によるものだった。

だが、隙をつき、三機目が背面のリボルバーキャノンを発砲、こればかりは正確に、一直線に、エリスへと向かうが……

それも、手前二十センチまでであった。弾丸が、完全に停止してしまっていたのだ。

オルトロスのレーダーでは、直撃しているはずである。

「子供騙しに過ぎない……こんなものは」

ゆっくりと手をかざし、弾丸の正面へともつてくると、彼女は一言、呟く様に言った。

「ソート・レイ」

と。光系術の最も基本的なものであり、最も簡単な魔術である。

さて、エリスの手のひらから放たれた光線は、弾丸を、そしてオルトロスへと命中し、これまた一撃で始末をつけた。

僅か、数十秒の戦闘内容は、余りに圧倒的で一方的なものだった。

「終わり、か。では、行かせて貰おう」

こうして彼女は実にスムーズに、敵拠点への侵入を果たした。

第十五話

A n d

「オリオオオン・ダアアッシユウ!!」

機械仕掛けのオリオン、彼の両脚は、言ってしまうば車の車輪周りの構造に似ていた。

一本のシャフトが通っていて、その両端に太もも以降のパーツが接続されている。両脚は乱れる事なく等速回転運動をし、一見、マンガ表現の渦巻きみたいになるのだ。

敵、ハンプティータンプティータンの雨霰あめあられが如く弾幕をくぐり抜け、着々と間合いを詰めるオリオン。

その動作挙動たるや凄まじく、床を壁を、更には天井をも駆け抜ける。弾幕の幅が、捉えられない移動量。

「ヌウウ、ヤセツポツチメエ、コザカシイ!!」

右肩のロケット砲が、同時に胸部が展開……要はシャツと自動ドアの様に開いて、ミサイルが頭を覗かせる。

一斉、掃射。まずはロケット弾が一直線に、続けて大型のミサイルが、共に白煙を引き飛来する。

直進しか脳のないロケットの回避は容易である。しかし問題は、後続のミサイルであった。

動きこそ、それ程速くはない。一般成人のランニング、その程度の速度で飛んでいる、ミサイル界の亀な訳なのだが……。

亀は亀でも噛み付き亀らしい。オリオンが動けば、ぐぐつと回頭、彼の方向へと確実に頭を向けて来る。

「なつ、何だい、このミサイルは」

今現在、跳躍し天井近くのオリオン。上を向き、上昇する四のミサイル。ホーミング性能に特化したものの様だ。

追い付かれる事はない、だが、何かの間違いで脚を止めでもしたら、餌食となる。

だが、オリオンはオリオンなりに考えがある。わざと壁を背にし、運動を停止。いずれも、正面から迫るミサイル群。

「ナニヲ考エテイル!？」

「君には分からないだろうね、脳ミソ機械!！」

ゆらゆらと巡航する兵器。対象をいつまでも追い掛ける代物だといふのなら、引き付ける。ギリギリまで引き付けて……そこから急に動作すればいい。

そうすれば方向転換が間に合わず、アレらは壁へと衝突、爆散するだろう。基本だよ、基本!！」

もう、ミサイルは目前に迫っていた。よし、十分だ、これ以上引き付けると爆発に巻き込まれるしね。

そこから両脚を急駆動させ、一気に移動。さあ、目標を見失って壁へと殺到するがいい。

しかし、彼の思惑は外される。ミサイル群は壁に当たる寸前、スルツと急旋回を見せ、尚もオリオンへと向かうのだ。

「なんだってえ！？　どんな仕組みさコレは」

「フハハハハ、分カツテイナイノハ貴様ノ方ダツタナ、ヤセツポツチ。兵器ノ性能ヲ勝手ニ決メツケルンジャンナイ！！」

合成音声が、笑う。ひどく耳障りだった。黒板爪引つ掻きに同意義の煩さだ。

「いいよ、ならお前からまず倒させてもらうからさっ！！」

そうだ、ならばまずダンプを倒し、この部屋を出て扉を閉めてやればいい。それで終わりだ。

ミサイルを振り切って、一気に接近戦へ。奴が発砲して来ないのは、流れ弾がせっかくの追尾兵器に命中するのを避けている為だろう、今がチャンスなのだ。

ジャンプ、またまた天井近くまで舞い上がり、着地、そして正面のダンプに対し、躊躇なく拳を繰り出す。

だが、またしても計算違い、ダンプの脚にはキャタピラにも似た機構があったのだ。瞬時にそれが駆動し、後退。間合いが離され、オリオンの一撃は空を切る。あの外見や装備からは、考えられない

高機動であった。

「なっ……」

「遅イゾ、ヤセツポッチ！！」

体勢を崩したオリオンに、今度は猛烈に突進するダンプ。これまで用途不明であった右手が起動する。

手のひらのパーツが変形、あるいは合体し一つの形へ、円錐形のそれは、ドリルであった。

「トーヴァー！！」

トーヴァー、その名を冠する回転体が、オリオンを捉える。胴体への直撃は避けたものの、左腕を完全に貫かれ、そのまま彼は力に押し切られる。

「ぐっ！？」

身体を一気に持ち上げられ、とどめといわんばかりに、ミサイル群目がけ放り投げられた。宙舞うオリオン、空中では自身の向き方向を変更出来ず、なすがまま。

直後、四発のミサイルへと突っ込む形となり、派手な爆発が起こる。カランカランと、いくつかの細かいパーツが飛び散った。

「ドウシタ、モウクタバッタノカ、ヤセツポッチメー！！」

口ではこう言うものの、油断なく爆心地点を見やるダンプ。やが

て黒煙が引き、そこには……やはり、まだオリオンは立っていた。予想どおりだ。

だが、彼の左腕はちぎれ飛び、両脚にはバチバチと紫電が走っていてマトモとは言えない、ほぼ、戦局は詰み状態だった。

「ホウ……思ッタヨリ損傷八少ナイヨウダナ、ナカナカ二頑丈ナ事ダ」

「……まだ、まださ、お前ごときには、死んでも、負けないよ……」

頭部、唯一の生身である部位は庇ったらしく、大きな損傷は見られないが、真っ赤な液体が僅かに流れだしていた。

「強ガリヲ……ドウヤツテ勝ツトイウノダ、オ前八？」

再び、脚のキヤタピラを起動させ、あっという間にオリオンの目の前へと移動する。

「モウ、ロクニ脚八動力セナイ様ダシ」

右手がうなりをあげる、トーヴァ、あのドリルだ。

「うおおおおオオ！！」

飛び退いて回避、しかし今度は左手のガトリング砲が火を噴いた。

「オマエハ、殴ル蹴ルシカ出来ナイシナァ！！」

「くっ、おおっ!!」

もう無理矢理だ、身体を強引にねじり、回避。どうにか立ち上がりはしたものの、無茶が祟り右手にまでトラブルが発生してしまっていた。

「サア、イヨイヨ打ツ手ナシダナ、ヤセツポツチ……一気二葬ツテヤロウ」

(いや……まだ、終わっちゃあいないさ……アレを、アレを使えば……しかし、それでいいのか……?)

全砲口がオリオンへと向けられる。頭に一発でも喰らえば一巻の終わり、ガードしたところで、あれだけの物量を防ぎきれぬハズもない。

(……一発限りだ……だけど、何を迷う事があるんだ、ここで使わなければ、僕は死ぬ、間違いなく……これで、決めなければならぬんだ!!)

「死ヌガイイ!!」

ダンプの全身が火を吹き荒らす。弾丸が、ロケット弾がミサイルが、全てが一点を目がけ発射されたのだ。

ぼやけた視界を埋め尽くす弾幕、さしずめ破壊の豪雨。

だが……オリオンにはあったのだ。この状況を打破する、一発きりの秘密兵器が。

ダンプの胸部が開きミサイルが出た様に、オリオンの胸部もまた、開く。その中には、砲口が存在していた。

「僕は……負けない！！ オリオン砲オ、発射アアア！！」

刹那、オリオンの胸部からほとばしった光の一撃は、襲い来る攻撃全てを飲み込み打ち消し、そのまま直線上のダンプを貫いた。

「ナツ……！？」

たかだか一撃のビーム砲撃で、彼は左半身側のパーツ全てをえぐり取られ、右半身も僅かしか残らなかった。

一瞬遅れ、全身にスパークが回り、煙を吹き、そのままダンプは倒れ込む。ほとんど、機能停止寸前の様相であった。

「ハア……ハアツ、試作重粒子エネルギーキャノン、通称、オリオン砲さ……一回しか、射てないけど、ね……」

「ババ……ババババカナナナ、ソソソソナナナ」

音声が乱れ、ますます耳障りとなるダンプの言葉。口をパクパクともさせず、どこからともなく喋っているのに、今、気付いた。

「……悪いけど、もう行かせてもらおうよ。イーザは……頼りに、ならないから……ね……」

走る事は出来ないのか、ゆっくりと、しかし確実に一歩一歩を踏み出すオリオン。もう、ダンプの方は一切、振り向かなかった。

「ガツ、ガガガガガがが、ヒャ百万ドルドルダゼゼゼゼ、コノノ女オン、ナヲヲ連レレレ、クダケ……デ……」

遺言めいたダンプの言葉に耳も貸さず、部屋を抜け、扉を閉じる。キィ、と音をたてて、部屋は閉ざされた。ここが、ダンプだけのものとなった瞬間だ。

「コ、ココウリツツツ重視視視……重……視……オ、オンナナナ……トリ……百百万……ダー……ララ……」

そこまでで、ダンプの音声は途切れた。

機能……停止……。

彼、ダンプは最後に、メモリーの中でヒトとして死ねたのかもしれなかったのだった。

第十六話

That daily dream why that wings

「オオツ!!」

喉元へと迫る、大鎌の一撃。

湾曲の刃を避け、一気にイーザはトイドルディーの懐へと潜り込む。

自身の体躯より長大な武器を、両手をもって操るディーである、隙が生じ易いとの判断であった。

「忘れたのか？」

だが直後にディーは飛び上がると、回り切った上半身への追隨を利用し、回し蹴りを繰り出した。

その一撃はキレイにイーザの顔面を捉え、直進のつもりが、強引に軌道変化を喰らってしまう。

更にディーはもう、吹き飛んだイーザを、自身の間合いに捉えている。

大鎌を振り上げ、倒れ伏すイーザ目がけ振り下ろした。

「チイツ!!」

しぶとく身体を転がし、回避。鎌が深々と床に突き刺さった際に、

起き上がるイーザ。

全てが既にギリギリのイーザに対し、悠々と鎌を引き抜き、じいっ、と敵を見据えるデイー。

わざと差を見せ付けているかの様な動作……しかし、今の彼の姿は正に、死を宣告する漆黒の死神そのものであった。

「私は、アドヴァンスド・ヒューマン……より、強靱な種へと上り詰めた、上位の存在……お前の様なただの人間に、勝てる道理などない」

そう語る彼の左半の顔には、盲信めいた何かと共に、暗く深い影が潜んでいるのを、イーザは見逃さなかった。

まるで、自分は強いと暗示をかけているかの様だ。以前、デイーと交戦した際には、こんな言葉を並べ立てそうにない奴だと思っただが……ともすれば、何かが彼を変えてしまったのだろう。

その何か……おおよその察しはつく。弟、トイードルダムの死だ、おそろくは。

「……随分と、自分をアピールしているな、デイー」

イーザは、紆曲なくストレートに言った。今のままでは確かに、デイーに勝てる可能性は限りなく低い。

性格の面から考えても、奴に平静のままでは、如何なる手段も封殺されてしまわれそうに思えた。

ならば、こちらから付け入る隙を作ってやるしかない。怒らせるか、混乱させるか、はたまた戦意を失わせるか……いずれにしろ、強さと平静さを併せ持たせたくはないのだ。

「そんなに、誰かに自分を認めて欲しいのか？」

我ながら、いやらしい手段をとも思っているが、仕方がない。ほんの少しでも勝率を引き上げる事が出来るのならば、である。

「お得意の挑発か？ 残念だが、そんな手には乗らん」

「いいやあ、違う。お前の目は、どこを向いてんのかな、と思っ
てな」

チャンスは、作ろうと思っても出来やしない場合がほとんどだが……隙を突かずとも倒せる可能性がある手段は、ある。

ダムにやった、あの方法だ。刃同士がぶつかり合ったタイミングで、俺の剣の力を解放し、大鎌ごとディーを切り裂く。この剣は、一時的であれ何でも両断出来るハズだ。

刃を振り抜く速度と、相手が突っ込んで来る速度が合わさって、神速の一撃と化するのである。

「私の目……だと？」

「そうだ……確かにお前は、対峙する相手を見てはいる、だが、意識はしていないみたいだ。お前は誰を見ている？ お前らの飼いか、それとも弟か？」

弟、というワードが出た時だろうか、僅かにディーは反応をみせる。

「ダム、だと？ あいつは死んだ、お前が殺したんだろうが」

口調が変わった……全身が小刻みに震えている。必死で、平静を保っている風だ。案外、脆そうである。

事実、現時点での彼は、平静ではない。平静の仮面を重ね身に付けているのだ……必死に、必死に。

「だが……私はアレ程無能ではない、妙な期待はしない事だな」

「無能なら、爆弾にするってか？」

「自爆コードだよ。機能が停止した後でも、敵にダメージを与えられる様になっている」

「お前も、そうなのか？」

「無論だ……だが、発動させる必要はない。私が負けるなどと、万に一つもないのだから」

「……多分、ダムは自爆の事、知らなかったんじゃないか！？」

「しつこいぞ、そして深くもない……弟はもう、関係ない」

鎌をゆっくりと構え、片足を半歩分、退けるディー。

また来る気だ、やはり奴の仮面を剥がす事は容易ではないな。

しかし一方のディーは、イーザの発言に少しずつ、煮えて来ていた。

度重なる弟に関する発言、こちらの心を乱しに来たと分かっている、ひどく不快だった。あの時からの、苛立ちも増大してゆく。

訳の分からぬ苛立ちを悟られぬ様、仮面の上に仮面を重ねる。

もう、いい。早いところこの男を始末してやろう、そうすれば苛立ちも治まるに違いないのだ。

「もう、喋るな」

地を蹴り、飛び出す。終わらせる為に。

この一撃で首をはねてやろう、それで終わりなのだ。

瞬時に間合いを詰めて、一閃。死ぬがいい！！

(それを待っていた！！)

イーザは、待ち望んだ一手に、全神経を尖らせた。見極める……相手の刃がどう来るのかを。

左側から、よっつ、剣で受け止める！！ 直後、イーザの武器に、異常な衝撃が襲い掛かった。それにどうにか耐えて、剣の力を……。

と、そこで彼は気が付いてしまった。今、自分の首をはねに来たと思われる刃は、真横から、いや僅かに背中方向から来ている。

ここで刃を切断したとしても、デイーは正面だ。そのまま剣を滑らせて、ダムを切り裂いた時とは違う……デイーに向けて剣を、改めて振るといふタイムラグが発生してしまうのだ。

奴の事だ、そんなモノでは仕留められるハズがないだろう。

「受け止めたか……だが、お前の力ではっ!!」

「ぐっ……うっうっうっ!!」

じわじわと押し込まれる……ダメだ、どうせこのままでは強引に切られてしまう。

クソッ、もう確実にだとか、効果だとか言ってる場合じゃねえって事だ!!

「うっ、おおオオオ!!」

「ムッ!？」

瞬間、イーザの剣が金色に輝く。力を開放……いや、本来の姿に戻ったと表現すべきだろう。

魔力にて形成された刃が、大鎌を瞬時に両断、同時に一歩ばかり後退。

目の前スレスレを平たい刃が通過、ディーが僅かにバランスを崩しているのが見えた、ここしかない。

「らあああああ!!」

踏み出せつ、前進だ、剣を振り抜けえ!!

ディーがもう、姿勢を回復し、回避にかかっている、間に合えつ、間に合っんだつ!!

「くうううううつ!!」

一閃、振り抜いた剣からは、何の感触も伝わっては来なかった。

だが、それは何も斬っていない訳ではない……あまりの切れ味の為、刃に抵抗が存在していないのだ。

奴の一部が宙を舞い、床へと無機物の様に叩きつけられた。ディーの、右腕が……。

更に、彼の仮面が、カランと乾いた音をたて、落下する。ポーカーフェイスでなく、無機質でもない、怒りの色を示した顔が、そこにはあった。

「イツ……………イーザアアア、よくもお、私の腕をを!!」

「それがお前の本性か、トイードルディー!!」

「殺すつ、確実にい!!」

デーは、物騒な宣言直後、大鎌をイーザ目がけ投げつける。凄まじい速度で回転、刃の半減した鎌が、強力な飛び道具と化す。

だがイーザとて、むざむざとそんなものに当たりはしない。咄嗟に飛び退き、どうにか回避する。

……回避したつもりであったが、スーツの胸部、カッターシャツ、薄皮までもを切り裂かれた。

(なんて攻撃……えっ?)

「死ねエエエエ!!」

もう、目の前に……? 直後、視界がホワイトアウト、何が起ったのか分からない。

確かなのは、自分が何らかの攻撃を受け……身体が猛烈な勢いで吹き飛んでいるという事。

「お前はあつ!!」

頭の後ろから声!? もうデーの奴は、俺の吹っ飛んだ方向の先へ、回り込んでいるのか!?

「私の敵つ!!」

力に対し、逆向きの力がイーザを襲う。分からない……自分が何をされているのかも、どうなっているのかも。

刹那、衝撃、背中にモロに。どうやら壁に衝突したらしい、この時点で意識があったのは奇跡に近い。骨の碎ける音がしなかったのは、更に奇跡だ。

「私のオオ、壁っ！！」

真正面から、拳が迫る。顔面を潰す気だろう、意識がトンでたら死んでいた、避けてやるっ！！

まだ、身体は動いた、拳は外れ壁を大きくへこませた。あんなものマトモに受けてたら、顔が破裂していた。

「アルカ、ヘストオオオ！！」

ようやくの一瞬一秒の隙をつき、イーザはアルカヘストを構成する。魔力の弾丸を放つ、黒色の拳銃である。

「ダムの……」

「オオオオオオ！！」

「カタキイイイ！！」

放たれた、六発の魔弾。一度に発射可能な弾数、その全てである。

一発、二発目と、ディーは驚異的ともいえる反射をもって回避してみせた。

しかし、三発目、腰横のマントコートを貫き、四発目、右足の太ももを、五発目、右肩を、そして六発目が完全に腹部を貫いた。

「ぐがああああ!？」

たまらず、その場に倒れ……ない、片膝をついただけで踏みとどまっている。

だが、明らかに、ディーの様子がおかしい。先程までの狂気じみた殺気が、しぼんでいた。急に体躯が、一回りも二回りも縮んだみたいだ。

「ハア……ハア……ディー……？」

その余りの変貌ぶりに、イーザも思わず声をかけた。自分の派手な流血も、全身を締め上げる様な痛みでさえ、忘れていたのだ。

「私は……何を、言った……？」

ポタポタと、彼の血が床に落ちる。間隔はだんだんと早くなっていき、少しずつ血だまりを生んでいた。

「ダム……ダムと言ったのか、弟の名を、私は言ったのか……？」

ひどく困惑している様子であった。目は見開かれ、呼吸は次第に荒く……ついには肩を上下させるまでに至っているのだ。

「わっ、私はっ、カタキとまで言ったのか、私は……？」

(……コイツ……思考が混乱しているのか……ダムの事で?)

「アイツは、どうして、壁、バリケード、私は、ダムを、バリケ

ードにつ、違う、バカな、ダムは、ダムは……」

今が、紛れもないチャンスであった。しまいには頭を抱え、悶え始めるデイー。

アルカヘストでも、この剣でも、トドメは刺せる、それこそ確実に…… だけど。

「わっ……私、私……私……ダム……」

だけど、もう分かっているだろう？ 俺にはそんな事、出来る訳もない。

デイーを生かしておいたら、後々の脅威になるかもしれない、邪魔になるのかもしれない。しかし、少なくとも今は、脅威ではなくただの一人だ。

それに、確かにお前はリアリスを連れて行ってしまった……だが、それだけだ。他に何がある、俺とお前の間に。

憎悪とか殺意だとかは、俺からはない。お前は、俺を殺すだけの理由がありながら、今の今まで知ろうとはしなかったのだ。

だから、後はお前が選べと、そう言った。

……バカだな、それでデイーが即座に俺を殺しに来たら、どうすんだよ。

愚かな選択だな……彼に背を向け、この部屋を出る。パタツと、扉を閉じた。つたく、どんだけエエカッコしいなんだ、俺は。

「いつ……痛、ああ、メチャ血い出てる……」

気付けば、カッターシャツは赤でベタベタになってたし、呼吸する度、鋭い痛みが襲ってきた。

やば、早いところリアリスの元へ……ザコ共、もう出てくるんじゃないぞ。

(ああ、そっぴやオリオンが居たな……アイツ、問答無用でデューにトドメ刺しせうだけど……まあ、アイツなら……)

イーザは、僅かずつにだが、薄暗い通路を進んでいった。

第十七話 Re Alice 1

「ハア、ハツ、ハ……ここか、リアリスは？」

イーザは、デイーの部屋を抜けてから、五分かはたまた十分かは歩き詰めであった。

身体が正常な状態であれば或いは、すぐに辿り着けていたかも知れないが、現状といえばあらゆる箇所からの出血、もしくは激痛の為に、とてもじゃないが走る事は無理だった。

壁にもたれ掛かる様にし、ズルズルと身体を擦り付ける要領で進んだ。

そして今、通路が終わり、眼前には鉄の扉がただ一つ。

他に通路はなく一本道だった……もう、ここしかないだろう。慎重に取っ手へ手を掛けると、微かに開く。

内部からは光が漏れて来ず、視認は不可能……どうやら内側は暗黒で満たされている様だ。

「……マズいな、目の前霞んで来やがった……早くしねえと……」

ここまで来て、ザコ共やデイーみたいな奴が出て来たらもうダメだから……頼むぞ、もう出て来るなよ！！

意を決して、扉を一気に開くイーザ。何の反応もなく、予想通り

の暗黒……しかし、進むしかないらしいな。

何もない……何も見えない室内に、足音だけがこだまする。距離感やら方向感覚が狂ってしまいそうだった。

果たして自分は今、前進しているのだろうか、真っ直ぐに進んでいるのだろうか、そんな事ですら曖昧になっている。

ある地点で、ガツと何かに足をとられる。何だろう……テーブルみたいな四角形の……よく分からん。ともかくこれを避けて、ゆっくりと慎重に……。

するとようやく先に、ちょっとした光源が見えて来た。赤やら青やら緑やらのカラフルな色彩が、明滅を繰り返している。

イーザに分かるのは、これが様々なボタンであり、巨大な機械の一部であるという事だけだ。

その隣には、空っぽの縦長、丁度一人入りそうなカプセルがある。何となくだが、非人道的な匂いのする機械だと思った。

「まさか……リアリスをどうこうする機械じゃねえだろうな……」

点滅するディスプレイには、コンピュータ COMPLETEの文字。

なんだ……どういう意味だ？ 分からない、分かるハズのない自分に苛立つ。だが、苛ついている最中、それは聞こえてきた。アナウンスだった。

“どうやら、小づるさい虫がここまで来た様ですね……まあ、い

いでしよう、ようこそタヤフォラ基地の最深部へ”

音質が悪い為、詳しくは分からないが……少なくとも男の声であるというのは分かる。

“ 貴方は幸運の持ち主だ、私の究極にして最高の研究成果を最初に味わう事が出来るのだから。さあ、目を覚ましなさい、リアリス！！！”

アナウンスが反響を繰り返し、部屋の手前側から、まるで波の伝播が如くパパパツ、と天井に明かりが灯ってゆく。

そして自分は今、部屋の中央付近に居て……奥側が広大なスペースとなつている。千人単位のイベントなら全然余裕、万人まではどうにか行けそうだ。

だがそれはいい。問題は最深の壁際、イーザから見て丁度正面に立っている、圧倒的存在感持つそれだ。

まるでドラゴンかワイバーン……一言で言ってしまうえば、機械仕掛けの龍であった。

イーザが昔見た、“ゴディラ VS メカゴディラ”という特撮映画の、メカゴディラをシャープにして、有機的にしてみたみたいな奴だな、とも思った。

遅しくも一切無駄のない二本の脚、三本爪持つ二本の腕、シャープでいて麗容な顔付き……天を舞い行くワイバーンそのものである。

(これが……リアリスを起動キーとする兵器なのか……?)

“機械龍ジャバウォーク……どうです、美しいでしょうか？”

アナウンスはそう言うが、イーザには恐ろしく醜いものに見えた。何故ならば……。

「リアリスッ！！」

起動キーとなった彼女は、そこに、目に見える形で存在していたからである…… 変わり果てた姿で。

龍の胸部に当たる箇所に、彼女は居た。ぶら下がっていたという方が的確か、両の腕は肘から先が、両の足は膝から先が、あとは背中が、あのジャバウォークとかいう兵器と一体化しているらしかった。

当人は、まるで眠っているかの様だ。目を閉ざし、何の反応も示さない。

「リアリスッ、起きろ、とりあえず目を覚ませ！！」

当然ながら、そんなものは一切効果がない。

“起動せよジャバウォーク、小虫共を踏み潰して差し上げなさい”

龍は、その言葉で遂に目を覚ましてしまった様だ……恐らくあれは、眼に当たる部分だろう、そこに赤色の光が灯る。

咆哮、いかなる獣のものともつかぬ、咆哮。ビリビリと大気を震

わせ、スペースを広がり駆けてゆく。

衝撃波にも似た何かが、イーザの身体をも振動させた。思わず目をつぶり、耳を塞いでしまう。

「ぐっ……うっ、動くのか、こんなモノが……」

ゆっくりと一步を踏み出す脚。腹の底にまで響く重低音。

“よしよし、起動も成功……さあジャバウォックよ、片付けを
しなさい”

返答なのか、再び一吠え、と同時に赤の眼がこちらを捉える。

「クッー!!」

イーザはすぐに、その場を移動、直感に頼り駆け出した。

ズン、ズンと奴はこちらに接近、刹那、つい今までイーザの居た
箇所が砕け散った。

破碎兵器と化したのは、ジャバウォックの腕である。あの、三
本爪を持つ腕が、あたかも大鎚の如く叩きつけられたのだ。

今までの相手とは規模が違い過ぎる……ディーらとも違う、一撃
で昇天確実であろう。

「アルカヘストオオ!!」

瞬時に右の手中に集中、黒色の拳銃となる光の粒子。しかし、イ

ーザには引き金を引く事が、どうしても出来なかった。

あの龍の、化物の胸部には、リアリスが剥き出し状態で張り付いているのだ……万が一にでも彼女に命中してしまつたら……そう考えると、この武器を使う訳にはいかなかったのだ。

「……………チクシヨウ……………」

こちらが躊躇しても、向こうさんは待ったなしだ。続いての攻撃が大気を切り裂き、急降下。

回避しなければ、と再び飛び退くつもりであった。しかし、頭でそう思えても、身体は正直だった。

足が固まった、全身がバラバラだ、バラバラに動く。予想以上に、ボロボロだったらしい……。

それでもどうにか直撃は免れた。とはいえ、もろに衝撃を受け吹き飛び、機器類に身体を打ち付けるハメになったが。

「ガッ……………はっ……………」

それでも意識は飛ばず、骨も砕けず……全く、いらん所で頑丈な身体だと、一瞬そう思えた。

“ やれやれ、まだ馴染んでいないのですか？ その様なモノ、一撃で葬れるハズですがね”

アナウンスも、ハッキリと聞こえた。多分、リアリスだ……リアリスが全力で抵抗しているから、ジャバウォックも本調子でない

のだ、と一人で勝手に解釈。だが、今の攻撃が外れたのは、やはり不自然だ。

と、まるで迷いを振り切るかのような龍の咆哮が、一際大きく響く。

(ああ……ヤベエ……)

じりじりと、確実にこちらを凝視する龍。今度こそ仕留める、といわんばかりだ。

(どうにか……なんねえのか……?)

身体が少しでも動けば、どうにかなったかもしれない、この口から言葉が出たら、どうにかなったかもしれない。

だが、今の自分はもう、何も出来ない。何も出来なければ、神風も吹きはしない。何も起きないのだ。

だが……つくづく、そう思う。イーザラント・D・カナートウスは、とてもとても、ツイている、運がいいと。

何もせずとも、神風が吹く、都合のいい男なのだ。

「オリオオオン、ナツクウウル!!」

突如として現れた何か……というか、技名叫んでる時点でバレバシだが、ともかくそれが、ジャバウォックの腕を殴り付け、軌道を逸らしたのだ。

イーザを外れる、ジャバの一撃。そして、やけに背高なそいつが、彼の前へと躍り出た。

(……オリ、オン……なのか……?)

おかしいな……なんだか、あのチビがニメートルオーバーに見えるぞ？ いかんいかん、頭がぼおつとして……。

「腕がなければ腕になる!!」

「脚がダメなら脚になる!!」

……俺は、ボケたのだろうか……?

「機械仕掛けのオオオオ、オリッ、オン!!」

「アドヴァンスド・ヒューマン、トイードルディー!!」

かつ……肩車?

「正義の使者、只今ああああ……参ッ上つ!!」

あ……頭痛い……。

第十八話 Re Alice 2

「正義の使者、只今、参ッ上っ！！」

……正直、オリオンの登場は予想出来ていた。だが、想像の遙か斜め上に行く登場をしゃがった。

トイードルディー……さっき、この俺、イーザと死闘を繰り広げた男……が、オリオンを肩車し、自らを正義の使者と名乗って現れたのだ。

「さあて、互いの弱点を補い合った僕らは無敵さ！！」

えっと……ディーが腕を片方失ったから、オリオンの脚代わりを……して……って、オイ、プルプル震えてんじゃねえか！！

ああ、そういや、アルカヘストが足に命中してるんだ……。

んで、オリオンの両脚がスパーク回ってるから、ディーの腕代わりをして……って、オイ、オリオンも片腕がねえじゃねえか！！

補ってない、補えてない！！むしろ性能二割減ではないのか？

「私は目が覚めた……オリオン君によってなあ！！もう私は主の壁ではないっ、トイードルディーなのだ！！」

あの冷静だったお前はどこに行った……オリオンなんかとシンク口しやがって。

「アルミューズ様より直々の命令だ、お前を捕まえさせてもらうよ……で、ターゲットはどこだい、イーザ？」

俺に聞かれても……。

“成程、やはりあの男、アルミューズの差し金でしたか……そしてデイー、私に齒向かおうというのですか？”

「ターゲットか、どこにいるんだい!？」

「落ち着けオリオン、アナウンスだ。我らが主の事だ、どこかでモニター越しに見ているのだろう」

おいつ、お前ら二人、それは今はいいから。問題は目の前の、ジヤバウォックとかいう奴だつて。

「悪の親玉は高みの見物つて訳かい……基本的かつ正しい態度だねえ」

つてか、俺を見る俺を、大怪我してるだろうが!! ヤベーんだつて、ジャバは。今は何だか首を傾げているけど、すぐ正気に戻るから!!

「ん? ……フン、龍の彫刻とは、何とも深くないな、我らが主は」

いや、だからそれは……というか知らなかったのかテメエはっ!!

「全くだね、こんなモノを作る位ならヨロイを量産した方が得だ

るっ」

お願いだから気付け、それえ、正にそれが最終最大兵器なんですよ！？ シリアス台無しだよもうっ、お前らしい加減マジメにやってくれ！！

“ ジャバウオーック、丁度いいターゲットの追加です、始末なさい”

その声を聞き、傾げた首を元に戻すジャバ。そして再び、拳を振り上げ、今度は二人の側へと振り下ろす。

「アレ……何か彫刻が……？」

「ムッ、まさか……」

遅過ぎるわああ！！

直後、衝撃。だが、二人は……というか、足担当のディーは何とか避わしていた。よく、バランスを崩さないものだ。

「ちよつとオリオンブラック、何故左に避けたの？ 僕は右手しかないから、左に避わしてよ」

「すまんがレッド、タイミング的にはこちらしか……」

ブラック！？ レッド！？ ヒーロー戦隊かつ！！ なら俺は何だよ、ブルーとかか？

「うオオオ、イエローのカタキイイイ！！」

イエローだったあ！！　なんかイヤだよ、イメージ的にっ！！

だが、二人はただ、ふざけている訳ではないみたいだ。何とデイスは、叩きつけられた巨大なアームを足場として駆け上がり、一気に顔面近くにまで到達、そこからオリオンの拳がうなりをあげた。

しかしその行動は、ただ敵の能力を示すだけに終わった。オリオンの一撃が、龍の顔面を打ち付けた瞬間である……砕け散った……オリオンの側が、だ。

「なんだって!?!」

“無駄ですよアンドロイド、そんなものではジャバウォックに傷一つ付きません”

彼の拳は、これまでありとあらゆるモノを粉碎して来た。鉄の扉、地下基地の天井、ヨロイ達、更にはオルトロス。

それが全く通用していない……恐らく、このメンツ内でも最大の打撃力が効果無し、という事実。

更に悪かったのは、龍を怒らしてしまった事だ。これまでのものより、遥かに大きく、重い龍の咆哮。

地震かとも思える程、周囲の物品が共鳴し、さながらポルターガイストを引き起こす。

奴の怒りの一撃は、二人の左方からの飛来物……三本爪のアームによって放たれた。

「クッ、いかん」

デューが言う。だが、現状においては、回避など出来なかった。

瞬間は、まるで飛行機にでも衝突されたかの様であったと思う。ジャバにしてみれば、顔面近くを飛び回る八工を力任せに叩く程度の動作だった。

当然ながら、小虫にも等しく矮小な者にはオーバーキル甚だしく、肩車フォーメーションは容易く崩壊、デューは床を転がり、オリオンは壁に叩きつけられた。

まだまだ龍の逆鱗は止まらない、オリオンを更に壁へと押し込むアーム。

「グッ……ああっ……」

メキッ、メキッと破碎音が響く。少しずつだが、確実にオリオンの身体は圧力に屈していつている。

“ハハハ……終わりですね、アンドロイド。逃れる事など不可能です”

これだけでもマズイというのに、三本爪が稼動、内一本が頭を、二本がそれぞれ脇下に接触、閉塞を開始したのだ。

万力の要領で、オリオンへと更なる圧力を追加する。

「うああああああああああっ！ー！ー」

このままじゃ、オリオンが保たない、粉々にされてしまうー！
くそ、クソッ、動け、動くんた俺の身体、まだ剣があるんだ、それで何とか……。

だが、イーザはただか指一本動かすのがやっとだった。全身に鉛でも巻き付けられているかの様な、手足の重たさ……。

（無力だ……）

今、オリオンの胸部が、派手にへしゃげた。更なる悲鳴と破碎音。

（いつも俺は……こんななのか……こんなのか、どうして……仲間が危険にさらされている所で、無力なんだ……）

助けはもう、期待出来ない……カードを全て切ってしまったのだ。本当に本当の、絶体絶命なのか……。

「オリオンイエロー、希望を捨ててはならない」

ディー？ ……ダレがイエローかつ！！

「私がレッドを助ける。彼には、教えられたからな」

レッド……オリオンな。

「本心を偽り続けてはならないと……。彼は単純だ、だがどこまでも深く広がった。たったあれだけの時の中で、レッドは私の中に容易く住み着いてしまったのだよ」

（お前は何の為に生きていたっ、誰の為に生きていたっ！！ 自分を誤魔化すな、偽るな、仮面を被るな、己の思ふ事を、正しいと思ふ事をするんだっ、それが正義！！）

（正……義……？）

（そうさ……お前は今から、オリオンブラックだ。生まれ変われ、立ち上がれ、そして歩けっ、お前にはまだ成さなければならぬ事があるハズだ！！）

「フツ……イエロー、いや、イーザ……オリオンに伝えて欲しい、お前は何より深かったと」

なんだ、何を言っている……まるで……。不吉な予感がした、もしやの思いが頭を駆ける。

「ディー、おま……まさ……か……」

“ 自爆コードだよ、機能が停止した後にも、敵にダメージを与えられる様になっている ”

先程、ディーが自ら言っていた事だ。他に、有効と思われる手段もないし、ますます可能性が……。

「レッドオ、今行くぞー!!」

駆け出す漆黒、マントコートを翻し、加速。

「やめ……る……」

ジャバの赤眼がディーを捉えると同時、即座に空いたアームが振り下ろされた。回避。

アームは地についたまま横薙ぎに移動、床を、コンピューターを碎きながら迫る。

跳躍、回避。

今ので膝の、ショック吸収流体が吹き出す。途端に、ディーの姿勢が崩れた……が、彼はすぐさま立て直し、どんどん加速。

またも降下する、アーム。ギリギリで回避、で、やはり腕へと飛び移り、駆け昇る。あと少し、あと少しだ。

奴が暴れ出した。どうやらディーを振り落とす魂胆だ。しかし、それはとうに察知していたらしく、直後に跳躍、龍の顔目がけ、あと僅か……。

「来るなああ、ブラックー!!」

あれ？ なんだ、おかしい……背中が、変だ、ついでに腹に違和感が、内臓の機能が不自然……ディーが感じた感触。

理由は、貫かれていたからだ、背中から侵入し腹から飛び出す鋭

利なものに……それとは、何十倍にも伸びたジャバウォックの爪であった。

力が抜ける……手足が自然、だらりと垂れ下がる。

“デー、御苦労様でした、君の事は大変便利だと思っていましたよ”

```
 I exceed damage , an existing  
 set price (ダメージ、既定値を超過)
```

「ブラックウウウー!!」

「ハハ……わ、私は、大丈夫……うまく……いつている……」

```
 It blows up and encodes it an  
 d exercises it (自爆コード、発動します)
```

“ん……まさか、デーめ……ジャバウォック、そいつを今すぐ離すんだ!!”

「もう、遅いさ……アナタが、付けた……モノ、だ……」

ジャバウォックが爪を引っ込める間もなく、デーは光となった。

（なあ、ダムよ……私は……）

思い出す……あの日お前は、泣く間すら無かった事だろう……痛い痛いときえ叫べず、何があったのかにさえ気付かず、消えかかっていた。

（先生お願いです、どうか弟を助けてやって下さい！！）

あの男を頼ってしまった事が、間違いだったのかもしれない。だが、結果として私と弟は生き長らえた。ただし、ヒトとしてではなく。

（兄キ……）

（ダム、なのか……そこに、居るのか……？）

（兄キ……どこだよ、兄キ……）

（そうか……お前はいつも、私の傍に居たんだな）

（兄ちゃん……どこ……兄ちゃんが居ないと、ボクは……）

(私は……いや、俺はここだ、ダム……もう大丈夫、俺がそばに居る、だから……心配するな、兄ちゃんが居てあげるから)

(兄ちゃん、兄ちゃん……うん、もう大丈夫だから)

(そうか……なら、帰ろう、兄ちゃんがおいしいご飯作ってやるからな)

(うん、帰ろう)

「フン……深い、な……」

全てが白く、眩しく輝いた。その瞬間は恐らく、誰も状況を視認する事が出来なかっただろう。

吹き荒れる暴風、熱風、何かが焼き焦げた様な匂い。視覚、触覚、嗅覚が満たされた。

結局、デューまでもが……。

やがて、光が引く。少しずつではあるものの、視界が開けて来た。

イーザはそつと目を開く……まず、頭をもたげたのはディーの結果、オリオンの事、続いてリアリスと龍の事。

オリオンが叩きつけられていた辺りを、見てみる……すると、彼は万力から逃れ床に落下していた。

しかしピクリとも動いていない……まさか、頭部にダメージを負ってしまったせい!? だとしたらマズい、何とか、何とかしないと……。

しかし……そんな思いも、絶望に塗り潰される。ジャバウォックの姿も少しずつ見えて来たのだが……。

ディーの、命を賭けた一撃は、爪一本分の損傷でしかなかったのだ。彼を貫いていた爪だけを、へし折っただけのダメージしか……。

しかもだ、その爪でさえ少しずつ、再生しているではないか!!

あれを受けて、本体は全くの無傷……こんな奴、どうやって……。

リアリス。

どう……。

起動キー。

……。

重要部品。

最悪な考えが脳裏をよぎる。リアリスを……起動キーたる彼女を壊してしまえば、ジャバウォックは止まるのではないか、とかいう考えだ。

……バカな、落ち着け、出来る訳がないだろう!! それをしては意味がない、ここまで来た意味が!!

“……もう抵抗は終わりの様ですね。初期起動テストにしては簡単過ぎましたか……ではジャバウォック、最後のテストです。あの男に射ちなさい、主砲をね”

(主砲……だと……?)

低いわななき……猛獣、例えば虎にも似た、静かな咆哮。

両のアームを左右へと伸ばし、顎を上向きに。そして口元へと光が集まって行くのが見えた。

ドラゴンは、口からブレスや炎を吐くとされている場合が多々あるが、あれは紛れもない魔力の輝きであった。

“出力はマックスですよ……放ちなさい”

(止めてええ!!)

(えっ……?)

直後、放たれる魔力のプレス。強烈な輝きが一直線に、周囲の景色を破壊しながらイーザへと向かう。

光、光、光、光の奔流……輝きは自身の境界線すら消失させる。

もうラッキーも何もなく、ただ光はイーザの身体を捉え、分解して
てい

絶対的運命、百。彼の生還確率は間違いなくゼロであった……ヒトだけ、また機械だけの運命ならば。

しかしいずれでも無きそれは、運命すらねじ曲げた。

「アネイルシエント・セレナーデ」

プレスは、イーザの手間、僅かミリ単位の手間で真っ二つに割けた。彼に火傷の一つも与えられず、完璧に逸れたのだ。

続いてイーザの眼前にふわりと舞い降りる、黒色の羽根、その一枚ひとひら

“なっ……!?”

「全く……イーザよ、我が主よ、こんな所で何をしている」

主なるデヴィルよ、汝に栄光と賛美あれかし。そのかみ君臨せし、いと高きところにもありとも、敗れ夢をはぐくむ地獄の最下にもありとも、ああ、沈黙の力よ、わが魂をいつの日か、知識の樹の陰にて、汝の傍らに休ましめたまえ……。

「エリス……か……？」

悪魔は、舞い降りた。

第十九話 Re Alice 3

イーザが見えた、オリオンも見えた、眩しい光が差し込んだかと思つと、私は目を覚ました。

ああ、イーザ達はちゃんと助けに来てくれたんだね……素直に感激。

ごめんね、私が捕まっちゃったばかりにこんな事になって。でも、私はココに居るよイーザ、早く、早く一緒に帰ろう……。

“ではジャバウォック、最後のテストです。あの男に射ちなさい、主砲をね”

えっ!?! この声は……あの人の声だ、生きてたんだ。って、あれ?

と、直後にリアリスは気付いた。今見ている景色も、今感じている感触も、聴覚も嗅覚でさえ、自分で感じているけど自分のものではない事にだ。

今でも、私が猛獣の様にわなないたかと思つと、自然と両の手を広げてゆく感覚がする。

頭で考えている事と、身体の動作が全くの別物……まるで第三者に身体だけ操られている様だ。

そして遂に、私の口元に魔力が集中して行くのが分かった。……

重粒子エネルギー砲？ SOL・ブレスキャノン？ ターゲットの
確認に予想される効果範囲……？

私の頭の中で、拡大されるイーザの映像。そこで初めて気が付いた事だったが、彼はポロポロだった。いや、そんなものじゃない、
風前の灯状態だ。

若干薄汚れてたカッターシャツなんて、真っ赤に染まってしまっている。

やがて緑の十字線がイーザで交差し、今、赤色へと変化した。これ
れて……ターゲットサイト！？ だとしたら私は、イーザに攻撃
を！？

（リアリス、うつよ、ハカセのメイレイだもん）

（射つ？ 射つって何を……何をやる気なの！？）

しまいには自分の中から声がした。いや、自分の外からもだ。つまりは、脳内に直接、少年のものと思いき声が響いて来たという訳
である。

（ブレスをうつよ、あのオトコに）

あの男とは勿論、現在拡大されている存在だ。ブレスの内容は把握してしまっているから、これが直撃すれば対象は形も残らないだろう。

（ダメよっ、そんな事したらダメ！！）

(でもハカセのメイレイがダイジ、リアリスのはそうじゃない)

(ダメだったら!!)

(ダメじゃない)

(止めてええええー!!)

彼女の叫びむなく、光は一直線に目標へと放たれた。

優秀が故の、死亡確定を理解。どの可能性をパターンをおいても、イーザラント・ダスト・カナートウスの死は覆しようのない事実となっている。

死の光が彼へ到達するのに、三秒と必要ない。ほんの少し余裕のある一瞬の後の事だ。

(ニンム、カンリヨウしたよハカセ)

直撃。イーザは死亡……全てのデータはそう示した。自らの手でイーザを殺したという事実が、データとして流入。

そんなモノ、処理出来る訳がない、機械にあってはならない感情があるせいで……。

(あれ……おかしいね、オトコ、イキてる?)

(え!?)

確かに、レーダーには改めて表示されている。小さな小さな丸が

一つ。

生存している……イーザが、イーザが生きている……でもどうして……あれで生きていられるハズがないのに。

「全く……イーザよ、我が主よ、こんな所で何をしている」

（あれは！？）

イーザの頭上より、彼の前へと降り立つ少女の姿。やはりすぐに、頭の中に拡大されるその姿……。

青目青髪、キツそうな印象を受ける目付き顔付き、身に付けてるのはあれだ、お金持ちのお屋敷とかに居るメイ……メイ……お手伝いさんの格好だ。

だが、形こそヒトだがヒトではないと分かる。頭に二本の角、背には二枚の漆黒翼、手中には未知の反応が伺える槍……アンノウンである。

（ハカセ、ハカセ、ナンだかヨクワからないヤツがいるよ）

少年の声が、明らかかな動揺を示した。それはそうだろう、得体の知れない何かがどうやってか自身の必殺技を無力化した。自分の優位が揺るぎかかっているのだ。

というか、リアリスにとってはそんな事、どうでもよかった。あの女の形をした奴、イーザを主って呼んだよね……どういったご関

係で？

「エリ……ス……か、どうした、こんな所まで……？」

イーザは目の前の少女の姿を認め、言った。

「別に……屋敷でやる事もなくなったから散歩をしていたら、たまたまここに辿り着いただけだ」

「……ひでえ、ウソだな」

「ウソではない、たまたまだと言っている。……砂漠にオアシスがあれば休みたくなるだろう？ ……そこに似付かわしい建造物があれば、入ってみたくもなるものだ」

ああ言えばこう言う……あーあ、本当に……

「カワイイ奴め」

「なっ、ななっ!？」

イーザが発言した途端、エリスの顔が真っ赤に染まる。

「突然何を言っている!! かつ、カワイイなどと!!」

何だよ、その初々しくも分かりやすい反応は……ますますカワイ

イぞ、口には出さないけど。

エリスは、サキュバスのクセに褒められ慣れていないからな……。

“ジャバウォック、あれは悪魔です。ヒトの、私の敵であり、あなたが造られた理由でもある存在なのです、全力をもって破壊してしまいなさい！！”

(うん、ボクもアクマキライ)

悪魔……魔力を自由に操り、強大なパワーを持ち、空を当然の様に飛ぶ……ペテン、インチキにも程がある存在。

そんな連中が大軍で、ヒトに害を成し始めたらどうなる？ 人間に明日はないだろう。その為のジャバウォックであり、アドヴァンスト・ヒューマンであり、アンドロイドでありサイボーグ。

(ツっ、分かる……この子、怒ってる。何に……悪魔ってものに?)

(アクマ、タオす!!)

その直後、ジャバウォックに変化が生じる。これまではただの飾りであった翼を広げ、低い唸り声をあげる。

全てが金属で構成されている冷たい翼ながらも、生き物のものと見間違う出来栄えだ。

「あの巨体が……飛ぶのか……？」

あの翼の意味するところは、当然そういう結果だ。はったりや見栄えだけで、あんなモノを取り付けやしないだろう。

そしてすぐ、予想の通りジャバウォックは飛行、一気に間を飛びエリスへと迫る。

正に飛龍、ワイバーンだ。

だが、エリスは振り返えろうともしない……イーザとお喋りに興じているだけ、それが更にジャバの怒りを招いた。

あいつはこちらを見てはいない、相手にされていない、こちらはこんなにも……こんなにも嫌いだというのに！！

即座に二本爪付きの拳を、悪魔へ振り抜く。だが、その行為とはまるで、雲を掴む様なものだと思った。

空を切る拳。勢いそのまま通過してしまうジャバ、衝撃波で大気がつなる。

「フン……」

あの悪魔の音が響く。しかしそれは、一つではなかった。

「遅い」

「お前も、機械とかいうものか」

「勝てると思ったか」

「愚かだ」

（あれ、ハカセ！？ いろんなトコロからコエが？）

“大丈夫、まやかしです、お前にはレーダーがある、確実に相手を捉えられるハズだ”

（だめだよハカセ、いくつもハンノウがあるんだ！！）

事実そうだった。ジャバウオーック、そのレーダーには九つの反応が明滅する。紛れもなく実体が、質量あるものがそこに存在しているのだ。九体の悪魔が。

「スピア・テンペスト……」

これは、エリスの使用する技の一つである。しかし技というよりは分身、分身というよりは分裂と言った方がいいのかもしれない。

ありとあらゆる方向、距離から巨体眺めるエリス達。

彼女らは一斉に槍を突き出すと、四方八方より直線を描き一点にて交差する。交点、中心は勿論、機械龍だ。

（うわああああ！！）

決して外には漏れぬ悲鳴を、龍はあげる。翼の半分より先が切断、更には両腕、両脚、首が同時に吹き飛ばされ、一瞬で無数の残骸と化した龍は床へと落ちてゆく。

九のエリスは再び一つとなり、直上から落ちゆく龍へ向け、フィニッシュの一撃を続けざまに放つ。

「スピア・サイクロン」

自分自身を巨大な槍とし、突撃。これを喰らわせられれば間違いなく、龍の胴体も二分割となるろう。

（ウソだよねっ、こんなコトあっちゃダメなんだよねっ、ハカセ、ハカセ、どうしたらいいのオシえてよ！！）

“バカな……対悪魔用に造ったのに……あり得ない、何なのだよの力は……”

「待てっ、止めるエリスう！！ その機械の真ん中にはリアリスが居るんだあ！！」

様々な意味での絶体絶命が発生してしまっていた。八方塞がり、予測超過、惨状目前、あらゆる者達の中に暗黒は成長するが、しかし一人の少女は否定した。

それも、全力をもって真っ向からだ。

（うっ、らああああああ！！）

巨大な槍が龍を捉える直前、胴のみのスクラップ寸前が、急激に移動。背面のブースターをフルで吹かし、直撃を避けたのだ。

外装甲の一部分を削りとるに終わったエリスの一撃。刹那、失われたハズの三本爪付きアームが生えて来て、悪魔をまともに打撃し

た。再生能力だ。

これにはさすがの彼女も虚をつかれ、完璧近い形の攻撃ヒットが実現、弾き飛ばされ、凄まじい勢いで内壁へと衝突。

その間にもジャバウォックは両脚を再生させていた。よくよく見れば元通りではない、よりシャープに、よりしなやかに……女性の身体にも見える、一回り華奢なデザインへと変化していた。

(えっ……これはイッタイ?)

(私はまだ死ぬ訳にはいかないの!!)

“そうか……フ……フフ、ハハハハ、そうかりアリスか……やはり、お前は私の……”

(そうよ、あんな奴知らない、イーザとオリオン助けて脱出したきゃ!! ジャバウォック君、ちょっと身体借りるからね)

(う、うん……)

もう、リアリスは自らの身体も同然に龍を操っていた。再生したての、天使を思わせるやわらかな金属翼を展開し、地へ落下直前で浮上。

例の如く、脳内にて拡大されるイーザの姿。彼の元へと殺到し、アームを……。

しかしアームは、イーザをすんでの所で逃した。ぼとりと、床にアームが落下。関節より先が切断されている。

見上げれば、あの女悪魔。資格好は変化し、今や、胸部、腰部を覆っただけの黒い布つきれのみ。外見は、必要以上に悪魔であった。

「私に当てた事は褒めてやろう……だが、それだけだ」

（ええいつ邪魔しないでよっ、あんたとイーザがどういう関係かは知らないけどっ！！）

龍の顔が今、再生を完了した。その瞳には更に赤い……深紅の光が灯っていたのだ。

（私は死にたくないの、この子だってそう、だから……邪魔せず見てろよこの悪魔があああ！！）

「エンシエント・ブラスター！！」

（アストラル・スレイヤー！！）

エリスの手のひらから、ジャバウォックの両肩から、放たれる複数の熱線、ビーム。互いが互いの攻撃に衝突し合い、打ち消し合う。互角……完全に互角であった。

“あの様な兵装、ジャバウォックには搭載してはいない……しかしリアリスがコントロールを得る事によって、自己を最適な形状へと変化させた……予想外だが、計算外だが、これ以上ない位嬉しい誤算ではないか！！”

そう、進化すらしているのだ、リアリスが甦らせた龍は。

エリスはもう、その場には居ない、何の前触れもなく消失。エアロ・ブースト……風系統に当たる魔術の一種であり、その効果は、肉眼に捉えられぬ程の超高速移動を行い、瞬時に予想外の場所に出現する。主な使い道だ。

つまりは、龍の脚下へと出現するエリス。どうやら彼女は、狙いを胸部に張り付くりアリスへと絞った様だ。

それはある意味正しくもあった。彼女は起動キーであり、動作部品……つまりは車のキーに加えエンジンの役目を担っているに近からである。

だが、肉眼は誤魔化せても、レーダーは誤魔化せなかった。

(そこオ、ジャバウォック・ロケットペアアンチ!!)

「なっ!?!」

既にエリスへと拳が、飛来して来ていたのだ。

第二十話 Re Alice 4

巨大な金属の塊が、エリスを打つ。防壁では止められず、衝撃が腕から背中へと抜ける事なく身体ごと、その場から連れて行かれた。

凄まじき速度、凄まじきG、横向きの重力、ぺしゃんこになりそうだ。次いで、文字通りのぺしゃんこ、内壁に衝突し、少しずつ身体がめり込んでいった。

じわじわと、更に押し込まれてゆく。

たかだか……鉄の塊だろうがっ、そんな程度のモノが私をどうこう出来るハズはなかるうがあ！！

「私をヲをを、侮るんじゃない！！」

（今よっ、ロケットパンチごと、S O L・ブレスキャノン、ファイアアア！！）

龍は、彼女の意のままに、その口から光を放つ。自らの拳ごと、一直線に粉碎し、波動は次々と基地の内壁を貫き飛んで、エリスを地表へと叩き出した。もつとも、彼女は形すら残っていないかもしれないが。

“フフ……何という、何という力だ。いいですね、これならば圧倒出来るではありませんか！！”

アナウンスからの声にも、興奮が聞き取れる。確かに化物、恐るべき性能である。射出したハズのロケットパンチ、つまりは手首よ

り先は既に新作されてゆく。欠損のみならず、欠落までもをカバーする再生能力だけでも反則だというのに。

イーザらは、エリスの生死が不明となった今、巨龍への対抗手段は閉ざされてしまったに等しい。

自分自身はもう、生きているのかはたまた死んでいるのかすらも分からない。目の前にはただ暗黒であり、身体の感覚はほぼ失われている。虚脱状態とってもらっても差し支えない。

オリオンも、それは同じ様だった。しかし、つい先ほどから彼の指がピクピクと動き、手のひらが必死で身を起こそうとしている。意識は戻った様だ。

「ぐっ……ぐっ、僕はっ……」

今、喋ったな……なら、大丈夫だ、とイーザは思った。

しかし、その大丈夫ももうすぐ終わりだ、とも思っていた。あの暴虐の巨龍が、自分達を見逃す訳もないと……そう思っているからだ。

（イーザ……オリオン、脱出しようよ、邪魔者も居なくなっただし）

（リアリス、それはハカセのメイレイを……）

（いーのよ別に。今の私はイーザの方が大切だから）

（そんなモノなの？）

(そんなものなの)

(……それは、タダしい?)

(分かんない。けど、私は正しいと思ってるし、あの人に従う事は間違ってると思ったわよ。だって、将来の旦那様になるかもしれない人を攻撃しろだと言っちゃったんだもんね……だから、もう知らないの)

(ワかったよりアリス、キミにマかせたから)

(うん、ありがとジャバウォック君)

(ジャ、ジャバウォックン!?)

決して外に洩れる事無き、一人と一体の会話。龍はそこから低く長くわななくと、ゆっくり静粛に降り立ち、ズシンズシンと歩く。

一歩、また一歩と進む度、イーザの身体はガクガク揺れた。彼は、少しずつ視線を上げる。ほとんど真上を見上げている様な格好だ。

「よう……来た……か……化物」

(イーザ、今助けてあげる、もう大丈夫だから)

“いいですねジャバウォック、早くその男にトドメを刺しなさい”

バラバラ、行き違いとはこの事だ。言葉を交わせば、交わす事が可能であったなら、と。

死ぬ、助ける、殺せ、言葉一つで解決するのに。三本爪が、コンタクトレンズでも拾うかの様に、慎重に動作しイーザへと伸びてゆく。

この行動が何を意味しているのか……少なくとも、一人にはイーザを握り潰してしまおうとしている、と映ったのだ。

「止めるオオオオ!!」

と、リアリスの左手甲、ひいてはジャバウォックの手の甲に、何かがぶつかった。それも何度も。

「イーザを殺させはしないいいいい!!」

オリオンだった……彼が、ジャバウォックの手を幾度も幾度も殴りつけているのだ。自らの拳が碎けるのもいとわずに。

(オリオン!? ちょっと待って、私はイーザを助けよう……)

「やらせるものかつ、イーザをやらせるものか!! 彼は確かに弱いさ、それにバカで口だけが頼りの、どうしようもない女たらしかもしれないさ!!」

「オイッ……コラ……」

「僕が傍にいないればきつと、この二、三日で十回は死んでる様な、どうしようもない男だったさ!!」

「だから、コラ……」

「だけど、そんな彼でも僕の友人だっ！！ 僕と共に戦って来た戦友なんだっ！！ そんな彼を見捨ててオネンネなんてさ、どこが正義だあああ！！」

遂に、彼のもう片手が砕ける。実質、両の手を失ってしまったのだ。だが、それでもオリオンは止まらない。まだ脚があるといわんばかりに、蹴りを繰り返す。スパークが回って、機能停止寸前なのだ。

傷の一つもつかない。オリオンの側ばかりが傷付いてゆく。

(止めてよオリオン、大丈夫だって、私が二人共助けてあげるから)

「ブラックも自らの命を賭してキサマと戦って、散っていったんだよっ！！ 何の為に……何の為に僕は、アイツやボクは強化されたんだよお、弱い者を、戦えない人達を守り助ける為だろうがアア！！」

このままでは、オリオンは修復不能なレベルの損傷を負ってしまった……それに、これ以上砕けゆく彼を見ていられなかった。

(ごめんオリオン、おとなしくしてね)

瞬間、オリオンへと対象を。伸ばした手が動作し、彼を手中へと捕えた。三本の爪が今度は適度な圧力で閉じてゆき、彼の身体がぐつちりと固定してしまったのだ。

「くそっ、クソクソくそオオ、はなせっ、はなせええ、ボクは負

ける訳にはいかないんだ、友や僕を信じてくれている人達に応えなきゃならないんだああ!!」

よし、オリオン確保。次はイーザだ。もう片方の手を伸ばして……っと。一方のイーザに、抵抗はなかった。というか、恐らくは抵抗する気力すらもうないのであるう。アームや爪の動作にも、実に素直に従った。

オリオンが尚も叫び、抵抗の意を示していた。さて、あとは脱出だ。あの人の意志に逆らう事になるけど、イーザ達の方が先決なのよね。

“ん？ ジャバウォック、どうしたのです、早くトドメを……”

もうアナウンスにも従わない、早くしないと手遅れになるから。このまま、天井の方に頭を向ける。多分、張り付いている私の肉体も、同じ様に動いているんだろうなと想像。

(S O L・ブレスキャノン、チャージ……)

三度、口元に集束する魔力の粒子。そして、発射の合図と共に、一筋の光となって上昇。内壁を容易く破壊しながら進み続け、やがてバラバラと水が降って来た。

外の天気は依然、雨の様であったが、ジャバウォックの視点からは月が見える。エネルギーキャノンが雨雲の一部を消し飛ばした為であるう。

“ジャバウォック？ 一体何を……”

(ごめんなさい、先生……ナデアフ先生、イーザとオリオンの事を考えたら私、ここに居られませんか。それに、愛に生きるんです私!! 今まで本当にありがとうございました、私は恨んでませんから)

相手に届く事のない返事をしてから、金属の翼を広げる。女性的なフォルムを持ったせいかな、この時ばかりは龍というより雛を守る親鳥にも見えた。

“ジャバウォック、いやリアリス、まさかアナタ達は!?”

アナウンスの声を掻き消す様に背面のブースターがフレアを発し、その巨体を少しずつ押し上げ、次いで出力を高める度、上昇速度を増してゆく。

地表までは、百メートルといった所か……こんなにも深く潜っていたんだとは思っていた。

しかし、このジャバウォックの目的は何だろう、とも思った。アナウンスの言い振りからすれば、予定外の行動をしているっぽい……。なんと言うのか、明らかかな殺意……。まあ、機械に殺意とかいうのも変だが、起動してすぐの時点では、攻撃に一切の容赦がなかった。

だけど、形状が変わってから、中身も変わったかのような気がするのだ。

「……リアリスか？ 今の……お前は、リアリス……なのかな？」

イーザが、龍の眼を見て言った。

「もしかしたら……リアリス、お前が……？」

（そうよイーザ、助かってよかった……待ってて、今お医者さんの所に連れて行ってあげるから）

「……そんな事、分からねえ、か……」

（……どうして、聞こえないんだろうね）

「どうして……届かないんだろうな」

（届いてるよ、私が言えないだけ。今でも聞こえているのよ）

「……だけど、リアリス、もしも……俺の声が届いているのなら……俺の目を見てくれないか……」

イーザは、一縷の望みを託し、機械龍の顔を見上げる。だが、龍の顔は常に進行方向を見据えたままであり、地上に出て移動を開始した時もそれは変わらなかった。

しかし、なかば諦めかけて龍から目を外そうとした、その時だった……龍が、手中のイーザをじっと見下ろしたのだ。

深紅に灯っていた瞳の光が、見る見る内に緑色へと変化してゆく。これは警戒色、戦闘色を解除したという事なのだろうか……それに、いずれにしても龍は確かにこちらを向いた。

「リアリス……お前が、コイツを？」

龍は、首を一度だけ、しかし大きく縦に振った。そうか、お前はリアリスなんだな、と。

「俺の声、届いてたんだな……」

(うん……)

ならば……さっきの顔きから判断し、リアリスがジャバウォックのコントロールを得ているらしい。だとしたら……どうにかしなければならぬのは、あっちの方だ。

と、イーザがそう考えてた直後、リアリスの脳内、ジャバウォックのレーダーに巨大な反応が一つ、映り込む。

中央に小さく黒い反応、その周囲をぐるりと囲むオレンジ色の巨大な反応……ドーナツみたいだった。

それは、飛行状態のジャバウォックにぐんぐんと接近して来ていた。ジャバの三倍近くはスピードがでている。

こんな真似が出来るのは、アイツしかない。そう、あの悪魔しか。

「その機械……成程、お前の力は理解した。いやいや、手加減をして実に悪かったと思っている。もう、仕方あるまい、私のプライドと誇りに傷が入ってしまったわぬ内に、お前を壊してやろう。光栄に思う事だ、私をここまで怒らせたのは、お前で二人目なのだからなあ」

飛行状態で、大気を裂く音いっぱい現状においても、彼女の声ははつきりと耳に入り込んで来た。

「ヤベえ……エリスのヤツ、相当……頭に血を昇らせてやがる……」

こうなったらアイツは……とイーザが呟いている間にも、オレンジ色の反応がどんどん肥大化してゆく。魔力の増大を意味していたのだ。

(リアリス、アブない!!)

(!?)

と、瞬間、ジャバウォックが大きく左方へ旋回する。空と大地が傾いていた。

手の中より、イーザとオリオンは目にする。ジャバウォックの右方向を、一条の光が通過してゆくのをだ。もう、正体は分かっている、エリスの砲撃であった。

即座にジャバは、両肩に追加された兵装を一斉発射。一度前方へ向け放たれた複数の熱線が、方向を百八十度転換し、後方へ殺到。

レーダーに十八のラインが走り、それは一点へ、ドーナツの中心へと伸びてゆく。やがて十八は、三のグループにまとまって黒点へと迫ったが、突如としてラインが掻き消えた。無力化されたのだから、ターゲットは健在、スピードはますます増している。

「効かんよ、そんなものはなあ……アークボルト・レイ」

今度は右へと下降しつつ回避……したつもりが、左翼に被弾、先端部が欠落。すぐに再生でカバー出来るレベルではあった。

相対距離が縮まりつつある現状、攻撃の反応を見てからの回避は次第に難しくなり、こちらの図体は大き過ぎた。しかも……

（どーゆーつもりなのよあの女あ！！ イーザがここに居るってのにー！！）

信じられなかった。二人は、イーザとあの女は親しげに話していたのを、リアリスは見ている。主と呼んでいたのも知っている。それなのに、奴は射ってくる。どんな神経をしているのだ。

（……あれがアクマだよ、ボクはハカセにナラったんだ、アクマってヤツはニンゲンのコト、イシコロぐらいにしかオモっていないって）

ジャバウォックの言う事は鵜呑みには出来ない、皆が皆、そういう訳ではないと思うのだが……人間にも、そういう奴は居る。

だから、一部の悪魔にもそんな奴は居るのだろう。少なくとも、あの女悪魔はそうではないだろうか。

こう考えている間にも、敵の魔術は数を増し、小規模ながら被弾、損傷をしていた。瞬時に再生出来るものから、二、三秒タイムロスのあるものまで。

イーザ、そしてオリオンを抱き抱える様にして飛行しているから

……全力ではない。存在を庇いながらの戦いとは、何と大変な事か。さらに加えると、二人は重体であるから、高速飛行は到底出来ない。だというのに……アイツは……

「逃がしはしない、確実に葬ってくれる」

そうかい!! ……悪魔ねえ、文字通りじゃない!!

「トドメだ、二度と再生などさせん……スピアア・テンペストオオ!!」

「止めるオ、エリス止めるんだ!!」

イーザの言葉は大気の唸りに吸い込まれ、届く事はない。そして、九つの反応を見せる悪魔。

リアリスやジャバウォックには分かっている……あれは、危険極まらない技だ。何せ、自分を胴体だけにしたのだから。

槍を一齐に構える、九つのエリス。四方八方からの突撃攻撃、あれを完璧に防ぐ手立ではないだろうし、無茶をすればあるいはブロツク可能かもしれないが、イーザやオリオンがいる。繰り返す様だが、彼らは重体の身なのだ、それを考えたら無理は出来なかった。

(ジャバウォツ君、ゴメン、今から出来る限りの事をやるから、キツいよ?)

(リアリス、キミがナニをしようとしているのかはワカったよ。ボクたちはツナがってるものね。でも、カレらはタスかるかもしれない)

ないけど、ボクやキミはアブない。タニンをタすけるコトってそんなにダイジなコトなのかい？)

(うん、大事。でもね、私達は助かるし、彼らも助かる、皆で助からなくちゃ意味はないよ)

イーザやオリオンは助かって、私がダメだったら何の意味もない。

私は、まだまだ……外を見たい、彼と一緒に外の世界へ行きたい。

イーザの、お嫁さんになって……ホワイトタイガーに乗ったプリンス様のお嫁さんになって、立派にお城に住んで、幸せに……。

ああ、ちょっと待っててねイーザ、私は戻るから、絶対に戻るから、そうしたら私を……。

(ジャバウォック、ツインロケットペアアンチ！！)

イーザを、オリオンを掴んだままの拳は、ジャバウォックを離れ、飛行した。イーザは、遠ざかりつつある巨龍を見、力の限り彼女の名を叫んだ。

「リアリスウウウウウー！！」

だが、今度は届かなかった、届く事はなかった。夜間に掻き消えてゆくばかりだ。

(じゃあ、パンチのコントロールは任せたよ、ジャバウォック君！

！)

(うん、リアリス)

「さらばだ、機械めが」

両肩の熱線、口のエネルギーキャノン、展開、そして……。

(ジャバウォック、ミサイイル！！)

脚が、腰周りから、胸部上から……ありとあらゆる箇所の外装甲が細かくスライドし開き、ミサイイル……っばい楕円形の金属塊が顔を覗かせた。

全身を再生させた際、ただの金属片を再構成し無理矢理作ったもので、火薬も入っていないければ推進装置もない。だからロケットみたいに飛びもしない。だけど、高速度で射出すればそれなりの武器になるハズ。

「またしてもその様なコケ脅しか、下らん、実に下らんな！！」

(ジャバウォック、全兵装、全弾発射あ！！)

熱線が、ブレスがミサイイルもどきが、周囲に展開するエリスらへと放たれた。

今、ブレスによって正面の二体が消滅、熱線とミサイイルが上方の三体を、さらには足元の一体を撃破。しかし、三体が残っている。

今、またミサイイルで一体が消滅した。

「くっ、コケ脅しではなかったらしいな、だがっ!!」

破壊、正面から、そして上方、熱線がこちらに。さらには龍はブレスの第二射を用意している。

だが、それはもう遅い、私ならば光を放たれる前に奴を倒せる。

ミサイルが、腕をかすめる。傷付いた肌から僅かに体液がにじみ出た。だが、構わずに突進する。勢いを殺したくはない。

分かっているぞ、この機械は胸に張り付いている女さえ消してしまえば、終わりなのだろう？ わざわざ弱点を剥き出しにする、愚かな奴だ。

「スピア・サイクロン!!」

(くっ、狙いは私の本体かっ!!)

弾幕を突き破り迫る、巨大な槍と化した悪魔。それは確実にリアリスを狙っていた。

(くっそ、止まれ、止まれえ!!)

(リアリス、ダメだ二げて!!)

(えっ!?)

と、瞬間、身体感覚が消滅した。そして一瞬の後には、リアリスの本体は意識を伴い、宙を舞っていた。

第二十一話 初めての……

（ボクにはワかったんだ、どうしてリアリスが、あのオトコたちをタスけようとしていたのかが）

（マジリアったボクのオモいとリアリスのオモい……だからワかった、キミはホントウにスキなんだ、あのオトコが、アイしてるんだ、あのオトコを）

（だからキミは、ハカセのメイレイをキョヒしたんだね、トウゼンだよ……こんなアタタかくてステキでフシギな……）

（なら、キミがネラわれているんだ、キミはいつてあげないといけないんだよ、あのオトコのトコロへ。）

（ボクはコワれたくはないけれど、キミとイッショにコワれるのはもつとイヤだと、そうおもったんだ。）

（どうしてなのかはワからないけど……タブン、ボクもオトコだから、リアリスをマモりたいとオモえたのかもね）

（……マイったなあ、ホントウ、キミのシコウとマジわったエイキョウなのかなあ、でも、ジブンでキめるってスゴく、キモちいんだね）

リアリスの小さな身体を固定していた装甲が、パージされる。つまりは、彼女がジャバウォックより排出されたのだ。

直後にはもう、リアリスは意識を取り戻せている。

「ジャバウオツ君、どうして私を!？」

もうリアリスには、彼の内の声は聞こえていなかった。代わりに耳に入るのは、どこか悲しげなわななきだけであった。

(このアクマは止められない、リアリス、どうかあのオトコにまた……)

「ジャバウオツ君、避けてええええ!!」

彼女の言葉は虚空に吸い込まれるばかり。ジャバウオツクは月をバツクに飛んでいたが……その眼の光は少しずつ、少しずつ薄れてゆき、あれほど、血の様に赤かった眼も今や限りなく透明だった。

(キノウが……やっぱり、リアリスがいないと……ダメみたいだ……ね……)

「碎ける機械イ!!」

二体、分身体と本体のエリスは、ジャバウオツクへと突撃した。装甲が、あの堅牢に思われた装甲がいとも簡単にくりぬかれ、そして一瞬の後にはエリスが、逆の方向へと突き抜けた。

ジャバウオツクの胸部から、空の月が見えた。

「ジャバウオツくうううん!!」

リアリスは、砂の山へと落下した。

「うっ……」

イーザは目を開いた。つい先程まで自分は叫んでいたというのに、砂へと落下、叩きつけられた衝撃で、どうやら気を失っていたらしい。

「リアリス……そうだ、リアリスを……」

落下時の衝撃のせいか、緩んだ三本の爪をどうにか抜け出し、彼はゆっくりと立ち上がった。

が、途端、基礎を失い膝をつく。もう、身体は限界らしい、立つ事さえ叶わなかったのだ。

(うっ……くっ、そ……ヤワな足だ……)

と、その時、月に何かが映る。羽を広げた巨大な何か……あれはジャバウォックで間違いない。しかし、空中で何だか静止しているなど思ったら、だんだん落下しているではないか。

まさか……と、イーザの脳裏を最悪のシナリオがよぎった。

「ぐっ……うオアああアア、うごけ、動くんだよ俺エエー！」

足が、鉄の棒みたいだった。視界には、ブラックアウトが頻発し

た。呼吸もやっとなつた、だけど手で、必死に身体を引っ張つた。

砂……地面が砂だから、ほとんど進めてはいないけど、ほんの数センチずつだけど、だけど……。

「何で……もっと動けよっ、もっと気合い入れろよ、もっと行けよストウ タケシ！！ お前は男だろ馬鹿野郎、エリスが……人殺しになつてもいいのかあ、リアリスが死んじまつてもいいのかよオ、動け、動けよクソツタレがあ！！」

自らに鞭打ち、声を張り上げ肉体をどうにか活性化させようと目論むが、現実是不変ならない。数十センチの前進が精一杯だった。

だが、その時イーザは見つけてしまう。もう一つの拳の形跡を。そうだ、あつちにはオリオンが居た、と。

「オリオン、そこに居るのかあ！？」

「イー……ザ……見つかっちゃった……か……」

ふと、暗闇からの声に、動きを止めた。姿こそは見えないが、オリオンの声であるのは間違いない。

「イーザ……どうしたんだい……そんなに叫んで……自分の、無力さに……苛まれているの……かい……？」

「オリオン……無事だったか！！」

「いいや……僕はもう、ダメかもしれない、のさ……」

「なっ!?!」

「……人工、心肺に、深刻なダメージを……負ったみたい……さ……」

「おっ、オイッ、なら……」

「ああ、ムダだよ……もう、一步も動けない……キミも、僕を連れて行く事は……出来ない、よね……」

「バカ言っなっ、どこだ、今行ってやるから!?!」

「バカを……言ってるのは、君さ……何もかも……救えると……思っているのかい……弱い、クセにさ……」

「お前……バカヤロウ、俺達は戦友だ、見捨てる事はできない、お前が言った事だろうが!! 俺も同じだ、友人を見捨てられるものか!?!」

「だからっ……あとどれくらい保つかも分からない僕を助けるよりも、助けてあげるべき人が居るだろう!?! 彼女が救えなかったら皆の行動が無意味なものになってしまう、敵にも味方にも、彼女の為に死んでいった連中が居るのさ……だから……止まってんじやねえ!?!」

「命に価値なんてねえんだよ、アイツにも俺にもお前にも!?!」

「正義を……愛するのは、いい事だけど……犠牲、を得ない正義は、ない……何かを失って、正義を成す……僕が、歩いて来た、道さ……君の言っているのは……キレイごとさ……ただの……」

「オリオン……」

「君の……正義は……僕という悪を……乗り越えて行く……事さ
……早く、早く行くんだよ……くやしければ……足手まといは、
捨てて……行け……」

もう、声はしなかった。物音一つしない、暗黒、静寂。

「クッ……」

彼には、進むという選択肢しか残らなかった。

「クソオオオオ、オリオン待つてる、絶対に待つてるよ、俺は、
俺はああああ……」

砂をギリギリと驚掴みし、身体を引つ張る。何度も何度も、持てる力を全て使い、確実に進む。

（そうだ……ダムやディーモリアリスの為に死んでいった様なものなんだ……ここまで来てバッドエンドなんざ……許されねえんだよ……！）

そして……すぐに彼は目の当たりにした。砂の山に紛れる異物が、月光によって照らされている。

もう、見る影もないが、ジャバウォックだった。本気で、パーツ片に解体されていて、バラバラになっていたのだ。

（胸部に張り付いていたりアリスはどうなった……？）

まさかもう、解体されて……いや、ダメだ、馬鹿な事を考えるな、きつと無事だ。

「リアリスウウ、どこだリアリスウウ!!」

返事はない。だが、まだこの目で彼女を見た訳じゃない、大丈夫、きつと大丈夫だ。

「よくやったと……褒めてやるべきか」

この声……エリス、エリス・ブラッドだ。こういう言い方をしているという事は……リアリスがまだ生きてて、トドメを刺そうとしている、といった所か？

痛む、鈍く鋭く痛み続ける身体を、全力で引き摺りながら声の方
向へ。

「だが、それもここまでの様だ」

まずい……このままでは。今、砂丘のかけからエリスのものらしい頭が見えた。あと少し、あと少しなんだ、動けっ、動くんだ!!

「せめてお前の呼称を聞いてやろう、何という名だ」

ようやく二人の姿が見えてくる。月光に映るのは、黒翼の悪魔、そして倒れ伏すリアリス。

リアリスの背には、槍が突き付けられていた。

「止めるエリスっ、エリス・ブラッド!! その槍を下ろせ!!」

彼女は、イーザの声に気付き、こちらを向いた。しかし、その薄笑いを含んだ表情は、我を失い血が昇っているという状態を示していた。

「聞けんなあ、いくらお前の言い分だとしても、だ。忘れていなか、私は魔族なのだ」

くっそ、イカン、マジで殺る気だエリスは。最早俺の言葉なんて届きはしないのか……どうする、どうすれば……。

「フ……フン、エリスってのね、アンタ」

と、突然、リアリスが言葉を吐いた。

「……まあ、そつだ。それが何だ？」

「強いよね、アンタ。強過ぎるよね。そんな力を振り回して、目に入るもの全部を傷付け壊して、満足？」

「……それはひがみか？ 力無き者の」

「そう思ってもらっても結構よ。で、アンタは守った事はある訳？」

「何？」

「アンタは、その力で何かを、誰かを守った事はあるのかって聞いてんの」

リアリスの突然の発言に、エリスは表情を微かに歪ませた。

「壊すばかり奪うばかり……誰にも好かれてないんじゃない？」

「それは侮辱か、ただか人間の分際で」

「そんな奴つてさ、結局誰かに守られているって事にも気付けないのよね、ああ、誰にも守られちゃあいないのか!!」

「もういい、喋るな」

それは、槍持つ手に力を込めよと、脳が指令を出す直前の出来事だった。

「止めるつつつてんだろオオ!!」

彼は、やってくれた。

ホワイトタイガーに乗ったプリンス様は。

彼はエリスへと、最後の力を振り絞り、飛び掛かっていた。リアリスが、ほんの少し時を稼いだお陰でもあった。

そのほんの僅かが重なって、今、実をむすび結果をもたらした。

「何っ!?!」

予定外の方向、予定外の力に……無敵とさえ思われた悪魔はあっさり、砂の山に倒れ込む。槍の先端はリアリスを僅かに逸れた。

イーザはまだ動きを止めていない、エリスに覆い被さる状態から、更に……

「じゃ、邪魔するなイーぶっ、ん、んぶううう!!?!?!?!」

「わお……」

リアリスも思わず、一言。イーザの行った行為、それはくちづけ、それはちゅー、それはキス……いやディープなキス、ベロちゅーだ、あれ。

「んっ、んもっ、もあっ、んぶぶぶぶっ!!」

まだまだ吸い付いているらしい。なんだかヘッドロックでも決めているかの様な、ロマンの欠片もない、荒々しいデビルキッスといった光景だった。

「んーんーんっ、んんんっ、んんっぶいい加減にしろオオオオ!!」

強引にイーザを引き剥がすエリス。彼女の顔はもう、マグマの様に赤く熱を帯びていた。

「何て事をする愚か者オ、わっ、私は初めてだったんだぞこの様

な行為はっ、これをよりにもよってコイツの面前でっ、バカ、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿者オオオオ!!」

正直、さっきまで悪役全開だった彼女の、この狼狽え様といったら……リアリスは思わずプツ、と吹いてしまったのだ。

「いや……こうでもしないと……」

「イーザラント・D・カナートウス……貴様ア、私の手で始末して欲しい様だな!!」

「っ……エリス、怒った顔も……なかなか……だぞ……」

「なっ!? どこまで私をからかうかあ!!」

彼女は口ではああ言っているが、まんざらでもなさそうだった。

そうか、この悪魔もイーザの事が……と、そっと思う。それにしても、エリスは別人の様になったね。

「……もういい、興が削がれた、私は帰るぞ!？」

「出来れば……そうしてくれ、今は……やっこしいだけだから……いや、待て、しばらくおとなしくしててくれ……そうしたら……ここに居ても……いいぞ」

「チツ……」

あ、おとなしくなった。本人はこの場に残りたいみたいだね。

「と、リアリス……無事か？」

イーザが、リアリスの元まで来て、言った。彼女は笑顔に違いなかったが、どこか憔悴した様でもあった。

「ううん、ちょっと頑張り過ぎちゃったよ……エネルギー、ほとんどジャバウオツ君にあげちゃった」

「そっか、まあ、もう大丈夫だ……エリスに運ばせるから、一緒に帰ろう……」

「そだね……でもさ、その前に……さっき、エリスにやった事と同じ事、私にも、やって……」

「えっ……今か？」

「ね、お願い……今、じゃないとダメ……」

何故、そんな言い方を？

薄ら寒い風が背中を吹き抜けた様な気がした。

「今じゃ、ないと……」

その言葉の裏に、イーザはふと、最悪のシナリオの影を見てしまっていた。

第二十二話 ヒカリ

「……イーザ、行ったか……」

オリオンは、彼の音が聞こえなくなったと同時に呟いた。

今現在、彼の身体はがっちり、三本の爪によって固定されており、足、そして頭を僅かに動かせるだけであった。

（ああでも言わなきゃ、大切なものを見失う……優先順位が狂ってしまうんだ、彼は）

正義とは……誰もかれも助けるものではない、とオリオンは知っている。誰かを助ければ、誰かが困るという事を知っているのだ。

だから、常に物事の優先順位ん考えて来た……と、自分は思っている。イーザやリアリスと出会ってからは、自信はないが。

「まあ……どのみち、身動きとれない僕は、待つしかない、か……」

オリオンは静かに、目を閉じた。夜風を楽しむ位しか、退屈のぎはなかったのだ。

「イーザ……お願い、私にも……」

リアリスは、消え入りそうな声でそう言った。

何故だろう、彼女の顔にはどんとどんと、影が刻まれつつある様な気がしてならなかった。

さっきまでエリスに対し、敢然と立ち向かっていた人物とは別人の様だ。

「リアリス、お前まさか!？」

イーザの脳裏には、ろくでもない未来予想図が再生されつつあった。

それに、リアリスの言葉……あれではまるで、消えてしまう直前のセリフではないか、と。このままでは、取り返しのつかない事になる、と、そう思えた。

「くっ……いかん、エリス、今すぐリアリスと俺……あとオリオンを街まで……」

しかし、イーザの言葉を遮らせたのは、リアリスの手だった。彼女の手が、イーザのズボンをしつかりと握ったのだ。

「ね、お願い……そうしてくれたら、一緒に、行くから……」

「今じゃなくちゃいけないのか!? どうしても今じゃないと!」

リアリスは、返事の代わりに、こくりと頷いた。

「……リアリス、大丈夫なんだな？ これくらいで、満足するなよ、この程度で……」

「うん……」

イーザは目を閉じ、まるでファースト並の緊張感と強い圧迫感、矛盾を抱えながらもゆっくりと、彼女の唇を指摘した。

だが、どうしてリアリスがこんな事を言い出したのか？ 死期を悟ったのではないのか？

だとしたらやはり、早く運んでやった方がいいのではないのか？ どうして、彼女に言われるがままの事をしようとしているのか？ これではまるで、別れの挨拶ではないのか？

（俺は……どうしたらいいのか？）

考えがまとまらぬまま、今度は閉じた目を再び開ける事にした。リアリスの様子を、やはり、しかと見ておかなければと思えたからだ。

「ん……っ……」

しかし、しかしだった。彼の視界一杯に広がったのは、タコが如く唇を突き出し、キスをねだるリアリスの顔であった。

「……………」

「んー？」

考え過ぎだったと、思い込めた。俺の馬鹿野郎……もう、いい。

「リアリス……」

「ん？」

「さっさと帰るぞ」

「えっ！？」

「えっ、じゃねえ。オリオンだってヤベえんだ、さっさと帰るぞ」

「……そっか……」

イーザは、私からさっさと離れ、エリスに向かい何かを言っていた。

多分、皆を連れて帰れだとか何だとか、だろうね。ああ……結局彼は、私を選ばなかった……とか、そう思えちゃう。どうしても。

「ほら、リアリス、立てるか？ さっさと行くぞ」

どうして、私にはしてくれなかったんだろうね……最後に、気張っっちゃったからだろうか。

青白い、死人みたいな顔してたら、イーザはちゅーどころじゃなかっただろうし、等と頭を働かせたけど……計算が外れたよ。

こういう時は死にそんな顔でよかったんだね。また一つ、学んだ

気がする。

………どうしたのか、イーザの言葉が耳に入って来なかった。口は動いているんだから、何かを喋ってはいるんだよね。

ジャバウオツ君と無茶し過ぎたからなあ、何せ生命エネルギーで動いている様なマシンだもの。だから、彼に人格が必要だったんだよね。

(……………！！)

ん？ なあに、イーザ。

彼は、私がマズそうだって気付いていたけど、騙されちゃったんだよね。

ああ、チクショー、もっと血の気引いた顔してればよかったって、少し後悔。

いや、待てよ、このまま真っ暗くなったら、一回くらいはしてくれるんじゃないかな？ ……ダメだよ、感触が残らないじゃない、あーあ、本当、バカな事したなあ。

「リアリス、おいつ、もう演技は通用しねえぞ、早く来るんだ！」

「イーザ、恐らくその女は既に……………」

「さあ、立てよっ、行くぞ、よくなったらココを出るんだろ？」

なんか、俺のヨメになるだとか世迷い事ぬかしてたけどよ……」

「もう止める、我が主よ」

「何であんな反応したんだよ、もっとこう……深刻な感じとか、辛そうな感じを出してくれたら俺も、もっと別の事、考えたりしたい……」

「イーザラント・D・カナートウス!!」

「まだ、手はあるハズだろうがっ、どうやってか、リアリスを助ける方法が……まだ、身体だってこんなに暖かいんだ、どうにかなる、まだっ……」

(リアリス……ボクの、ところに……)

(ジャバウオツ君?)

残骸。無惨に破壊された龍、その立ち姿。胸の穴が、彼女の居場所。

(ハヤク、キミはまだ……)

胸の穴が、彼女のゆりかご。

(さあ、ハヤク)

「イ……ザ……」

リアリスはその時、口を僅かに開いた。確かに、喋った。

「リアリス！！ ほらっ、まだリアリスは大丈夫だ、待ってるす
ぐに……」

「ううん、私は……あの子の所へ……」

「あの子……？」

「そう、ジャバウオツ君の所へ」

二人は、出会った。

「リアリス、何を言って……？」

二人は再び一つになる、私とアナタ……。

（リアリス、ごめん、やっぱりボクはひとりじゃダメみたいだ）

（大丈夫、だから）

二人は触れ合う、片や手、片や残骸。途端、一人と一体は静かに、
光に包まれる。

その光は彼を彼女を、彼を彼の身体を彼女を彼でさえ巻き込み、
広がっていった。

皆自由になれるよ、皆助かるよ、皆幸せだ、その方がいいよね。
私は願う。

(リアリス……ボクは……)

(君が、ジャバウォツ君?)

光の中、辺りのものは影ですら見えなくなる程の光の中、自分がどこに立ち、またどこを見ているのかさえ分からぬ位の光の中、そこに確かに存在する少年に対し、リアリスは言った。

少年は、リアリスに似た格好をしていた。ボロボロのノーズリーブタンクトップ、下半身は天然ダメージジーンズという出で立ち……褐色の肌、という点まで似通っていたのだ。

目は大きく、澄み切った空のようなスカイブルーをしている。ボサボサに伸びた髪の毛が、肩近くに到達しかけていた。

一見、まだ十代も前半かという幼い顔立ちであり、身長もリアリスのあと位までしかなかった。

(キミがモドってくれたコトで、マワリのミンナにもトドくよ)

(そう、なんだ。でもこの光は?)

私は一瞬、多分意識を失っていた。多分、というのは、気付いた時、光の空にあって、皆を見下ろしていたからだ。

空を飛んでいる様な心地であつたし、はたまた光の中を泳いでいる様でもあつた。いや、事実飛んでいた。

もう、下を見れば青く輝く星が見えた。どんどんと遠ざかる、小さくなる。

それでも、星の中での大切な人達の姿が、私にはハッキリと見えた。見えるハズもない距離だというのに、表情までもが惑星そのものの模様が如く目に映る。

あの星は、暗黒の中にあつても美しく、生命の光を放っていたのだ。

(ヒカリは、ミンナを……)

(自由に、する……)

彼も、彼女ももう、光そのものであつた。どこまでも行ける、どこまでも届ける、どこまでも、そう、どこまでもだ。

ヒトは形を失つても、ヒトそのものが消え失せる訳ではない……なんて、バカらしい。形がなけりゃ、何も出来ないじゃん。

全ての形が仮のものに過ぎないって？ 何言ってるんのよ、だってらこの私の身体は何だつてのよ。

イーザやオリオンや、ジャバウオツ君、ナデアフ先生にダムやデイー、エリスとかいう奴だつて、何だつてのよ!?

私は、砂でもすくうかのように、両の手で光の粒子をすくおうとしてみたけど……そんな事、出来る訳がないじゃん。

例えば、私はイーザと言葉が交せなかった時があった、でも、意思表示なり何なり、視線の一つなりで通じちゃうのよ。でもさ、それってフツートの事。

(アるべきカタチへ)

(有るべき形へ)

(見るべきカタチへ)

(みるべき形へ)

リアリスは、どこまでも自由だった。ジャバウォックがそばにいた。

イーザもいた、エリスもオリオンも……仲間が居た。

彼は前を向いていた。

私は光の中にいた。

私は……光……。

いや、光は、光こそが……私達！！

第二十三話 皆笑って！

「おお……何ですか、あの光は」

彼、“英雄”の意味を名に持つ男ナデアフは、砂の海より立ち上る、光の柱を見て、思わず言った。

彼は先程まで、アナウンスを通して語っており、リアリスの、そして兵器らの生みの親でもある。

ジャバウォックを追い、外へと出てきたばかりであったのだ。

「まるで……天を突く剣の様だ……」

ナデアフは、その光景にただただ驚嘆するのみであった。

自分の知らないもの……あのジャバウォックは確かに、ただの機械として造ったものではない、それは認めよう。

だがアレは……まず最初に見せてくれたのが、自己の修復機能、次いで、最適化。

さらには、よく分からないが何らかのフィールドを、目の前で構成しているのだ。

自分としては、いや製作者にしてみれば、これ程気味の悪い事はなかった、最初は。しかし、それが段々と……あの強大な悪魔を圧倒してゆくたび、背筋をぞくぞく、と何かが通り抜けていったのも

事実であった。

恐らく私は、興奮していた……誰にも解けない数式を一気に解いた、数学者の様な心地だったと思う。

ハッキリ言つて、ジャバウォック自体の構造は、アルミューズのもの元になっている。

だが、全てを効率化しリアリスを組み込む構造とし、また、ジャバウォック本体のブレインには実在の少年の意識データを使用した。

ヒトの意によつて制御する機械を造り出す事は……私の目的であり、あの男の兵器を上回る手段でもあった。

「フフ……ハハハハハ、私はあの男ですら出来はしない高みに辿り着けたのです。どうですか、あの光景は、長い長い年月をかけたかいたがあつた」

どんどんと昂ぶる、昂ぶる感情、感性、感興。リアリスがもう、戻つて来ないのは分かっている、それは仕方がない。下手をすれば私に牙を剥いてくるだろう。

だが、彼女らを失つても、彼女らの残したデータと結果は非常に興味深いものであった。

リアリスとジャバウォックのデータは、実に詳細に残っているし、私の手足となる連中だつてすぐに再生出来る。なに、また造ればいいのだ。

恐らくはあの龍の再現に、もう一年とかからないのではあるまいか。そして、リアリスのデータを再現したダミーを搭載すれば、あの様な不安定さもいくらかは改善され……。

「“英雄”、だな。残念だがお前は、ここで終わりだ」

と、これからの事に胸膨らませていたナデアフに、声を掛ける存在があった。

「何者ですか!?!」

すると、月明かりの中、砂の山に静かに降り立つ、何か……。

ナデアフには、一見ヒトの形をした何かが、ヒトでない事がすぐに分かる。

背中には、光を放つ一対の翼……あれは、プラズマウイングか!?!

そして、はつきりと何かの姿が見えた。女性のシルエット……黒い髪の毛、その人型の何かの右腕は、左腕の二廻りも大きかった。

「……アルミューズの、刺客ですか?」

その問いかけに、女型の何かは口の端を吊り上げ、答えた。

「まあ、そういう事だな、“英雄”よ。オリオンは使命を放棄した様だしな……完成したばかりの私の初仕事だ、気合いは入っている」

「そうかつ、アナタはあの男の狂気の産物、CHVシリーズですか!」

「ほお、知っていたか。」名答だ

「……だが、私にはまだ戦力があります、出でよヨロイ達!」

ナデアフの言葉に反応したのか、砂の中から一斉に現れるヨロイ達。彼らの組織の戦闘員に当たる連中だ。

「タイプゴーレム……アルミューズ様のものを奪い、しかも欠陥品としたか」

「黙りなさい、ヨロイらよアレを倒せ!」

造物主の合図と共に、無機物らは行進した。数十の物量で相手を取り囲み、ターゲットを始末するつもりの様だが……。

(さあ、ヨロイらの相手をするのに飛行しなさい……そうしたら最後、まだ残存しているオルトロスが居ます。単純な飛行では、キヤノンは避けられないでしょう……)

オルトロス……それは巨大な機械の犬。ナデアフにとってはジャバウォックに次ぐものとしての位置付けである。

背中に二門のリボルバーキャノンを装備しており、対空性に優れている。射ちだされる弾丸は、人が受ければ跡形なく、ヨロイならば一撃。

射程もキロメートルゆうに超える。その範囲内に……二機存在している。さあ、飛行しようが地を歩こうが、欠陥品のCHVシリーズなどで、この私を始末できるハズが……。

「貴様はどうやら、欠陥だらけの私の姉らしか知らない様だな」

と、人型は、巨大な右手を砂の上に軽く置く。たったそれだけの行動であったが……。

「アブソリュート・ゼロ」

(……ザ……イー……ザ……)

声が聞こえた。その声は、イーザを覚醒させるのに十分だった。

「ん……………?」

彼は、ゆっくり目を開いた。誰かが自分の名を呼んだのだ。まず、目に入ってきたのは……。

「ん……………」

赤い二つのタラコがああああああ!!　ちゅーっ、ちゅーっ、タラコじゃない、唇だ。

すっ、吸われるっ、口から全部吸われちまう!!　何て吸引力だっ、お前は吸引力が変わらない唯一の掃除機かっ!!

「んんんんんんっ、んんっ、んんんっ！！（何しやがるっ、死ぬッ、死ぬって）」

「キサマらああ、何をしているかあ！！」

別の声がしたかと思うと、途端にイーザ、そしてリアリスが跳ね飛んだ。

それでもリアリスは唇を、イーザの唇から離さない。吸盤でも付いているかの様だ。

「んんっ、んをんんんっ！！」

「ええいつ、離さないか小娘エ！！」

駆け付けたエリスの力で、ようやく彼女はイーザから引き剥がされた。下手をしてたら唇だけ千切れてしまいそうだった。

「えほっ………がっ………こっ、殺す気かテメエはあ！！」

「だってえ、ようやくイーザとちゅー出来たんだもん！！」

「んなもん、俺が寝てる間にそっとすればいいだろうがあ！！」

「それじゃゴークンって奴になるでしょ？」

「ならねえよっ！！」

彼女は笑っていた……とびきりの笑顔だ、無邪気さが覗ける顔で

だ。人に大ダメージを喰らわせておいて、だ……しかし、やっぱり、リアリスはこうでなくては、と。

「何だ、起きた途端イチャイチャしてるのかい、これだからサカリ組は」

次の声の主は、多分ここ、病院か何かの個室なんだろうが、入口扉の横で、背中を壁にあずけカッコつけて立っていた。

オリオンである。おおつ、両手両足が健在だ。そして表情に、正義の輝きが戻り生き生きとしている。

「オリオン、お前、もういいのか!？」

「いや……まあ、そうなんだけど……ぶっちゃけ何で治っているのかよく分からなくて」

……何ですと？

「ついでにさ、イーザ……何故か彼も居る」

と、オリオンが言うのと同時に、もう一人、ぬつと室内に入ってきた。漆黒。

「お前は……!?!」

「お前呼ばわりとは、また随分だなイーザよ」

トイードルディーであった。あの時、ジャバウォックに対し、その身をかけて突撃し散った彼だ。

「ええっ、何で……どうしてお前が……確かにバラバラになって……」

「ああ、いや私も何故かは分からないんだが、こうして生きていく」

「お前もか……」

「一体全体何が起こったのだろう、と現状に至った訳を理解出来ないイーザら。よくよく考えてみれば、自分だって動けるかどうかの重症だったハズなのだ。」

「だというのに、今は全くといっていい程その形跡がないのは、どういう事なんだろう。結果オーライなんて考えたくはなかった。」

「それについては、ボクがセツメイするよ」

「あれ、何だか聞き慣れない声がある。まだ、変声をしていない少年か、あるいは少女の声である。」

「誰だ」

「ゴメンゴメン、オドロかせちゃったね」

「と、リアリスの左肩に、何かが飛んできて留まった。一見、小鳥か何かかと思っただが、その正体はなんと、ジャバウォックであった。」

「五百分の一程度のスケールとなってしまうていた、プチドラゴン」

だ。

「ボクは、シヨウシンシヨウメイのジャバウォックだよ。あの、リユウだ。それで、ナンでキミたちがタスかったかというと、あのヒカリのおカゲだよ」

えーと……微妙に聞き取りづらいな、コイツの声。所々、機械で合成した様な音声になる。

と、イーザの意図を汲み取ったかどうかは知らないが、リアリスが説明を引き継いだ。

「あの光は、ヒーリング粒子だったのよ。ほら、ジャバウォック君も再生能力もつてたじゃない、それを一気に拡散させたって訳。つまり、あの光の中にいた存在は、皆回復したって事よ」

随分とぶつ飛んだ話だな、それ。第一、機械のみならず人体も治るものなのか？ まあ、この際それを無視しても、なんでディーまで居るんだよ。

「トイードルディーは、ジバクしたとき、ハヘンになったよね？それがボクのボディにフチャクしていて、サイセイしたとき、ボクのブヒンとしてツカわれてたんだよ。」

「だから、ディーの生体データが残って、あの光の中、ジャバウォック君自身の部品を使って再構成したのよ、彼の身体を」

……ここまで来たらファンタジーじゃねえか。破片って……脳ミソやら内臓やらも修復したのか？ 確か奴はアドヴァンスド・ヒューマンだから、大部分は生身のままじゃ……。

「イーザ……私は多分もう、オリオンと同じだろう。分かるのだ……この身体に温かみは既に、ない」

「うん……そうさ、ブラックも今日から僕と同じだ、大丈夫、すぐ慣れるさ」

「……ああ、そうだな。先輩として頼むぞ、レッド」

オリオンもディーも、互いに気遣いなどしていない様だ。フツー、そうは言わないもんな。

「ね、ところでイーザ、二人で散歩でもしない？ 二・人・で！」

リアリスが、やけに一部を強調し言った。

「ボクもダメ？」

「ごめん、ジャバウォツ君も待っててよ」

「リヨウカイ……」

プチジャバも、何だか頭を垂れ、今度はディーの肩にとまった。

「じゃ、行こイーザ」

「ちよっ……おっ、おい」

イーザの腕を引っ張るリアリス。例の、原理不明の乙女パワーだ。

まあ、もう不明じゃない。彼女もアドヴァンスド・ヒューマンみたいなものだから、一般よりちょい強い程度のイーザを引き摺れるのも当然だった。

「……………」

二人の足音が聞こえなくなるのと同時、おとなしくしていたエリスもまた、歩き出した。

「ん？ 悪魔エリス、どこに行くつもりだい？」

「やかましい……………ちょっと用事を思い出した」

彼女は吐き捨てる様に言い残すと、足早に部屋を出て行った。

「何だよ……………悪魔め、何を企んでいる……………」

「察してやれ、レッド」

「そうそう、カノジヨはコワイヤツだとオモってたけど、カワイいところもあるんだね」

やがて、三人も自然と病室をあとにした。

第二十四話 今、君にありがとう

「ほらイーザ、早く早くうー!!」

リアリスがイーザの手を引き、道を駆けて行く。イーザはなされるがまま、というか彼女の強引さに半ば諦めているというか、そんな感じであった。

「てかよ、いい加減放してくれ、付いてくから」

「ダメっ、手は繋いどくのー!!」

やれやれ、相変わらずだ。しかし、これで本当に大丈夫だとも思えた。

彼女はすっかり元気だ。むしろピンピンし過ぎている。自分のした事を少しでも反省するのかと思っただが、どうやら素振りさえ見せないらしい。

だがそれは、悪い事ではない。美德の一つといてもいいのではないだろうか。

彼女には、周りを元気にさせるパワーがある。絶望などといったものからは、対極に位置しているのだ。

普通、リアリスのような境遇で生きれば、もっとひねくれそうなものだが、彼女はそうならなかった。彼女の元気は天賦の才だ。

「ほらっ、ここよ」

「ん？ …… じじって……」

てつきりイーザは、こう……何とこのか景色のいい所だとか、花の咲き誇る草原だとか、そういう場所に連れていかれるものと決め付けていたのだが、辿り着いた場所は何と、ゴミ捨て場であった。

さっぱりリアリスの意図を理解出来ぬイーザに、彼女はクスクス笑い、言う。

「へへっ、ここはね、あの日イーザと出会う直前まで住んでた所なんだ。ほら、あそこのボロいベッド、あそこで私は寝てたんだよね」

と、彼女は、片隅に存在する粗大ゴミを指さした。布団は新聞紙の様だ。

「あっ……そう、だったのか……」

「でね、あれはイーザと会う五分位前だったかな、あの男達に見つかってさあ……」

と、そこからは彼女の独壇場。まるで、楽しくて楽しくて客のペーイスを気にせず突っ走る、バスガイドのようだ。

やれ、私はここをくぐったただの、ここを抜け逃げただのとはしゃぎ、また道々に寝転び、あるいは座り込む人々と挨拶を交わしていた。

人々は口々に、いつも言っていた玉の輿かい、と言っていた。それを聞く度、彼女は自慢気に、へへっ、と笑ってみせている。

「それでね、ここが初めて目が合った所でしょ？」

と、彼女は振り返って言う。成程、確かにここは、そうだった。あの時俺は、複数の足音に気付き、隅の方へと避けていた。

そこにリアリスと男らが、通り過ぎていったのだ。

「私はイーザを見て、迷子かなと思ったんだけど……イーザはどう思ったの、私を見て」

「ん……ああ、えっと……」

正直、ああ、何か追われているのかな、と思った。そして視線とえば、今だから告白するが……揺れる、二つに……釘付けだったんだよな。

彼女、タンクトップ一丁で下着はつけていなかったから……仕方ないだろ、男なんだからっ！！

それで……えっと、抱きがいのあるりそうな商売女だと思って、追いついて行ってただけ……そして近くで見たり話を聞くと、子供っぽいから止めた、とか……こんな事、言えるはずがない。

「ん？」

早く答えると、リアリスが視線を向けてくる。……仕方ない。

「えっと……キレイな女の子が追い掛けられている、助けなきゃーと思っていた……」

「ウソよね？」

「うああっ、完全否定の目だ。分かったよ、正直に言いますっつてば。」

「え……えっと、その……いい……バストをした女だな、と」

「でしょ？ やっぱりね、自慢の一つだもん、分かったた」

マジでか……。

「それで、ここでイーザがアイツらをボコツてえ」

しかし、よく覚えているなりアリスは。

「ほら、イーザがウソついたじゃない、ヤル気出す素振りがどうとか、なんだとか言い訳して私を遠ざけようとしてた。ホントは興味津々だったんでしょ？ 汗いっぱいかいて、タンクトップもちよつと透けてたしね」

ええっ！？ いや、そこまでは……いや、チラッとは見たか？

「ね？」

「っつ、これは同意を求める目だ。下の方から、俺の顔を覗き込んで来る。」

こうなると、女つて奴は夕チが悪い……何を言った所で言い訳にされてしまうだろう。

「……ああ、あの時のお前は……エロかったな……多分……」

「でしょ？ だからホテル連れていかれる時だって、期待が膨らんだから途中で抵抗止めたんだよね」

観念したんだよな、アレ……。

「んで、ここがホテルでしょ？」

うん、そうだったな。

「このの、この部屋に入って……」

うんうん、そうだな。

「イーザがシャワー浴びに行つて……」

間違いないな。

「はい、じゃあ続きね」

何イイイイ!?

いつ、いつの間にかタオル一枚のリアリスをパンツ一丁の俺がベツドに押し倒してしまっている!?

バカな、意識でも飛んでいたのか俺はっ!!

「えっと、まずは上から？ それとも下から？」

ぐっ……はしたない事言っんじゃない！！ なのに……うむ、まずは上からかと、真剣に考える自分もいる、くそっ、抗えないのか！？

「どうした二等兵、早く任務を遂行するんだ、今しかない」

誰の真似だ今のっ！！ っていつか全部、計算ずくかよコイツ……。

でも、まあ……あまりにキレイな光景だな、とは思った。さすが、遺伝子的にもイトコ取りの彼女は、全部が最高近いものだ。あたかも、芸術品の様だ。

その至高のものに、日焼け跡というアクセント。これがより一層、なんというのか……イイ。

「……分かったよ、リアリス。んじゃ、行くぞ？ 後悔は……ねえな？」

「んっ……」

よし、それじゃ、行く……………。

「ここであ、僕やブラックが登才場したんだよねー！！」

「うむっ、そうだった、深いなっ!!」

と、そこでアンドロイド二人衆。そうだったなあー、出て来たなあー、アハハハハ!!

「そこまで再現してんじゃねえ、アホ二人イイイイ!! もう少しだったのに何て事をを!!」

「ええっ!? 思い出を振り返っていたんじゃないのかい? 僕はてつきり……」

「ああ、私もそう思っていた。それにイーザ、窓の外をしてみるがいい」

デイーに言われるがまま、彼が窓の方を見てみると……エリスが、張り付いていた。

しかも悪魔らしい、害意を秘めた表情でだ。

「ちよつとオ、皆して何で私の邪魔をするのよオオ!!」

「いや、リアリス、君さ……実は十六歳なんだよね、今」

「えっ!? なっ、何、どういう事!? この作品に登場するキャラクターは全員、十八歳以上じゃ……」

「オリオン、俺も確か、彼女が生まれたのは十八年前だと聞いたんだが……」

「タシかに……でもね、それはチガうよ、リアリス」

「ジャバウオツ君まで！？ イヤ、ダメ見ないでええー、大人の階段昇って薄汚れていく私を！！ 君はまだ純粋なままでいてええー！！」

「ナニイってるんだい……ボクはベツに、ナンともオモわないよ。まあ、ジジツはジジツだ、オリオンのキキマチがいかナニかだね。セイカクには、15ネンと11カゲツマエだ、キミがカタチをナしたのは」

「なっ……なんじゃそらあああああ！！」

リアリスの叫び声が、ホテルの中でこだました。

ちなみに……余談ではあるのだが、十六、という漢字があったとしよう。

その、六、という文字の上部分、部首、なべぶたを取ってみよう。すると、六は八になってしまうのだ。

オリオンは、見間違えた訳ではない。たまたま、手に入れた資料の一部が、滲み消えてしまっていた。彼は、そこまでバカではなかったという訳だ。

某空港にて……。

マントコート、二人。タンクトップ一人、スーツ一人にお手伝いさん服一人。怪し過ぎる集団であった。しいて言うなら、若い男女が共通点だ。

チケットも買ったし、いよいよ皆とお別れの時が迫っている。イーザはエリスと並ぶ形で、残りの者と向かい合っていた。

「イーザ、今まで世話になったな、ありがとう」

「いや、いいよ。俺だって……お前の弟を……」

「それは、違う。あれは仕方なかった事なのだ。それに、ダムならいつでも、ここに居るさ」

と、デューは自分の心臓があった箇所の上を、静かに押さえた。そうか、お前はもう、一人じゃないんだな……。

「すまん、ありがとうな、デュー……」

「ああ」

続いて、オリオンが口を開く番だった。

「イーザ、君は間違いなく僕の友だ。だが……一つだけ、はつきりとさせておきたい。君は普段、何をしている人間なんだい？」

彼は、固い面持ちのまま、言葉を続ける。

「この地にだって、ただの観光で来た訳じゃないんだろう？ それに、悪魔と知り合いの様だ、その辺りを明確にしてくれるかい？」
そういえば彼は、悪魔に対し並々ならぬ感情を持っているの思
い出した。何せ、手足を引きちぎられたらしい。

そんな、悪魔と親しげにしているという人物……気にならないハ
ズはないだろう。ここは、キチンとしておくべきだ。

「オリオン、俺はゴーストバスター、イーザだ。結構有名なんだ
ぞ？ まあ、つまりあれだ、人外を退治する仕事をしている。ユー
レイから悪霊、果ては悪魔まで、な。エリスは、その過程で知り合
って、意気投合、今は協力関係という訳なんだ」

「……………」

「本当なのかい？ エリスはなんだか渋い顔してるけど……それ
に、彼女は君が居るのに攻撃してたけど、そこは？」

「あつ……ああ、それはだな……」

「我が主であるならば、あの程度の状況、どうにか出来ると判断
したからだ」

ウソつけ、と心の中で思ったが、それは敢えて口に出さない。別
れのタイミングで、話をこじらせたくないのがあるからだ。

「ふうん……たいして強くないクセに、妙に信頼されてるんだね、
君は」

「ははは……そうなんだよ、いや、ははは……」

「まあいいや、イーザ、死ぬなよ、いつかまた会おう」

「おう、お前もムチャし過ぎるなよ」

さて、そこまで話してから、最後はリアリスだった。彼女は、待ち兼ねていた様で、イーザ目がけ駆け出し、立ちはだかったエリスをも避けて、彼の懐へ飛び込んだ。

「ぐほあっ！！」

「イーザ、ゴメン、私まだガキだから、十六だから（数えで）まだイーザのものになれない！！あと二年と一ヶ月だけ待って、そうしたら会いに行くからっ、その時はお願いね！！」

（……こだわるな……日本じゃ十六でも結婚は出来るんだが……言わない方がいいか）

「だから、家の場所と電話番号、家の間取りと合鍵をちょうだい！！」

「犯罪の匂いがしねえか！？まあ、屋敷の住所とケータイの番号は教えるけど。えっと……ほら、これでいいか？」

メモ帳を持ち歩いていたイーザは、やはり持ち歩くボールペンをもって、住所、そして電話番号を記し、ちぎって彼女に渡す。

「うん！！ありがと、ジャバウォツ君、大切にしまって」

「うん、リヨウカイ」

と、プチジャバの腹部がパカッと開く。まるで、コックピットの様だ。しかし人は乗らない、メモ片を一枚収納した。

なんだか彼が、単なる便利家具に見えて来たぞ。

「じゃあ、イーザ……私、忘れない、絶対に」

おおっ、感動的なシーンに………ならなかった。リアリスはイーザから離れ、エリスを指差し叫ぶ。人目もはばからずにだ。

「エリス、このアマあ、イーザをちゃんと守りなさいよ、二年と一ヶ月後まで確実に！！ あと、あんたあ、いくらイーザと一緒に居るからって寝取っちゃダメだからねっ、よぉー……く覚えときなさいよー！！」

「フン……一応は契約者だ、死なせはしない。だが、コイツは所詮人間、寝取るなど有り得んな」

「どーだか、実は今も結構、惹かれてんじゃない？」

「有り得んと言っている」

「……ま、そういう事にしといたげる。……イーザ、私はこれからまだまだ女を磨いて、一番キレイになってアナタに会いに行くよ、だから……今はさよなら！！」

恐らく、彼女が出来る精一杯の笑顔であったに違いないだろう。

だが、その瞳は静かに訴える、一緒に行きたい、と。

だけど、本人がそれを抑えるというのならば……瞳に伝えてやるべきじゃない。

イーザは皆に背を向けると、右手をあげ、親指を立てた。

「また、会おう」

第二十五話 エピローグ

相変わらずの、ぎらぎらとした日射しが照りつける午後のひととき。

連日、日中の気温は三十度を超え、夜は氷点下近くまで下降、そんなこの土地にも町は存在していた。

何故、人々はこの様な所で生きて行くのか……それは、豊富な地下の水脈や天候、土地に恵まれているからである。

だからこそ、この獄界とも思える土地に人々は根を下ろし、暮らして来た。

その町にあつて、天使、あるいは砂の山に咲く一輪の花、と言わしめた少女が居た。

その彼女が今しがた歩いているのは、通称、汚水通り、いわゆる裏路地である。

少女は、タンクトップ一丁にショートパンツというスタイルであった。タンクトップは若干黄ばんでいるし、ショートパンツは天然ダメージ状態、だが、ワイルドでラフなイメージを持たせる事には成功していた。

あの頃より、更に成長した座高と胸部のふくらみは、上半唯一の布をより上へと持ち上げ、はからずもへソ出しルックとなってしまう。

「ねえ、ジャバウオツ君、今どれくらい経った？」

その少女、リアリスは自身の肩に乗る、プチ機械龍へと話し掛けた。

「リアリス、あれからマイニチそのハナシだね。ニネンとニジユウシチニチだよ」

「んふふふ、あーと三日、あと三日っ」と

その答えに思わず、笑みがこぼれた。あと三日だ……あと三日で私は晴れて十八才となる。

あれから特に何をして来た訳ではないけれど、女を磨いていた、とは本人の豪語する所である。

まあ、より女らしいシルエツトへと身体は変化し、表情からは大人の色香、とでもいうのだろうか、そういったものが見てとれる様にもなった。

さて、その様な美しい娘が路地を一人で出歩けばどうなるか……この土地に長く住んでいる者は、別に見慣れたいつもの光景だろう。

しかし、この町へと入って来たばかりの人間、しかも悪意を秘めた者にとって、この光景は……。

「おいおい……上玉じゃねえか、あの女」

となるだろう。あまりに無用心である。

「本当だ……へへっ、何だってあんないい女が……」

「どうだっていいぜ……おい、そこのお嬢さん、いくらだ？」

と、男ら三人は、リアリスに近づく。彼らは別に声をひそめていた訳ではないので、それで逃げ出さないリアリスは合意しているものと判断した。

まあ、彼女はただ単に、無視を決め込んでいるだけである。

しかもたまたま、タイミングよく鳴ったケータイ電話を見る方が重要だったのもある。ちなみに、メールの着信メロディーは“必殺仕事人のテーマ”であった。

「おっ、これはイーザからだ！！ やっぱ手紙ってメンドくさいけど、これはお手軽だよね」

リアリスは一時期、ちょっとしたアルバイトをして金を貯めていた。

その後、海外にてケータイを入手……したまではよかったが、この砂漠のど真ん中の町では、どうあがこうが圏外だった。

だから、ジャバウォックに取り込ませ改造、今やこの土地ですらアンテナ三本、マックス状態という、オーバーテクノロジーな代物が完成したのだ。

「えーっと……なになに……」

「オイッ、無視してくれてんじゃねえぞ」

しかし、しびれを切らせた男が一人、手をスツと彼女に伸ばした。スキンヘッドの大男だ。

“リアリスへ

久し振り、元気か？”

(……ふーん、出だしはいつもワンパターンだね。イーザはメルとか、あんまりやらないのかな？)

リアリスは、背後から伸びて来た腕を、振り返りもせず回避した。

「おっ……？」

“実は、俺は今度、ある事件の收拾をつけなくてはならなくなつた。お前と約束の期間は確か、あと三日だったと思う”

(わあ、イーザも数えてくれてたんだ、嬉しいねえ)

さらに残り二人の男らも、伸びて来ているのだが……目も向けず、やはり回避。

「チイツ、すばしっこい姉ちゃんだ……」

「んな格好で、誘ってるクセにさあ……」

ついには二人が彼女の進行方向へと回り込み、通せんぼした。

“だが、俺がやるのは戦争を止めるって大役だ。最低でも二週間

はかかりそうだから……約束は少しだけ待って欲しい。屋敷は留守にしているからな”

(……って、ええっ!?! マジで!?!)

「いいだろうがつ、なもっヴオ……がつ!?!」

不用意に話しかけたモヒカンが、顔面に一発、いいのをもらって倒れこむ。一切の予備動作なく、彼女は攻撃を繰り出したのだ。

「なっ……オラアツ、テメエこのアマ、よくもモヒカンを!?!」

「もういい犯っちまおうぜっ!?!」

ザコ、やられるべきザコキャラフラグを立て、彼らは二人がかりでリアリスを捕らえに動く。

相変わらずケータイの画面だけを凝視するリアリスは、返答をパパッ、と現役女子高生顔負けの速度で入力しつつ、軽く身体をひねりジャンプ。

返事すると同時、長くちよつと太めの足から回転蹴りが繰り出され、男らを跳ね飛ばしたのだ。

トツ、と無駄なく着地し、彼女は待ったなしで駆け出した。その行き先は町の外、すなわち砂の山の上であった。

「ちよつとリアリス……ナニするキなんだい?」

「イーザの所に今すぐ行くのよ、待ってらんないわ!?!」

「ええっ！？ そんなムチャな……」

「アナタなら大丈夫っ、じゃあジャバウォツ君、トランスフォーム！」

「シカタないな……」

ジャバウォツは観念し、リアリスの肩より離れる。

…身体が開いていった。
…身体が開いていった。
…身体が開いていった。

まるで三千面くらいあるサイコロをバラしているかのようだ。そして限界まで開ききってから、再び再構成、結果……。

「ジャバウォー……ツクうう！！！」

龍の復活であった。あの、イーザらを苦しめた巨大な龍の完全再現だ。

「よし、んじゃ乗るよ」

（どうぞ、リアリス）

もう、彼女が張り付く訳ではない。胸部がパカッと開き、乗り込める様になったのだ。今、プシュツと音がして、扉が閉じる。

（じゃあ、イこうか？）

「うん、ジャバウオツ君、テイクオフ！」

龍は翼を広げ、背面のブースターよりフレアを発し上昇してゆく。そしてすぐに空の彼方へと消えていった。

Re:イーザ

私は待たないよ。うん、ただか三日位おまけしてよね。今からそっち行くから、今度こそお願いね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5102m/>

サキュバスキラー Project Re Alice

2010年11月3日01時20分発行